

「共有・協働・共感」し合う校内研修を目指して

福島市立三河台小学校

教諭 野口 卓也

1 はじめに

本校に勤務していた若手のA先生が、職員室の雑談でこんな話をしていた。

同僚の先生：A先生って最近、事後研究会で自分の見取った子どもの姿をたくさんしゃべるよね。

野口：たしかに！何か自分の中で変わったことがあるのですか。

A先生：三河台小学校に来る前は、校内研修への参加にものすごく消極的でした。でも、最近はどういう視点で子どもを見取ればよいか分かってきたし、研修全体会や事後研究会で自分も意見を言えるようになり、研修が楽しいと思えるようになってきました。

野口：なるほど～！研修主任としてありがたいお言葉です！

同僚の先生：たしかに、先生たちが同じ方向を向いて研究できている感じがするよね。

この話を聞いた時、本校の校内研修が、A先生にとって価値あるものになっていることを感じた。それと同時に、同僚の先生も校内研修のよさを見つけてくれていて、大変ありがたかった。では、どうしてA先生はじめ、本校の先生方は校内研修に積極的に取り組んでいるのだろうか。その理由について、研修主任の立場から自分なりに振り返ってみたい。

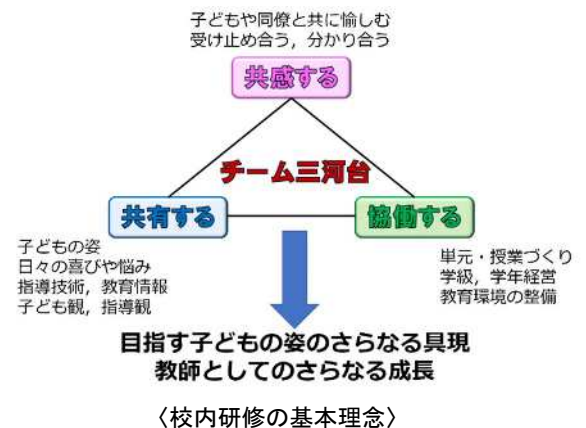
2 現在の三河台小学校の様子から

本校は、理科・生活科を中心に研究を推進してきた伝統がある。最近では「低学年の経験がなく、生活科をどのように進めていけばよいのか分からなくて…」

「三河台小学校に来るまで、理科を担当したことがない」といった教員も少なくない。そこで、次のようなことを大切に、校内研修を推進してきた。

前述したA先生のように、教員一人一人が校内研修に楽しく取り組めるようにするために、右図のように「チーム三河台」を合言葉にして教員間の結束力を高め、「共有・協働・共感」することを大切にして校内研修を推進することにした。

また、本校は「学びを構築する子どもの育成」を研究主題として、理科・生活科を中心に研究を進めてきた。「学びを構築する子ども」の具体的な4つの姿として、次のように設定した。



- ① 自ら問題を見だし、解決の見通しをもつ姿
- ② 試行錯誤を通して、対象に繰り返しかわりながら、考えや方法をよりよいものにする姿
- ③ 事実や体験、友達とのかかわりを基に、自分なりの考えを創り上げる姿
- ④ 学ぶ前後の自分の変容を自覚し、次の学びにつなげようとする姿

この4つの具体的な姿を全教員で共通理解して授業実践に取り組むことで、授業の中で同じまなざしで子どもの姿を見取り、共有していくことができるようになった。また、放課後の職員室では「今日の授業で〇〇さんが、こんな考えをノートに書いていたよ」「子どもたちがこんなことを試したいと言っているのですが、どうやったらできますか」など、その日の授業で見られた子どもの具体的な姿を基に、授業について語り合う様子が日常的に見られるようになってきている。

3 校内研修の実践

「チーム三河台」として、全教員が「共有・協働・共感」し合う雰囲気を作っていくために研修主任として取り組んだことについて、次の3つの視点で紹介する。

- ◎ 求める子どもの姿の共有
- ◎ チームで考え、創り上げる研究方法の工夫
- ◎ 「研修が楽しい」と感じることができる雰囲気づくり

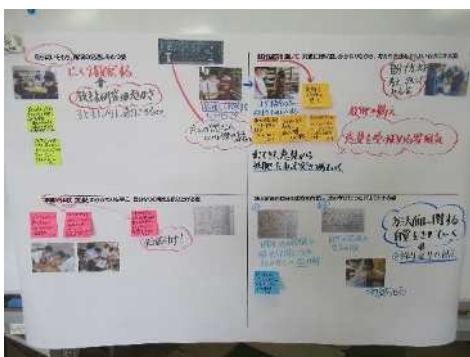
【求める子どもの姿の共有】



〈目指す子どもの姿を話し合う教員〉

目指す方向性を明らかにする

本校の研究主題を立ち上げる際、まず研究の方向性を検討していくワークショップから始めた。低学年、中学年、高学年のブロックに分かれ、理科・生活科の授業場面における「学びを構築する子ども」の姿を、理科・生活科で育成する資質・能力を基にイメージをして付箋紙に書き出し、分類した。そして、分類した中からキーワードを挙げ、それらを基に上述した本研究で求める具体的な4つの子どもの姿を設定した。そうすることにより、教員が共通のまなざしで子どもを見取ることができるようになり、共通言語を基に授業について語り合うことができるようになっていった。



〈ワークショップで作成した模造紙〉

毎学期の振り返りと次学期に向けた見通しの共有

毎学期末に、全教員で設定した本研究で求める具体的な4つの子どもの姿と、授業で見られた子どもの姿を関連付けるワークショップを行った。各学年ブロックでは、授業で見られた子どもの姿を付箋紙に書き出したり、撮影した写真を出し合ったりして、4つの子どもの姿に分類した。このことにより、子どもの固有名詞を挙げながら協議を行うことができ、各学級の子どもの育ちについて共有しやすくなった。また、本研究で目指す子どもの姿のイメージがより明確になり、その後の授業実践で大切にしたいことや具体的な取組についての共通理解を図ることができた。

【チームで考え、創り上げる研究方法の工夫】

「自分事」として提案授業に関わることができる事前研究会

本校では、各学年ブロックで1回ずつ提案授業を行っている。その際、1か月ほど前に事前研究会を開催している。授業者は指導案を作成せず、構想途中の単元のイメージや本時の学習過程を基に協議をしている。そうすることで、教員一人一人が自分事として提案授業に関わろうとする意識がもてるようになった。また、多様なアイデアを気兼ねなく出し合い、教員同士が協働して授業づくりに取り組む雰囲気が醸成された。



〈教材を囲んでアイデアを出し合う教員〉

教員一人一人に学びがある事後研究会

【自分の考えを深めることができるグループ協議】

提案授業を参観した後の事後研究会では、グループ協議を2回設定している。1回目は「教員経験年数別グループ」で協議し、2回目は「ランダムグループ」で協議している。「教員経験年数別グループ」では、経験年数に応じた気付きや自己の課題を基に協議をすることができた。また、若手教員は、授業を参観して感じたことや考えたことを、同世代の教員と共有できることで、安心して協議に参加する姿が見られた。「ランダムグループ」では、1回目で協議したことを持ち寄って協議を行った。若手の先生も、自分が考えたことやグループで話題に挙がったことをベテランの教員に自信をもって伝える姿が見られた。

【授業者が授業についての学びを言語化する場の設定】

授業者は、各グループを回り、協議に参加する中で、授業で見られた子どもの姿を教えてもらったり、授業場面における質問に答えたりするようにした。そうすることで、授業者自身にたくさんの気付きや学びが生まれるようになった。事後研究会の最後には、授業者から振り返りを発表する場を設定した。それにより、協議内容を基に、授業における働きかけを省察したり、次時に向けての授業改善の視点を語ったりする姿が見られた。

【参観者が授業についての学びを言語化する場の設定】

事後研究会終了後、振り返りシートを配付し、参観した教員一人一人に振り返りを記述する場を設定した。記述の視点として、「提案授業から学んだこと」と「自分の授業にどう生かすか」を提示した。そうすることで、参観者一人一人の研究に対する考えが整理され、次の授業への意欲につながっていった。



〈自分の考えを伝える若手教員〉



〈各グループを回り、協議を傾聴する授業者〉

令和4年度 現職教育振り返りシート 名前 ()	
6/22 2-2 授業研	子ども主体で任せるところと、先生にしかできないところを明確にし、子どもが主体的な学びが繰り返されるようにしていきたい。単元、年間を見通しての授業づくりができるように、自分も学び続けていきたいと思った。
7/5 6-2 授業研	6年2組の研究授業を通して、めあての吟味や話し合いのコーディネートが重要だと改めて実感した。また、子どもたちが課題意識をもつための導入の工夫についても、鳴川先生のご指導を基に改善していきたいと思った。
1学期 振り返り	1学期は研究授業もあり、生活科の授業についてさらに学ぶことができた。具体的な子どもの姿も明確になりつつある。2学期は、子どもの思いから単元構想していくことと、自分の変容を自覚する振り返りの工夫を重点的に行いたい。

〈研修を通して学んだことの累積〉

【「研修が楽しい」と感じるができる雰囲気づくり】



〈初任者の悩みを受け止めるベテラン教員〉

同僚の気付きや悩みを表出できる環境の整備

放課後の職員室において、本校は笑い声が絶えない。それは、研修主任を中心として、互いの気付きや悩みを受け止め、共感する雰囲気を醸成しているからであると考えられる。普段の授業で見られた子どもの姿について、同僚の教員に伝えると「その子どもは、こういう力を発揮できたんだね。〇〇先生のクラスの子どもたち、育っているね」と価値付けてもらえる。また授業や学級経営での悩みを相談すれば、その教員の失敗談やそこから得た学びなどを教えてくれる。このように、教員同士が互いのことを受け止め合える雰囲気ができていることで、研修の場だけでなく、日常的に授業づくりに対する意欲が高まるきっかけが生まれている。



〈本気になってボッチャに取り組む教職員〉



〈メダルをもって記念撮影〉

同僚性を高める「六華パラスポーツ大会」

令和4年度から、教職員間の同僚性を高めることを目的として、毎年夏休みに開催する研修全体会の後に、「六華パラスポーツ大会」を実施している。管理職、学級担任、養護教諭、事務職員、調理員、用務員のすべての教職員を4つのチームに分け、ボッチャやカローリングなどのパラスポーツを行っている。研修部が中心となってメダルも製作している。

どの教職員も本気になって取り組み、白熱した戦いが毎年繰り広げられている。一人一人のプレーにみんなで一喜一憂したり、よいプレーがあったらみんなでハイタッチしたりする教職員の姿がたくさん見られる。このイベントを行うことで、教職員の間に助けを求めやすい関係性や風通しのよい雰囲気醸成されていく。これは、校内研修の推進はもちろんのこと、校務運営にもよい影響があり、みんなで学校を運営していこうという意識の高まりも感じることができる。

4 成果と課題（○：成果 ●：課題）

【求める子どもの姿の共有について】

- 求める子どもの姿を基に、授業や学級・学年経営の話をする教員の姿が増えていった。同じまなざしで子どもを見取り、語り合える雰囲気が醸成されていったことは全教員が同じ方向を見て、校内研修ができている表れであると考ええる。
- 初めに設定した求める子どもの姿での校内研修が続いているため、これまで見られた子どもの姿やさらに求めていきたい子どもの姿を出し合い、今の目の前の子どもの姿に応じて修正・改善していくことを今後行っていきたい。

【チームで考え、創り上げる研究方法の工夫】

- 事前研究会を授業日のおよそ1か月前に設定したことで、授業者だけでなく全教員が授業構想段階から関わることができ、自分事として授業づくりに参加する姿が見られた。
- 事後研究会では、子どもの固有名詞を出し合いながら、どのような学びがあったかを様々なグループで協議できるようにしたことで、どの教員も自分の気付きや考えを表出することができた。
- 授業者が各グループ協議に参加して、質問を受けたり、授業における意図を伝えたりすることで、授業者自身が授業を見つめるよい機会になった。ある授業研究会で、授業者が「授業をやって良かったです！またやりたいです」と言う姿もあり、学びが多い研究サイクルになっていると考える。
- 事前研究会や事後研究会で協議したことを、教員間で共有することが不十分であるため、模造紙やICT機器を活用した情報共有の在り方を模索していきたい。

【「研修が楽しい」と感じることができる雰囲気づくり】

- 「六華パラスポーツ大会」を開催することで、教職員全員の同僚性が高まり、校内研修や学校運営によい影響をもたらすことができた。何より、教職員同士が笑顔で愉しそうに取り組む温かい姿は子どもの育ちにとっても良い影響を与えていると考える。
- 教職員それぞれの個性を生かすことができる場を設定し、互いを知る機会も模索していきたい。

誰かを思い、実現する子どもを育てる
～道徳科と特別活動を両輪とした指導をもとにして～

本宮市立岩根小学校
教諭 菅野 健彦

1 実践の内容及び方法

(1) 主題設定の理由について

令和6年度の岩根小学校の教育目標は、「夢に向かって進み、共に幸せな未来を拓く」そして、目指す学校像を、「**さあ行こう！もっと『たい』『よう』輝く学校**」と掲げている。『たい』『よう』には、「誰かのために何かをし**たい**」「みんなでその夢叶え**よう**」という意味があり、そこに自立と共生の理念が込められている。本学級では、『たい』『よう』を叶えるために学級の合言葉を『**実現力**』としている。これは、4月の学級開きの際に児童と考えた学級目標である。「誰かのために」と他者の幸せを願い、一人では実現が難しいことも「みんな」と一緒であれば実現することができる。このような自己決定と自己実現が繰り返されていくことは、ひいては自分の幸せにもつながっていく。そして、児童は共同体のよさやあり方を実感し、自分達で実現できたという目には見えない社会的報酬に喜びを感じる非認知能力が大きく育っていくと考える。

本実践は令和5年度と令和6年度に担任している第5学年2組28名を対象に、**児童の2年間の成長を追い求めたものである**（令和6年度は第6学年2組）。5名の特別支援学級に在籍する児童も交流で共に学んでおり、内容に応じて道徳科や学級会に参加している。また、通常学級における特別な支援を要する児童も学級内に数名おり、個に応じた支援が欠かせない学級である。

児童の実態として、令和5年度に学級編制があり、前年度までの道徳科や学級会の指導に偏りが見られた。しかし、「誰かのために何かをしたい」という他者意識をもつ児童が多く、特に下学年や隣接する幼稚園児との交流に積極的に取り組んでいた。一方で、仲間と共に活動する姿は多く見られたものの、自己評価が厳しすぎるためか、自己有用感や学級への所属感への意識に大きな差も見られた。

上記のことを踏まえ、校内研究との関連を意識し、主題を「誰かを思い、実現する子どもを育てる」とし、副主題を「道徳科と特別活動を両輪とした指導をもとにして」と設定し、児童の自己有用感と所属意識を高め、誰かを思う道徳性の伸長と共に自主的、実践的な態度の育成を目指すこととした。

(2) 手立てと方法について

2年間の個人実践を貫く手立てを以下のように設定し、道徳科と学級会の有機的関連・往還を図ることができるようにした。なお、特別活動は多岐に渡るため、特別活動の中心的役割を担う「学級活動（1）『学級会』」を重視した。

【道徳科の授業づくり】

- ① 多面的・多角的な考えへと発展させていくために、**道徳的価値の段階に合わせたゆさぶりの発問**
- ② 日常生活やこれまでの自分の感じ方や考え方について、より想起することができるための**共通体験を入れた「自己の振り返り」の時間**

【学級会の授業づくり】

- ① **学級会コーナーの充実**
ア) 学級会の議題としてふさわしいもの（指導要領解説 P49）
イ) 議題ポスト、役割札 ウ) 次回の学級会の連絡
エ) 決定事項の掲示 オ) 考えを可視化した個人の短冊
カ) 話し合いを進めるための合言葉
- ② **児童にとって必要感のある**議題の選定と提案理由の設定
- ③ **児童の思いを言語化した**活動後の振り返り

2 実践の成果

以下は2年間の学級会の議題と、道徳科との関連である。(左は令和5年度、右は令和6年度の実践)

第1回「運動会のスローガンを達成するために、どんなことができるか考えよう」	第1回「1年間使える6年2組の旗を作ろう」
第2回「みんなが同じ目標を目指せるように、学級目標の合言葉を決めよう」	第2回「たけひこ先生の誕生日会を企画しよう」
第3回「岩根小150周年をお祝いして、5年2組でもお祝いしよう」	第3回「南達陸上大会お疲れ様会をしよう」
第4回「150周年記念のキーホルダーをデザインしよう」	第4回「学校のために自分達ができることをしよう」 +道徳科：内容項目「よりよい学校生活、集団生活の充実」 教材名 校風をつくるのは私たち
第5回「どんなハロウィンパーティーにしたいか、めあてを考えよう」	第5回「1年生と夏祭りをしよう」 +道徳科：内容項目「親切、思いやり」 教材名 温かい行為が生まれるとき
第6回「いいねカードを作ろう」 +道徳科：内容項目「個性の伸長」 教材名 日本の「まんがの神様」	第6回「合唱部を応援しよう」
第7回「5年2組のあいさつをレベルアップさせよう」 +道徳科：内容項目「礼儀」 教材名 どちらのユニフォーム	第7回「岩根幼稚園の年長さんと交流しよう」
第8回「5年2組のあいさつをレベルアップさせよう～第2弾～」	第8回「学校の大掃除をしよう」 +道徳科：内容項目「家族愛、家庭生活の充実」 教材名 はじめてのアンカー
特別版「駅伝記録会を開こう」 +道徳科：内容項目「友情、信頼」 教材名 友のしょう像画	第9回「教育実習生の先生を迎え入れよう」
第9回「岩根幼稚園の年長さんと交流しよう」	第10回「授業参観で家族に感謝を伝えよう」 +道徳科：内容項目「感謝」 教材名 こだわりのイナバウアー
第10回「自分達が作ったSDGsカルタを広げよう」	第11回「先生方へのありがとう会を企画しよう」
第11回「先生方にありがとうの会を開こう」 +道徳科：内容項目「よりよい学校生活、集団生活の充実」 教材名 森の絵	第12回「6年2組ありがとう会をしよう」

以上の実践の中から、令和5年度特別版「駅伝記録会を開こう」、令和6年度第8回「学校の大掃除をしよう」を紹介する。

(1) 道徳科：内容項目「友情、信頼」＋特別版学級会：議題「駅伝記録会を開こう」

本校には、特設駅伝部が設立されており、毎年10月に本宮市内で開かれる駅伝大会に出場している。数週間前に、児童は道徳科で「本当の友情とは何か」を考えた。登場人物の間には、はたして本当の友情が成り立っているのかゆさぶりの発問をし、全体で話し合う中で、C2児が「私もC1さんが言ったように、本当の友情には『思い』と『行動』がセットになるんだと思います。だから二人には

本当の友情が成り立つと思います。」と他者への共感と、道徳的価値の理解を深める姿が見られた。道徳科を学習した数週間後、駅伝大会が雨天のために中止となった。すると、C1児とC2児が休み時間に担任に学級会の議題について相談しにきた。「**この前の道徳のことを話していて、私のクラスにも駅伝大会に出る友達がたくさんいるのに、中止になったのはかわいそうです。だから、帰りの会での連絡で、みんなに議題を提案したいです。**」と力強く話した。まさに必要感のある提案理由であった。

C3:明日の体育のときにやってあげようよ。

C4:チームはどうするの？

C5:チームを決めた対決じゃなくて、1本のタスキをみんなであつなぐリレーにしたら？

C6:いいね！それなら時間もかからないし、半周ずつ走れば、苦手な人もできるよね！

C7:アンカーは駅伝部にしようよ。

C8:せっかくだから壮行会で作った旗で応援して盛り上げよう。



写真1 帰りの会での話し合い

駅伝大会に出場予定だった児童は、「まさか、やれるとは思ってもしなかった。放課後、毎日練習していたから、みんなと走れたこともそうだし、みんなが考えてくれたのが嬉しかった。」と、その日の帰りの会で感想を述べた。すると、「**2組はできたけど、他の学年にも駅伝部がいるから、その子達もなんとか走らせたいよね。**」と、学級の枠を越えて「たい」「よう」が生まれた。実現させるために、児童は代表委員会に議題を提案し、見事、校内駅伝記録会を全校生で開催させることができた。



写真2 壮行会で作った旗で応援



写真3 体育科の時間で28人リレー



写真4 代表委員企画「駅伝記録会」

(2) 学級会：議題「学校の大掃除をしよう」＋道徳科：内容項目「家族愛、家庭生活の充実」

本校にはSSS（スクールサポートスタッフ）がおり、様々な業務を行いながら、私たちの手の届かない場所を清掃してくれる。本議題は家庭科「クリーン大作戦」と関連を図ったものであり、児童から「次の学級会でSSSのあずみさんと一緒に話し合って、普段できない場所を清掃したい。」と提案があった。学級会にSSSをゲストティーチャーとして招く話し合いは初めてであったが、児童はSSSの話真剣に聞き、限られた時間の中で自分達が清掃する場所を「排水口」に決めた。活動終了後、**児童の思いを言語化した振り返り**を実施



写真5 SSSからのお話

した。すると児童からは「**家に帰った後、いつも掃除をしてくれるお母さんに感謝の思いを伝えようと思いました。」**「**今日学んだことを家でもやってみたいです。**」との声があがり、家でも自分達にできる掃除をしてみるようになった。

本校では第二学期の授業参観で、全校一斉道徳科の学習を公開している。本時は、これまで自分自身の成長を願い、愛情をもって育んでくれた家族に対して、尊敬や感謝を込めて、家族のために



写真6 校内の排水口掃除を実施

自分には何ができるかを考えた内容である。「自己の振り返り」の時間には、共通体験として先日の校内大掃除の様子や、家庭で清掃し終えた後の振り返りワークシートを提示し、これまでの自分自身を見つめた。

C9:今回、家で掃除をしてみたけど、私はなかなか自分にできることをしていないなと思いました。仕事から帰ってきて疲れているのに、いつも私達のために食事の準備やお掃除をしてくれるお母さんがすごいと思いました。

C10:僕は手伝いをしています。でもそれはお小遣いのためとか、親に言われて嫌々やっていることが多いなと思いました。

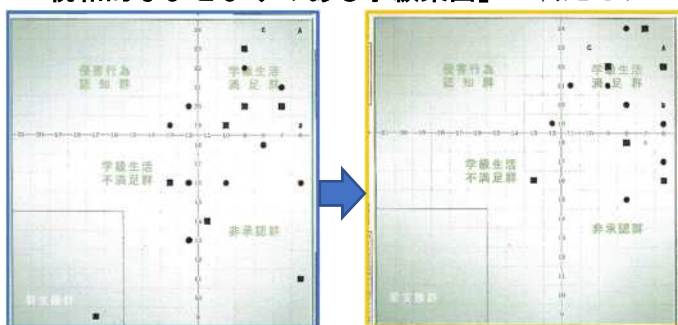


写真7 家族からの手紙に笑顔があふれる

この日のために、保護者の方々に小学校卒業を迎える我が子に書いてきていただいた手紙を渡してもらった。家族が自分に対してどのような思いや願いをもっているかを直接聞く機会は少ないのではないだろうか。まして、思春期を迎えている児童にとって、家族に対する自分の思いを表現することも少ないと考える。自己を見つめる振り返りの時間ではあるが、家族が相互に深い信頼関係で結ばれていることに気付かせたいと考え、設定した。家族から初めて手紙をもらう児童も多く、恥ずかしがる様子や、涙を浮かべる姿も見られた。学級会の実践は「よりよい学校生活、集団生活の充実」に大きく関連しているが、児童の「家庭にもつなげたい」という思いから、本内容項目へと関連させて実践した。児童と対話をする振り返りの時間は、児童と保護者の思いを深める時間となっていた。

(3) 児童の変容

自分のよさを言えるようになった児童が増え、「どのようにして自分のよさを見つけたか」質問すると、「友達に教えてもらった」と回答した児童が4名から16名へと増加した。さらに、「話し合って決めたことをみんなでできたとき、どのような気持ちになりますか(非認知能力)」と質問したところ、「友達のよさがわかる」と回答した児童が7名から12名へ増加した。これは、児童が学級会で話し合い、実践していく中で見つけた友達のよさを、振り返りの時間に伝え合っていたことが大きく関係していると考えられる。「やってよかった」「自分達ならできると信じ、やってきた」と回答した児童も2名ずつ増加した。hyper-QUからも児童の変容が見られた。グラフ1は第5学年の1回目に実施したものの、グラフ2は第6学年の2回目に実施した結果である。グラフ1は「かたさのある学級集団」と判定されたが、グラフ2(令和6年度11月)は「親和的なまとまりのある学級集団」と判定された。児童の主体性ある活動を見守ることを前提に、様々な活動の中で一人一人に役割を与え、実践し、言語化した振り返りを継続してきた2年間で、児童の変容として表れたのだと考える。多くの児童が自己有用感と学級への所属意識を高めることができたと言える。



グラフ1 令和5年度6月実施 hyper-QU

グラフ2 令和6年度11月実施

3 さらに児童の成長を目指して

道徳科や特別活動の指導は即効性を求めてしまうと、教師の価値の押しつけや、教師の期待通りに行動する児童になってしまうなど、双方の学習効果を低くすることになりかねない。今後も内面的資質を養う道徳科、そして道徳的実践の場が期待される特別活動の両方の特質をしっかりと理解し、生かし、関連付ける指導を意識していきたい。

子どもの豊かな学びを支援するために「やれる・できる」ことから実践してみよう

～小さな取組から教育環境整備を児童と共に考える～

三春町立岩江小学校

主査 宗像裕美

1 はじめに

児童が、学校で使用するものが壊れてしまったり、なくなったりしたとしても、すぐには買える・買ってもらえる感覚があった。学校事務職員の立場から教育環境整備を行い、学校教育目標『豊かな子どもの育成』を達成するために何か手立てはないかと考えた。

本校では、これまで学校の教育環境整備を行う際、次年度の教育活動に必要なものなどの予算編成を教職員の意見のみ取り入れていた。しかし、児童に「学校にはどんなお金が使われているのか」「お金・ものの大切さ」を少しでも理解してもらいたいと考え、学校財務のこと、そして、環境教育の一環として、児童と共に取り組むことができないだろうかと思い考え、以下の取組を行った。

2 実践の内容及び方法等

(1) 学校施設・設備アンケート（子どもアンケート）

学校施設・設備アンケート（子どもアンケート）を5・6年生の児童対象に実施し、児童の「目の高さ」「生の声」を聞き集約することで、学校の要望の一つとして、次年度の予算編成資料として活用した。まずは、職員会議で教職員に学校施設・設備アンケート（子どもアンケート）について、目的と提案理由を説明した。



【アンケートを依頼している様子】

〔目的と提案理由〕

- ① 児童から学校施設・設備についての意見を聞くことにより、学校という公共施設への関心を持たせ、施設や物を大切にする意識を育てる。
- ② 教育環境整備（ゴミの減量、リサイクルなど、様々な環境教育活動）に子どもの参加を促し、子どもに働きかけ、子どもが働きかけず環境づくりを推進したい。
- ③ 大人では見えない、子どもの「目」の高さで危険箇所等を把握することにより施設・設備の改善を図り、より良い学習環境を整える。
- ④ 児童の「生の声」を集約することにより、教育委員会へ学校の要望として伝えることができる。

学級担任に朝の会や学級活動の時間に協力を要請し、学校事務職員が直接教室に出向いてアンケートの依頼を行った。また、事前に児童に学校探検を行ってもらい、その後、ICT（GoogleForms・二次元コード等）を活用してアンケートを行った。アンケート結果は、予算編成の資料として教育委員会へ提出するとともに、「教育の日」11月1日にちなんだ子どもたちの育ちにかかわる人たちと学校財務を考える期間とし、また、11月1日～11月7日の「学校財務ウィーク」に合わせて、校舎内やホームページへ掲載するなど、児童や保護者にお知らせした。そして、学校運営協議会の方々にも資料として配付した。



【児童が学校探検を行っている様子】

 みんなの夢が育つ岩江小学校にするために
～みんなで学校を見つめよう！～

学校施設・設備についてのアンケート

みなさんが、学校で勉強したり・遊んだりするときに、「こんなものがあつたらいいな」「ここは危ないから直してほしいな」と思うことはありませんか？
学校の中をたん検して、どんな小さなことでもよいので、みなさんが思っていることをさがして、まずは書き出してみてください。

学校たん検：令和5年9月29日（金）まで
学校たん検が、終わった児童は、下のQRコードをタブレットで読み取り、アンケートに答えてください。

タブレットを使うときの約束（必ず守ってくださいね）

- ・だまってタブレットを持っていかない。（必ず、先生にOKをもらってください。）
- ・アンケート入力が終わったら、「終わった」ことを先生に伝えて、タブレットを元に戻してください。
- ・他のアプリやサイトにはいきません。



アンケート回答期限：令和5年10月3日（火）まで
※自分からいことがあれば、担任の先生や事務の宗像先生まで聞きに来てください。

学校たん検をして、気づいたところをメモしておこう！

名前 _____

①危険なところ

②新しくほしいもの

③その他に、気づいたところ

【学校施設・設備アンケート依頼文書】

【学校探検を行うメモ用紙】



学校財務ウィーク（学校施設・設備アンケート）

2024年11月1日 08時30分

「学校財務ウィーク」とは？教育の日（11月1日）にちなんで、子どもの育ちにかかわる人々と学校財務を考える期間として、11月の第1週（11月1日～11月7日）を「学校財務ウィーク」としています。

そこで、5・6年生に協力してもらい学校施設・設備アンケートを実施しました。その結果を5・6年生の児童のみんなには配付してありますが、全校生が見ることができるよう、学校施設・設備アンケートを職員室前に掲示しました。



【児童がアンケートを入力している様子】【学校施設・設備アンケートホームページにアンケート結果掲載】

学校施設・設備についてのアンケート集計結果

5・6年生のみなさん、学校施設・設備についてのアンケートのご協力ありがとうございました。岩江小学校は、昭和46年にオープンスペースの学校として整備されてから37年が経ちます。この記念が学校が、もっと良くなるように、みなさんからたくさん貴重な意見を届けてくれました。すごく細かいところまで見てくれていたなあと思いました。

みなさんが届けてくれた意見をもとに、岩江小学校がもっと良くなるようにしていきたいと思っています。

なお、アンケート集計結果は、以下のとおりとなります。

●三善町（三善町教育委員会）へお願いするもの

- 学校（自分たち）でできるもの（または、直したりするもの）
- ・ちょっと難しいと思うもの（または、今のままで大丈夫なもの）

※その他

学校にあるものは、みんなのもの（三善町のもの）です。みんな一人ひとりが大切に持って、学校生活をしやすいうようにしていきたいです。

（○の数の割合は、意見を届けてくれた人の人数です。）

【教室・スペース・ろうず】※「こんなものがあつたらいいな」「ここは危ないから直してほしいな」

●デコがコしているところがある。②（→場所を確認してありますね。）

●廊下のちよとした段差。①（→三善町教育委員会の職員等に届けてもらっています。危ないでずはカーペット敷いてあります。）

○廊下階段でてどとに飛びつく。①（→体育主任の先生に相談してあるね。）

・梯がちゃい。①

・砂場の仕切りを持ってほしい。①

（→学校のは、砂場ではなく走り幅跳びを行う場所です。砂が飛ばないように、また、動物にフン等されないようにシートをかぶせました。）

※プランコがデココウるさい。①

※うんでいて二善室や三善室が落ちるとケガをして危ない。②（→体育主任の先生に相談してあるね。）

【その他】※（学校へのお願いや、自分でいかに書いてね。）

●中庭の緑の部分がぼろぼろになっていた。直してほしい。③

（→緑のマットが割れて危ないので、三善町教育委員会へお願いしています。）

先生たちの目録では、気づかなかったところをたくさん見てくれて、しかも、貴重な意見を届けてくださいました。みなさんが届けてくれた意見について、全部答えることができませんが、届を責うにも、全てにおいて、**人・もの・お金・時間・思い**の5つの要素が必要となるので、覚えておいてください。また、一つでもかえらるよう考えていきたいと思っています。みなさんが勉強できるよう、より良い環境を作っていきたいと思っています。

忘れぬおまじない

4Rってなあに？

Refuse: Refuse (断る)
Reduce: Reduce (減らす)
Reuse: Reuse (再利用)
Recycle: Recycle (リサイクル)

この様に、また何か気づいたことがあれば、事務の宗像先生に届けてください。みなさんの意見で、この自分たちが学んでいる岩江小学校を、もっと良い学校、そして、みなさんの力で学校をきれいにしていきたいです。

【学校施設・設備アンケート集計結果一部抜粋】

(2) 事務だより「かわら版」(児童向け) 発行

学校の授業で、児童が使用するものを購入したり、ものが壊れて直したりなど、児童に「学校ではどんなお金が使われているのか」「お金・ものは大切」また、「5つの要素」が必要であることなどを記事にした事務だより「かわら版」(児童向け)を発行した。

そして、「5つの要素」とは、「人・もの・お金・時間・思い」であり、このほかにも「情報」が加わる場合もある。児童には、修繕の例をあげて伝えた。

- ①人・・・直してもらうために、お店に連絡をしたり直しに来てくれる。
- ②もの・・・直すために、部品が必要。
- ③お金・・・部品だけでなく、人件費もかかる。
- ④時間・・・②「もの」・③「お金」だけでなく、直すには時間もかかる。
- ⑤思い・・・学習するのに使っていて壊れてしまうのは仕方ない。しかし、ふざけて壊すのは絶対にダメ。

学校で児童が使っているものは、全て町のお金が使われていることや、ものを直すのには上記の「5つの要素」が必要であること、そして、次に使う人のことも考えて、ものを大切に使うしてほしいことなどお知らせした。また、1年生でも読めるよう全ての漢字にルビ(ふりがな)を付けたり、写真を大きく使用したり、SDGsのロゴマーク、学校のシンボルキャラクターなども挿入し、子どもたちが楽しく読めるよう工夫した。そして、児童が安全・安心に学校生活が送れるよう取り組みを紹介し、これらは、校舎内に掲示したり、ホームページに掲載することで、保護者の目にも触れることができる機会をつくった。そして、学校運営協議会に資料として配付した。

事務だより(児童向け)

かわら版

2022.11.14発行 沼江小学校 音楽科(文責)

学校の環境教育整備①

5・6年生の児童のみなさんに、学校で勉強したり遊んだりするときに、「こんなものがあたらいいな」「ここは危ないから直してほしいな」などのアンケートを行いました。

その中で、音楽室のハスマスターを直してほしいという意見がありました。音楽室に行ってみるとビックリです。



鍵盤が1本上がっていました。新しいものはすぐに買うことが出来ないし、4年生が3学期音楽祭で使います。すぐにお店に連絡して、直してもらえようお願いします。下の写真のように、直してもらうまでは、どんなことがありますか？



【どんなことがあるか考えてみよう！】

- ①人・・・直してもらうために、お店に連絡をしたり、直しに来てくれる。
- ②もの・・・直すために、部品が必要です。
- ③お金・・・部品だけでなく、人件費もかかります。
- ④時間・・・②の「もの」や③の「お金」だけではなく、直すためには時間もかかります。
- ⑤思い・・・練習するのに使っていて壊れてしまうのは仕方ないです。ふざけて壊すのは絶対にやめてほしいです。また、次に使う人のことを考えてほしいと思います。

上記のように、直すためには①～⑤の「人・もの・お金・時間・思い」5つの要素が必要です。例えば、「人」がいなくても「もの」がなければ直せません。「もの」があっても「お金」がなければ直すための「もの」を買うことが出来ません。何か1つでも欠けてしまうと直すことが出来ないで、学校施設・設備については大切に扱ってほしいと思います。ちなみに、今回は、鍵盤1本ですが、1本だけの交換では済まず、鍵盤一式の交換となりました。いくらかかったでしょうか？ **17,270円(税込み)**かかりました。(3学期からの学校予算で直しました。)もし、鍵盤の部品がなければ、新しくするのは、**約185,000円**かかります。そんな簡単に買うことは出来ません。大切に使いましょう。



事務だより(児童向け)

かわら版

2024.6.12発行 沼江小学校 音楽科(文責)

みんなの安全・安心が第一です

5月の事務だよりで沼江小学校で使えるお金のお話をしました。今回は、そのお金の平から、児童のみなさんが安全に学校生活を送れるように下記のように取り組んでいます。児童のみなさんがケガをしないよう楽しく学習して学校生活を送ってほしいと思います。

まず1つ目は、昨年度の5・6年生に協力してもらい実施した子どもアンケートの結果から、1年生教室スベースにある本棚の角が危ないため、コーナーガードを付けました。



本棚の角 (Before) → 本棚の角 (After)

全部の角に「コーナーガード」アクションのようなものを付けました。

2つ目は、校庭果樹園プール脇にあるビオトープの跡地です。この場所は、毎年ケガをしている人がいます。児童のみなさんがケガをしないで帰ります。先日、体育担当の先生から全校児童に放送がありましたね。「この草には入らないでください。ここには遊びません。」学校のまわりを歩くと楽しく校庭や遊具で遊んでください。



ビオトープ跡地

課題図書・新しい本が入りました

今年度も3学期の図書商品の予算で課題図書を購入しました。低学年(1・2年)・中学年(3・4年)・高学年(5・6年)用として、各学年に1冊ずつ新しい本を配置しましたので、ぜひ読んでみてください。夏休みの宿題で読書感想文コンクールが楽しみです。



課題図書(低・中・高)

また、学校では本が壊れてしまったりすると、「本のびょういん」があります。一冊一冊テープを貼って直してきています。大切に使いましょう。



【事務だより「かわら版」(児童向け) 発行の一部】

事務だより「かわら版」 みんなで考えるお金の話

2025年1月24日 16時00分

令和7年1月17日（月）に5年生が家庭科の授業で、明治安田生命の方より消費者出前講座で金銭教育の授業を行っていただきました。今回の金銭教育は、5年生以外の児童のみなさんにも知っていただきたい、事務だより（児童向け）「かわら版」にてご紹介させていただきます。

事務だより（児童向け）



かわら版

2025.1.24発行 星江小学校 児童館員（文責）



「みんなで考えるお金の話」

令和7年1月17日（月）に5年生が家庭科の授業で、明治安田生命の方より

消費者出前講座で金銭教育の授業を行っていただきました。5年生以外のみなさんも、

これからお金を使って買い物をしたりすることがあると思うので、覚えておくことが大切です。



それでは、「みんなで考えるお金」として、4つお話をいただきました。一つ目は、「契約」です。「契約」は、買い物をするとき買い手が「買いたい」と意思を表し、売り手が承諾する意思を表したときに成立します。二つ目は、「お金の使い方」です。買いたいものがあるとき、必要とほしいものに分けて考えてみてください。また、ほしいと思うものがいま必要なのかどうか、お金には限りがあるので、使い道を考えることも大切です。3

つ目は、「計画的なお金の管理」です。上手にお金を使うためには計画を立てることが大切です。

収入（入ってくるお金）と支出（使うお金）のバランスが取れているか

確認することが大事です。4つ目は、「消費者トラブル」です。

児童のみなさんもゲームや音楽・動画配信サービスを利用したことはあり

ますか？そこで、お金を払って特別なサービスを受ける「課金」を利用した

ことがある人もいますが、年々、小学生のトラブルが増えています。

トラブルが起きてからは、大変になります。もし、課金サービスを使いたいときは、おうちのひとや大人のひとと相談



やルールを決めて行うようにしましょう。

【まとめ】使うお金には限りがあります。それを使うときには、本当に必要なのか、買う前に計画的に考えましょう。そして、小学生は、知らない間に課金をしてしまうことがあるので、気をつけましょう。

4つの項目について、「契約」「お金の使い方」「計画的なお金の管理」「消費者トラブル」について、簡単に記事を書いておりますので、お子さんと一緒にお金について考えてはいかがでしょうか。

【事務だより「かわら版」（児童向け）ホームページ掲載の一部】

3 実践の成果と課題

学校の教育環境整備を考えるため、学校施設・設備アンケート（子どもアンケート）、事務だより「かわら版」（児童向け）発行の2つの実践を通し、見える化・情報発信・啓発活動を行うことで、児童・保護者・教職員とのコミュニケーションツールの一つとして活用することができた。そして、児童を対象とした学校施設・設備アンケート（子どもアンケート）集計結果を教育委員会に予算編成の資料の一部として提出した。教育委員会担当者からも「子どもアンケートに直してほしいと要望が出ているため、今回、修繕したいと思います。」との回答など、教育環境整備において一定の結果を得られることもあった。また、児童からも「学校がきれいになるのが楽しみです。」と嬉しい声があった。そして、学校で使われている全てのものに「お金」が使われていることや「お金・ものの大切さ」、教育環境整備に「人・もの・お金・時間・思い」の「5つの要素」が欠かせないことを理解してもらえたことは大きな成果としてあげられる。その他にも、ICT（GoogleForms・二次元コード等）活用により、ペーパーレス化やアンケート集計作業においても時間短縮につなげることができたことは、成果の一つである。

今回の実践は、管理職や教職員の理解と協力の下で実践することができた。学校事務職員一人の力だけではできないことを改めて感じた。「チーム学校」の一員として、教育環境を良いものにしていくために、また、学校組織における唯一の総務・財務に通ずる専門職として、今後も児童と共に継続的に「学校にはどんなお金が使われているのか」「お金・ものの大切さ」を少しでも理解してもらえよう、児童の声に耳を傾けながら学校教育目標『豊かな子どもの育成』に、主体的・積極的に取り組んでいきたい。

健康マネジメント能力を育む保健教育の実践
～家庭・地域と連携した喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育の取組を通して～

西郷村立熊倉小学校
養護教諭 荒井真紀子

1 はじめに

熊倉小学校は、福島県の南部に位置する人口約2万人の西郷村の中心部にあり、児童数407名18学級の中規模校である。

素直で元気な児童が多い一方で、「偏食の児童が多い」「肥満傾向の児童が多い」「メディアの長時間使用により生活習慣が乱れている」等、健康に関する問題は多い。そこで、「自分手帳」の活用を中心にPDCAサイクルで自らの健康を適切に管理し改善する健康マネジメント能力の育成を目指して保健教育を実践している。



熊倉小学校校舎

喫煙、飲酒、薬物乱用については、6年生に実施したアンケート結果から、たばこや酒に興味があると回答した児童が、たばこで2.8%、酒で23.6%いることが分かり、その興味を持ったきっかけとして、親の喫煙や飲酒と回答した児童が多かった。また、未成年の喫煙や飲酒について、「仲のよい友達に勧められたらどうする？」の問いでは、「絶対断る」と回答した児童の割合が多いが、「たぶん断る」や「断れない」、「分からない」とはっきりとは断れないと回答した児童が、たばこで20.8%、酒で47.2%おり、誘いに対して、適切に対処できる自信が持てない児童も多い。さらに、喫煙の害に比べ飲酒の害を理解している児童は少なく、飲酒への興味が高いこともこのアンケート結果から分かった。



授業前アンケート結果

2 具体的な取組

(1) 校内組織の連携の強化

① 体育部との連携

体育部と保健部が連携するために部会を開き、保健教育の推進を図っている。令和4年度には、体育科（保健）の授業研究を企画し、村内全ての小中学校の体育主任と養護教諭に公開し、村内教職員の保健教育に対する意識の向上を図った。

② 現職教育部との連携

警察署の生活安全課長を講師に招き、教職員の校内研修を実施した。薬物犯罪の現状や地域の実態等、教職員の理解と知識を深める機会となった。講話を聞き、様々な情報があふれていてそれを簡単に得ることのできる現代だからこそ、小学生から正しい防止教育の必要性を教職員みんなで再認識することができた。

(2) 保健教育の実践

① TT による授業公開

6年生の体育科（保健）「飲酒の害」の授業公開を行った。この授業公開は、村体育主任会と地域

学校保健委員会を兼ねており、各校の体育主任や養護教諭、村教育委員会、学校薬剤師、村健康推進課保健師等が参観した。

授業は健康マネジメント能力の育成を意識して実践し、正しい知識のみならず、親しい人に飲酒を誘われた時の解決方法をグループで考えさせることにより、児童の意思決定や行動選択ができる能力や態度を高める学習ができた。

また、学習したことを家庭や地域へ発信することができないか考えさせ、児童から提案されたポスター作りや新聞作り等に取り組んだ。完成したポスターや新聞は、学校の多目的ホールに掲示したり、熊倉小学校運営協議会の協力で、西郷村の公共施設やコンビニエンスストア、中学校などに掲示させていただいたりして、家庭や地域に発信した。

授業後、児童から次のような感想があった。

- ・学習する前は詳しく知らなかったけど体にたくさんの害があることがわかりました。脳などの命に関わるところに大きな影響があることがわかりました。
- ・お酒を飲むと体に害があるし、未成年が飲むと成長に影響があることがわかりました。
- ・未成年は体に害があるから飲んではいけないし、友達や家族などにすすめられてもきちんと断るようにしたいです。



授業の様子

児童が作成したポスター



② 外部講師との連携

保健で学習したことを振り返り、さらに知識の定着を図ることができるよう、外部講師による防煙教室や薬物乱用防止教室を実施した。防煙教室では、ストローを用いて、COPDの息苦しさを体験したり、断り方のロールプレイングをしたりして、断り方のスキルを高めることができた。

また、薬物乱用防止教育には、児童自らが意思決定し行動選択していく力、自己マネジメント力が必要であり、そのためには自己肯定感を高めていくことが大切であると考え、「心の健康講話」を実施した。

(3) 児童会保健委員会の活動

① 保健集会

毎年6月に実施している児童会保健委員会による「歯と口の健康集会」では、歯科教室で学習した内容をクイズにして発表した。その中で、歯によくない習慣として喫煙を紹介し、掲示物を多目的ホールに展示して全校生の健康意識を高めた。

② 手作りコースターで啓発活動

児童保健委員会の活動として、未成年の喫煙や飲酒を防止するため手作りコースターを作成した。作ったコースターは、休み時間や昼休みに全校生へ配付し啓発した。保護者から「コースターを持ち帰ってきてとても大事にしていました。低学年なので飲酒のことはあまり意識したことがなかったけど、これから子どもたちと話をしていきたいと思います。」などの感想が寄せられた。

児童が作成したコースター



保健委員会の啓発活動

(4) 家庭への啓発と連携

① 授業参観

保護者の意識を高めるため、また、保護者と共通理解を図るために、授業参観で「飲酒の害」の



授業を行った。学校と家庭との共通課題と認識してもらい、家庭でも児童の健全な学びや育ちに向けて喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育の重要性を伝え、学校と家庭が連携して児童の健やかな成長を見守っていく機会とした。

参観した保護者から次のような感想があった。

- ・周りの大人が注意して子ども達を守っていくことが大切だと思いました。
- ・たばこやお酒に手を出さない環境を作ってあげることが必要だと思いました。

② 各種おたより

学校からのおたよりは、学校と家庭をつなぐ重要なものであり、喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育についても、取組や情報を積極的に発信している。

(5) 地域組織との連携

① 地域学校保健委員会

令和4年度からの3年間は、薬物乱用防止教育をテーマに3つの中学校、5つの小学校合同の地域学校保健委員会を開催した。喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育について各校共通の課題とし、それぞれの学校で保健教育を実践した。

② 村健康推進課との連携

学校と村健康推進課との連携事業の一つに「禁酒・禁煙対策事業」があり、防煙教室や薬物乱用防止教室の外部講師の斡旋や相談等、学校と密に連携しながら行っている。

また、毎年4月に村健康推進課と村内の小中学校養護教諭の会議が開催され、児童生徒の健康課題について共通理解を図り、連携事業の確認を行っている。



3 成果と課題

(1) 成果

- ① 事前アンケートを取り実態にあった保健教育を実践することにより、児童に自分のこととして捉えさせることができた。授業から3ヶ月後に取ったアンケートでは、未成年の飲酒について、「仲のよい友達に勧められたらどうする？」の問いで、「絶対断る」と回答した児童が、52.8%から69.1%に増え、「たぶん断る」や「断れない」、「分からない」とはっきりとは断れないと回答した児童が、47.2%から30.9%に減った。事前アンケートで、9.7%いた「断れない」と回答した児童が、事後アンケートではゼロになった。
- ② 校内の組織で連携を図ることにより、組織的に家庭や地域へと学習を広めることができた。
- ③ 授業を公開したり、地域学校保健委員会を開催したりすることで、教職員や保護者の保健教育に対する関心が高まった。

(2) 課題

- ① 児童が主体的に学び、身に付けた力を定着させ、今後の生活で生かしていくことができるよう「つなぐ」役割を担う養護教諭として、多様なつながりをコーディネートしていく役割を果たし、学校・家庭・地域が連携した取組を今後も継続していきたい。
- ② 喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育のように単発になりがちな学習を教科横断的な視点で、より効果的に指導ができるように、私たち教職員自身が、児童の思考力、判断力、表現力等を育成するための研修を深め指導力の向上を図っていきたい。

1 はじめに

本校では、学校教育目標に学校名の頭文字である「な・め・つ」を用いて「なかよく思いやりのある子、めあてをもって学ぶ子、つよくたくましい子」と掲げており、子ども達にも先生方にも地域の方々からも親しみやすい教育目標となっている。そのため、学校全体がどのような子ども達を育成していけばよいかが明確である。私は、この教育目標を軸に、子ども達のために何を目指し、どのように取り組んでいくべきかを考え、全職員が足並みをそろえて「より良い学校づくり」ができるよう以下の実践に取り組んだ。

2 実践の内容・方法

(1) 「な」なかよく思いやりのある子の育成にむけての取り組み

本校では、学校全体で大切にしている4つの柱がある。生徒指導をする中で「あいさつ、そろえる、聞く姿勢（放送が鳴ったら立ち止まって聞く）、人を傷つけない 力でも言葉でも」ができる児童が育つように取り組んできた。実現するためには、全職員の協力と理解が必要である。本校の強みは、この全職員が同じ方向を向いて、子ども達に関わっているということである。

「チームNAME TSU」の発行
による教職員の意識の統一化

教育目標「な・め・つ」

校長「グランドデザイン」

生徒指導部の取り組み

児童・職員全体の取り組み

なかよく思いやりのある子

親切・丁寧・思いやりの姿

そろえる姿

丁寧な姿

あいさつ運動

小さな親切運動の実施



また、生徒指導の会議の中で改善が必要なこと（児童や学校全体の困り感）は、必ず生徒指導だより「TEAM NAME TSU」を発行する中で取り上げ、教職員全体が児童との関わりの中で意識して取り組んでいくことができるように共通理解を図ってきた。児童の良さ、丁寧さ、思いやりの姿については、積極的に取り上げ生徒指導だよりで提示したり、全校集会の中で紹介したりすることで、子ども達一人一人を学校全体で見えていく、育てていくという学校全体としての意識につながってきている。



① 学校全体 5 つの取り組みについて

国語科の研究テーマをもとに、個人の日々の実践の取り組みの積み重ねが確かな学力に結びついている。

◇ 1 年次【5 年国語 物語文】「なまえつけてよ」「カレーライス」

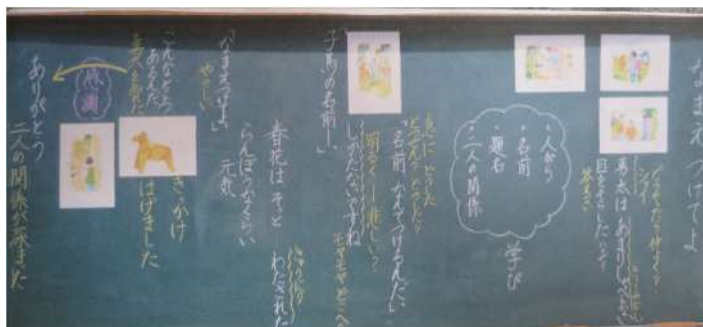
「なまえつけてよ」 物語を読む基盤づくり 「物語を読むときに大切なのは？」

- ①初発の感想で「？」問いをもつ
- ②物語の設定を読む
- ③中心人物はどこで変わったのか。

変容→中心人物の成長

人物像、関係図、題名との関連

物語の読み方を習得できる子



「カレーライス」 読書の幅を広げる 「本って楽しいね。」

- ①単元の見通しをもつ。
- ②単元の中で身に付ける力を提示する。
- ③読書環境整える。【図書館司書との連携】



いろいろなジャンルの本を読むことで
読書の幅を広げることができる子

◇ 2 年次【6 年国語 説明文】「笑うから楽しい 時計の時間と心の時間」「鳥獣戯画を読む」

「笑うから楽しい」説明文を読むときに大切なのは？

- ① 単元の見通し（身に付ける力の提示）
- ② 文章構成、筆者の考えに対する納得度
- ③ 筆者の考えを支える事例
- ④ プレ教材で学んだ力で本教材を読む

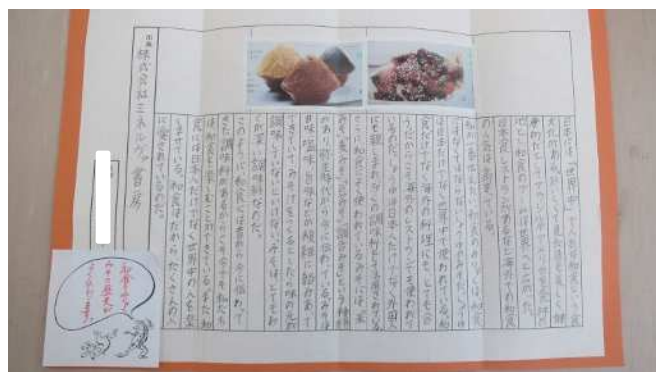
身に付けた学びを生かして読める子

「鳥獣戯画を読む」説明文を読み、書く力へ生かす。

- ① 単元のゴールは何なのかを提示する。
- ② 筆者の考えに対する自分の考えをもつ。
- ③ 情報の適切な選択（写真や図の活用）
- ④ 文章と情報の関連性

読みで身に付けた論法で、日本文化を紹介できる子

「鳥獣戯画を読む」→「発見、日本文化のみりよく」



(3) 「つ」 つよくたくましい子の育成にむけての取り組み

充実した学校生活を送ることができるようにするためには、学級経営が基盤となる。つよい心を育て、たくましい最高学年を育てていくために、4つの「創る」を目指して取り組んだ。

滑津小学校の最高学年「頂上」めざす



つよくたくましい子

① 創る 滑津小学校150周年の歩みをふり返ろう 「式典に向けてスライド作成」

- (1) 桜の植樹式
- (2) 地域の方へのインタビュー、調査
- (3) スライドへまとめる

自己表現の場の実現



② 創る 滑津小学校の歴史をふり返ろう

「学習発表会～nametsu history～」

- (1) 歴史をみつめる
- (2) 台本作成

クラス全体で一つを表現する場の実現

③ 創る 卒業する自分をふり返ろう

「成長した自分を見つめよう～卒業文集作成」

再度自分を見つめ直す場の実現

④ 創る 最終形 自分たちの心に残る卒業式を創ろう

最終形とはどんな姿か再構築する場の実現

- (1) 卒業プロジェクト案作成
- (2) プロジェクト実施（交流、感謝、つなぐ、絆）チームごとにプロジェクトを実施する。

3 子どもの学びの姿と今後に向けて

2年間をとおして、実践してきた授業改善や教育目標のもと、教職員一丸となってより良い学校づくりを目指していくという学校全体の取り組みから、学習面においても生活面においても落ち着いた環境の中で子ども達は学校生活を送ることができている。現在の6年生においては、昨年度のHQUテストの実施から今年度の実態を比較してみると、一人一人の学校生活の充実度が向上していることが分かる。

昨年度 11月

満足群	・・・	89	%
侵害行為認知群	・・・	6	%
非承認群	・・・	6	%
不満足群	・・・	0	%



今年度 11月

満足群	・・・	100	%
侵害行為認知群	・・・	0	%
非承認群	・・・	0	%
不満足群	・・・	0	%

このことから、学校全体としての学年を越えた、子ども達への関わりや全体で同じ方向性で取り組む姿勢が、児童の安心感へつながり、自信をもって自己表現をすることができていると考えられる。

また、滑津スタンダードを研修部で作成し、授業基盤を整え、めざす児童の姿に向かって研修を行い、授業改善を行ってきた。その結果が、子ども達の全国学力学習状況調査で、国語科、算数科ともに、全国を10ポイント上回る結果につながった。今後も教育目標の実現をめざし、教職員一人一人、前向きに子どもの姿から学ぼうとする姿勢を大切にしながら、日々の実践に努めていきたい。

学校事務職員として学校運営ビジョン実現に向けた取組

南会津町立田島小学校

主査 阿久津恵利子

1 はじめに

本校は普通学級7学級、特別支援学級4学級が設置され、児童数201名、教職員数37名で南会津郡内では一番大きな学校であり、めざす学校像を「笑いあふれる田島小」とし教育活動に取り組んでいる。

その実現のため学校運営ビジョンにおいて以下のキーワードを設定し、教職員だけでなく児童、保護者そして地域が一体となり取り組んでいる。1つ目は、知・徳・体の教育の充実に向け3びきのぞうさん「がんばるぞう・みつけるぞう・まけないぞう」、2つ目としてキャリア教育の充実のため「魔法のランプ」、最後に実行力を意識させるための「チャレンジ」である。ここでは学校事務職員として学校運営ビジョンの実現に向け、学校運営への積極的な参画の観点から以下の実践の取組を紹介する。

2 実践内容

(1)「3びきのぞうさん」～学びの環境改善アンケートの実施～

①アンケートの目的

学校運営ビジョンの「まけないぞう」さんに「学校事故防止と安全教育」の観点から学校施設設備の適切な管理・保守点検が掲げられている。次年度の予算を要求するにあたり、児童が安全で学びやすい環境を整備したり、困っている物やことを見つけたりすることを目的に、学びの環境改善アンケート「こうだったらいいな」「こんなものがあればいいな」を実施した。

②アンケートの実施

アンケートは4・5年生を対象にGoogle フォームを活用して実施した。自分の教室や理科室、家庭科室、音楽室など、教室ごとに回答を行った。

アンケートの依頼

Google フォームによるアンケート

アンケートでは「机といすが使いにくいこと」や「カーテンが汚れていること」「理科室の実験器具を新しくしてほしいこと」などたくさんの意見が寄せられ、普段気づくことができないことを教えてくれた。アンケートの結果を踏まえて今年度予算で対応可能な修繕箇所は修繕し、購入が可能である教材教具は購入を進めた。その中でも児童用机といすは、かなり大きな予算が必要であるため、3カ年計画での整備を教育委員会へお願いし、3年間で230台の机といすを購入できた。

[illegible]

①「じむしつ」発行の目的

学校事務職員としてできるキャリア教育の視点での実践として、先のアンケート結果を周知していたお知らせを、キャリア教育の視点に絞り、児童向け事務だより「じむしつ」として作成し、発行した。

「じむしつ」において、学校を支えている人たちの職業や仕事の様子を児童に知らせ、いろいろな仕事があることや仕事をしてくれる方のおかげで学習環境が整備できることを伝えた。

③「じむしつ」を発行してみて

学校事務職員として接している業者が児童にとって「キャリア教育」を進める上で大変貴重な資源であることが再確認できた。また、児童が「楽器を修理していただきありがとうございます。」と事務室に来てくれたり「【じむしつ】まだですか?」と尋ねられたり、「これも【じむしつ】に載せてください。」とリクエストをされたりするなど、児童との会話が増えた。



「じむしつ」 1号



「じむしつ」 2号



「じむしつ」 7号



「じむしつ」 8号

(3) 効果的な事務室経営に向けて

事務室の前にはメダカの水槽が置いてあるが、教室でうまく対応ができなかったり、困ったりしたときに児童が心を休め、メダカに癒やされ教室に戻る光景を目にしていた。アンケートや「じむしつ」発行で児童との距離が短くなり、事務室に来る児童が抵抗なく訪問できる空間として現在休み時間に開放している。コロナ禍でできていなかった異学年の交流の場となり高学年の児童が低学年の児童の世話をするなど微笑ましい場面も多く見られた。

また、特別な支援を要する児童も参加し一緒に活動するなど交流の場としても機能したようで、学校事務職員として思いがけない児童の様子をうれしく見ている。



3 成果と課題

学校運営ビジョン実現のために学校事務職員ができることを試みた。いつも事務室に一人で仕事を進めているが、3つの実践により児童や職員と会話が増え、児童の変容をとらえることができ学校運営の一端に参画できた満足感をもつことができた。

これからも、学校に唯一の行政職として「ひと かね もの 情報」をつなぎ、学校運営にかかわる職員の一員として、児童の学びの環境充実と学校運営ビジョンの具現化に向けて寄与していきたい。

児童と先生方と共に創るICT活用の学び

いわき市立平第三小学校

主幹教諭 野辺田 真実

1 実践の内容及び方法等

本校では、「自ら考え、伝え合う児童の育成～ICTを効果的に活用した学びを通して～」を研究テーマとして校内研究を進めており、今年度で3年目である。私は昨年度より本校に赴任し、研修主任として学校全体の研究推進を図りながら、自分自身も、担当教科である5年生理科の授業において、デジタルとアナログそれぞれの良さを見極めつつ、ICTの効果的な活用をテーマに実践を重ねてきた。

(1) 研修主任としての実践

① 教師側のICTスキルを高めるための実技研修会

今年度7月、文部科学省初等中等教育局 GIGA StuDX 推進チーム 徳永一夢先生を本校にお招きして、『ICT活用』の今とこれから』についてご講演をいただいた。

「衝撃的な話でした。しかし、今の時代の流れを考えると、『できない』『難しい』と言ってもらえないのだなと思いました。」

「大きな転換期にあるのだなとつくづく思いました。」

「子供たちが自律した学習者になるためにICTの活用は不可欠だと思いました。」

「ICTを一つの選択肢にできるように、使わせてあげることが教師の責務だと思います。」

※ 講演後の先生方の感想用紙より一部抜粋

全国各地の先進校での取組や、これからの授業のあり方について教えていただき、我々教員の意識改革やICTスキル向上が急務であると感じた。そこで、先生方がタブレットを活用した授業を体感しつつ、ICTスキルも向上できるような実技研修会を企画・実施した。研修会では、「学習の手引き」にそって共有シートで各自進捗状況を入力しながら(図1)、Teamsや「オクリンクプラス」を使った課題を共同編集で進めていった。また、若手教員で組織するメンター研修においても、「オクリンクプラス」や生成AIの活用について実技研修を行い、実践に生かせるスキルを高められるようにした。

授業の進め方	授業の進め方(タブレットで進捗状況を記録していく)					授業の進め方
授業の進め方 この授業の進め方でも進捗状況を記録していく	Teamsで進捗状況を記録していく	Teamsで進捗状況を記録していく	Teamsで進捗状況を記録していく	Teamsで進捗状況を記録していく	Teamsで進捗状況を記録していく	Teamsで進捗状況を記録していく
オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく	オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく	オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく	オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく	オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく	オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく	オクリンクプラス オクリンクプラスを活用して進捗状況を記録していく
Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく	Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく	Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく	Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく	Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく	Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく	Teams Teamsを活用して進捗状況を記録していく
共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく	共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく	共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく	共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく	共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく	共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく	共有シート 共有シートを活用して進捗状況を記録していく

学習の手引き	担当：野辺田
【この時間のねらい】 自分自身をアップデートすること(ICT活用に関わることで)	
【評価】 A：自分自身をアップデートした上で、今後何をすることが得意でできる。 B：何かしらの自分自身をアップデートできている。	
【学習の流れ】 ①課題の設定→自分のめあてを書きましょう。 ②共有シートの項目にそって、それぞれ学習を進めましょう。 ③振り返り共有シートに書き込みましょう。	
※ 進捗状況を都度入力すること。 ※ 振り返り共有シートに書き込みましょう。	
※ 本日は流れが、課題の設定 → 情報の収集 → 整理・分析 → まとめ・表現となると、授業的な学習の過程になります！	
＜資料＞ 新しい授業観に関する用語：『個別学習』『個別学習』『個別学習』『個別学習』 『個別学習』『個別学習』『個別学習』『個別学習』 参考資料：GIGAスクールはじめて自己4、これである！個別学習の学びと協働的な学び 2024年3月24日発行 個別学習 協働 個別学習 個別学習 個別学習 個別学習 個別学習 個別学習 参考資料：[Ito]個別学習で協働的な学びの最前線！子ども主体で学びを進める「個別学習」 授業とは(富山県立富山小学校)	

図1 実技研修会での学習の手引き(右)と共有シート(左)

② 10分参観・略案可の一人一授業実践

全体授業(低・中・高学年ブロックごと)以外の個人実践については、本時のねらいやICT活用にポイントを絞った略案で行うこととした。また、授業者が指定する10分間程度のポイント参観も可とし、互いの授業を見て学ぶ機会の増加をねらった。参観できなかった先生には、「現職だより」を通じて授業の様子を伝えた。

- ③ 事後研究会、伝達講習会でのタブレット活用
研究授業の事後研究会では、「オクリンプラス」のカードを使用し、グループごとに成果と課題をまとめた（図2）。

また、Teams 内のチャット機能やグループ機能を使い、先生方が投稿する形で、各自の実践の情報共有や伝達講習を行った。

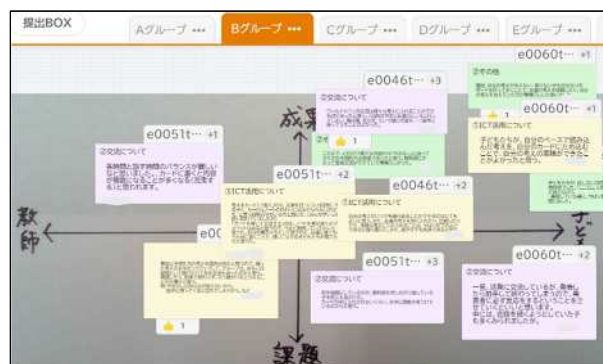


図2 タブレットを活用したグループ協議

(2) 理科授業における実践

- ① 自分の「？」を見つけ、学びを自分事にするための単元の導入

「花から実へ」の単元導入では、何も見ないで描くことを条件に、「アサガオの花、ヘチマの花の中身」の絵を描かせた（図3）。「アサガオは知ってる。」「ヘチマは昨年育てました。」などと言っていた児童も、いざ自分で描いてみると手が進まず、花の中に何があるのかよく分かっていないことに気づく。また、1つだけ描く児童と、雄花・雌花を区別して描こうとする児童とで違いが生まれる。そういったズレや、分からないことへの自覚を生じさせることで、自分自身の「？」をもたせ、次時からの学習へつなげた。また、生じた疑問や知りたいことについては、各自タブレットを活用してシートに記入し、全員で共有しながら学習を進めた（図4）。

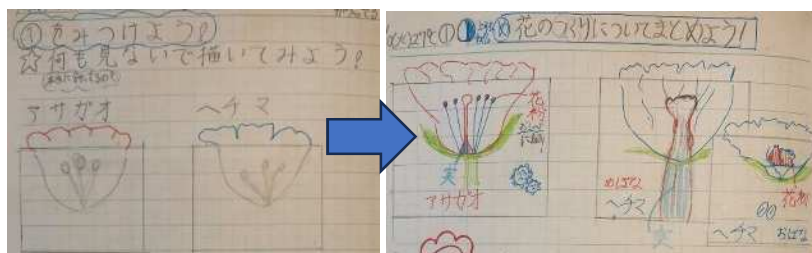


図3 児童の絵の変化（左が1時目、右は4時目に何も見ないで描いたもの）

花から実へ 1時間目 知りたいこと	先生から	9/3 振り返り
奥になにかが、めしべとおしべ意外になにかあるのかな	奥が知りたいね。分けてみようか。	今日、私は、おしべとめしべのことが改めて分かってとっても楽しかったです。そしてこれからの授業がとっても楽しみです！
花によっておしべめしべの仕組みは違うのか？	仕組みね。別な花へも花を開いているところが60d!	今まで不思議だったおしべめしべの形が分かりました。あさがおのめしべのふくらんでいる部分は何か、かくの役割など疑問も浮かびました。
なぜ、膨らんでいるのか。(アサガオ)	膨らみには意味があるのかな。	ヘチマには、『めしべ』と、『おしべ』があることを知った。

図4 「花から実へ」共有シート的一部分

「台風と天気の変化」の単元導入では、①台風の発生場所 ②台風の進路 について、各自の予想をタブレットで表出し（図5、6）、全体で交流した。その後、台風について知っていること・知らないことについて一人一人が記入し、次時からの調べ学習につなげた。（図7）。



図5 発生場所予想のピン集計



図6 進路予想を画面上で互いに見合う

台風について知っていること	知らないこと・知りたいこと
台風は海を渡るから日本や、大陸に上陸する。いろいろな方向に。突然方向を変えることも。また、人工衛星などで正確に情報が入手できる。	台風はどのように発生するのか。どうやって経路を定めていくのか。台風は季節によって、1月、14年と定期的に発生するの。
台風は海を渡るから日本や、大陸に上陸する。いろいろな方向に。突然方向を変えることも。また、人工衛星などで正確に情報が入手できる。	台風は、どうやって動くのか。どうやって経路を定めていくのか。台風は季節によって、1月、14年と定期的に発生するの。
台風は海を渡るから日本や、大陸に上陸する。いろいろな方向に。突然方向を変えることも。また、人工衛星などで正確に情報が入手できる。	台風は、どうやって動くのか。どうやって経路を定めていくのか。台風は季節によって、1月、14年と定期的に発生するの。

図7 台風について知りたいこと

② 実験結果を即時共有しながら、よりよい考察を導き出すためのICT活用

実験の際には、ICTを活用して結果を即時共有している。「物のとけ方」の実験では、水の温度変化による食塩の溶け方の違いについて、表に○や×をつけながら各班で実験を進めていった(図8)。



図8 実験で使った記録カード

他の班の結果も見ながら実験を進められるため、結果が異なる班の様子を見に行ったり、実験方法が間違っていたことに気づき再実験をしたりする様子が見られた。全ての班の結果が即時に見られることから、その後の考察を書く際にも役立った。

③ 自己変容を自覚し、次の学びへ向かう力を培うための振り返り

食塩とミョウバンのとける量には限界があることを実験で確かめた後、タブレットで振り返りを行った(図9)。教師が設けたチェック項目は

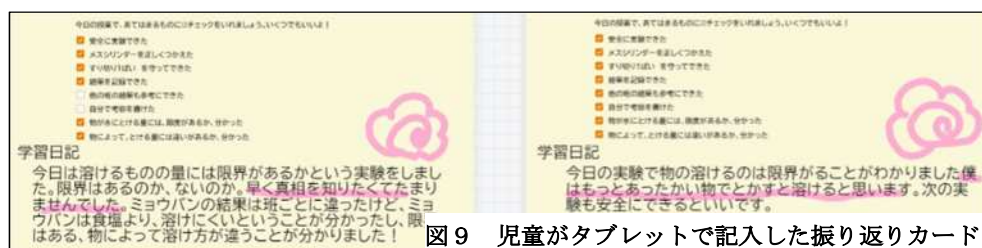


図9 児童がタブレットで記入した振り返りカード

即時に集計できるため、児童の自己評価だけでなく、教師自身の授業改善の視点にもなった。

単元末には毎回、「私の学び」として、振り返りを1ページ程度書く時間をとっている(図10)。ノートに書くか、タブレットで打つかは、児童が各自選択している。教師からは、「①学習前は、②授業では、③今では、…」の書き出しで、「学びを通した自分の成長」「自分にしか書けない学びのストーリー」を書くよう指示している。タブレットで即時共有できるので、互いにコメントし合ったり、友達の書いたものを参考にしたりしている。また、良い振り返りは適宜教師が紹介して価値づけることで、児童の振り返りの質が高めるよう働きかけている。

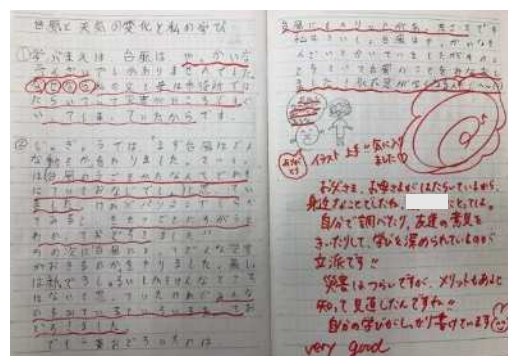


図10 児童が書いた「私の学び」

2 実践の成果

(1) 研修主任として

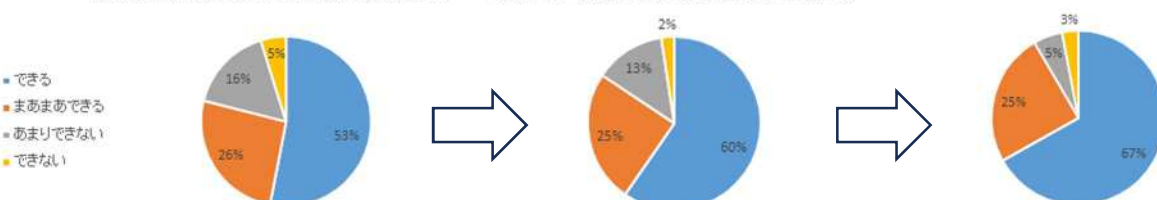
【児童側の成果】

問：インターネットやタブレット、電子黒板を使って、自分が思ったことや考えたことを相手に伝えることができますか。

R5 5月 インターネットやタブレット、電子黒板を使って、自分が思ったことや考えたことを相手に伝えることができますか。

R5 12月 インターネットやタブレット、電子黒板を使って、自分が思ったことや考えたことを相手に伝えることができますか。

R6 12月 インターネットやタブレット、電子黒板を使って、自分が思ったことや考えたことを相手に伝えることができますか。



これは、①昨年度5月、②12月、③今年度12月の計3回、本校4・5・6年生を対象に行ったアンケート結果である。「できる」「まあまあできる」と回答する児童の割合が、回を追うごとに増加し、9割を超えた。昨年度5月の時点では、「タブレットで入力するのが難しいから。」といった記述が見られ、「あまりできない」「できない」と回答した児童が21%いたが、今年度は8%

に減少した。授業や学校生活でのICT活用機会が増え、スキルアップが図られてきている。また、「できる」と回答した児童の理由記述には、「共同作業ができるから。」「画像やグラフを簡単に挿入できて伝わりやすい。」「『オクリンクプラス』でカードに自分の意見を書いてそれを見せながら意見を交流する機会がたくさんあるから。」「『みんなのボード』などを見て自分の考えが深まる。」等があった。ICTを活用して、自分の考えを伝え合う児童の姿が見られるようになったこと、また、児童自身がICTを使うことで、できる幅が広がってきた良さを感じながら学習している様子が見えてくる。

【教師側の成果】

以下は、校内研修についての先生方からのアンケート回答(12月実施)である。

- ・ ミライシードや Teams を効果的に使用できるようになった。
- ・ 子供たちはたくさんのことを即座に吸収していくので、教員側も ICT を使いこなさなくては行けないと強く感じた。
- ・ 実際にタブレットを使いながら学ぶことができたので、授業にも役立つスキルアップとなって助かった。
- ・ ICT を使った授業の可能性を肌で感じ、実際にやろうという意欲の向上につながった。

外部講師の講義や実技研修を通して、先生方の意識改革やICTスキル向上を図ることができた。ブロックごとの研究授業では、ICTの有効性について理解を深める一方で、「ICT活用が目的化していないか」「教科の本質を大事にした授業になっているか」「授業のねらいにせまれているか」といった視点も損なわずに事後の意見交流がなされた。また、一人一授業の実践を通して、さまざまな教科で実践が累積し、先生方がICT活用の可能性を実感することができた。

(2) 5年理科の実践を通して

教師がタブレットを使うよう指示しなくても、自分たちで実験や板書の写真を撮ってアップロードしたり、実験の注意点をスライドにまとめたり、学習と関連するおすすめ動画を紹介したりと、児童が自分の方法やペースで学習を進めていく姿が見られるようになった。また、画面上で即時共有できるという良さを生かして、実験結果や振り返り、学習状況を共有し、学びを深めることができた。タブレットというツールが増えることで、できることが増え、ノート中心のみの授業よりも思考ツールとして使ったり、表現ツールとして活用したりする学習の幅が広がった。

3 課題及び今後の取り組みの方向性

ICT活用の取り組みについては、先生方の意識の差、スキルの差、児童のスキルの差が依然としてあることが課題である。そのため、情報教育主任を中心に学校独自の「ICTスキル表」を作成し、低・中・高学年で身に付けさせるICTスキルの指標とした。今年度は、完成した表を先生方に周知したところまでで終わってしまったため、今後さらに活用方法を検討していきたい。また、タブレットの使い勝手の良さを感じる児童がいる一方で、「伝えることはできるけど、ノートの方がいい。」「意見交換はできるけど、自分の発表の場が少なくなっている。」といったアンケート回答が見られるようになった。教員側も、タブレットだと「意見交流が話さなくても成り立ってしまう」ことに疑問を感じている回答が見られた。デジタルとアナログそれぞれの強みを理解し生かしながら、児童が主体的に選択して学ぶ姿を目指していきたい。また、理科においては、ICTを活用する一方で、できるだけ現象にふれる実体験を重視したい。学びを深めるための道具の一つとしてのICTの使い方を、これからも研究していきたい。



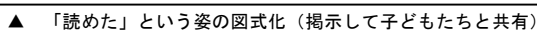
～「令和の日本型学校教育」の実現に向けた2年間の実践～

教諭 小島 望

私の課題意識は「算数科のような問題を解いた時の『わかった』『できた』という達成感や、学習への目的意識及び意欲が、説明的な文章の学習において希薄なのではないか」ということにある。実際のところ、本学級 29 名の子どもにアンケート（R5. 4. 21）をした結果、「説明文は難しい」「言葉や構成が分かりにくい」「説明が苦手だし、楽しくない」という回答が半数以上であった。文学的文章と比べても、説明的な文章が難解な印象を感じる学習者や授業者は、おそらく私だけではないだろう。そのような中、「令和の日本型学校教育」についての記述がある中教審答申（R3. 1. 26）では、急激に変わりゆく予測不可能な社会変化の中で、子どもたち一人一人が答えのない問いに立ち向かうことのできる資質・能力を身に付けることの重要性が示されている。

(1) 「読めた」という読みの深まった姿の具体化と共有

これまで説明的な文章の学習では、とすると、子どもたちにとって「なぜ授業で説明文を読むのか」「何ができるようになったのか」「学んだことがどのようにつながっていくか」という点がやや不明瞭だったのではないかと考える。これは授業者自身にも言えることで、指導する側がその点を明確にして教材研究や授業に取り組めていなかったからとも考えられる。こうした中、子どもたち全員が「読めていない」「読めていないかもしれない」に挙手したため、「なぜそう思ったのかな。」と問いかけると、「何となく分かった感じになっているだけな気がする。」「算数と比べて、スッキリ解決する感じが無い。」「もっと楽しく説明文を学びたい!」という問い¹を引き出すことができた。そこで、説明的な文章の学習における「読めた」²とはど



このような目的意識をもち、単元全体を通して自分がどの程度「読めた」のかを振り返りながら学習したことで、子ども自身が見通しをもって進んで学ぶことができた。「先生、今日は結構読めました!」「めちゃくちゃ読めてスツキリです!」「うーん、なんか全然読めませんでした…。」と話す姿が授業後に見られるようになってきたことは、学びに真剣に向き合う子どもたちの輝く姿であると言える。

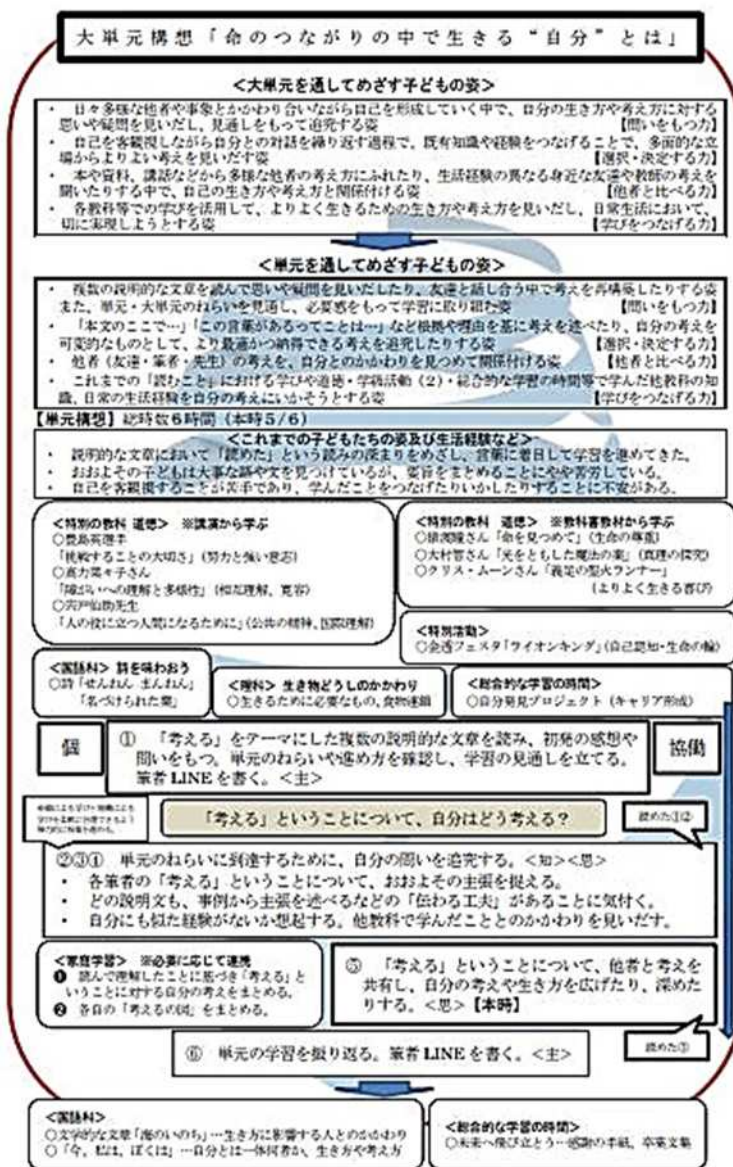
2 「読めた」とは、説明的な文章の学習における読みの深まった姿を具体化した授業者の造語。国語科学習指導要領「C 読むこと」(1)ア・ウ・オ・カを参考に定義。

(2) 説明的な文章の題材を軸に、他教科と関連を図る大単元の構想

単元：『考える』ということについて、自分はどう考える？（光村図書6年）

本単元は「考える」ということをテーマにした複数の文章を読み、自分の考えをまとめ、伝え合うことがねらいであるが、その中で、子どもたちが本教材を読む必要感をもつことが大切である。また、小学校生活最後の説明的な文章の単元として、読んで理解した筆者の主張や構成上の工夫などを基にしながら、これまでの知識や経験を踏まえた多様な考えをつなぐことで、自分とのかかわりでこの難解なテーマについて向き合ってもらいたいと考えた。そこで本単元を「自分の考え方や生き方を見つめることを目的とした大単元」の一つに位置付けて実践していくことで、教科等横断的なカリキュラムの中で多様な知識や経験を培いながら、「読むこと」の学習の充実を目指した。

本単元に至るまで、子どもたちと「自分とは何か」や「生きる上で大切なこと」を考える機会を多くの授業で意識的に取り入れてきた。その結果、本単元の導入では、抽象的なテーマである「考える」ということについて、自分の考えを見つけていこうとする必要感をもつことができた。また本時では、これまでの学びを手がかりとしながら、自分の事例を挙げて考えを説明することで、説得力のある意見を述べ合う姿が見られた。これは子どもたちの中で、学びが単発かつ断片的なものという捉え方ではなく、あらゆる授業や日常生活につながっているという認識が高まっているからこそ、生まれた姿であると考えられる。本時終了後、多くの子どもたちが黒板の前に集まり、授業の内容について語り合っていた。こうした子どもたちの姿こそ、答えのない問いに立ち向かい、学びを創造していく姿ではないかと考える。



▲ 子どもたちが本時に向けての考えをまとめる際に使用した「考えるの図」（学習支援アプリ「ロイロノート」を使用）。各筆者の主張や構成上の工夫とともに、他教科の学びや自分の事例、友達の考えなどを位置付け、考えをもつことができた。



▲ 研究授業（本時）後の子どもたち。まだまだ話し足りない！

(3) 「読めた」と実感するための教師のかかわり

① 自分の問いを追究するとともに、他者と協働する時間の設定

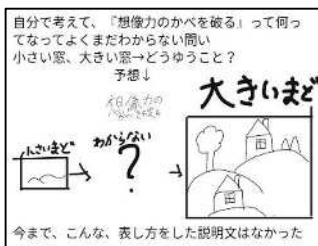
初発の感想後、各単元のゴールに至るまでに解決したい問いをもったり、それが本当に追究可能なのか互いに吟味したりする時間を設けることで、国語科のねらいに沿ったまま、一人一人が追究したいことを学習することができるようにした。これは、必ずしも一人で学習するのではなく、必要に応じて自然に学習集団を形成し、互いの問いについて考えを述べ合ったり、異なる問い同士のつながりを見出したりするなど、他者と協働的にかかわりながらも、自分自身の問いをじっくり追究していく学習である。その中でも、本文の構成や順序の工夫、筆者の主張等に気付き、国語科の資質・能力を高めていくことができた。教師も「学びのガイドブック」（各自の問いや追究の仕方を一覧にしたもの）を示しながら、一人の学習者として子どもたちとかかわり、ともに学びを深めることができた。

② 言葉を映像化することで、実感を伴った理解へ導くための発問の吟味

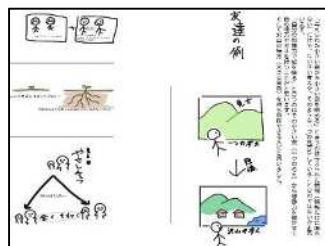
単元：「文章の要旨を捉え、自分の考えを発表しよう（光村図書5年）」

序論と結論に筆者の主張があることに気付くことで、要旨を捉えること自体はおおよそできた子どもたち。しかし、ある子どもが「もう要旨は絶対に分かっている（構成や大事な言葉は捉えている）のに、最後に下村健一さん（筆者）が何を言いたいのか分からない。」と問いをもっていた。そこで「実感を伴った要旨の理解」に迫るため、次のように発問した。

- T： みんなはもう、要旨を捉えられたのだから、下村さんが「なっってほしい」と願っている…（間をおいて、黒板に「あたえられた～判断できる人間」と書かれた人型の模型を貼る。）
 そういう人に、なれそうですね。
- C： …はい！（要旨は書けたため、筆者の言っていることを文字上は理解している。）
- C： え、うーん…。（言葉に立ち返ると、何となく抽象的で捉え難いことに気付く。）
- T： ○○さんはどう思うのかな。（問いをもっていた子どもを指名する。）
- C： （モニターに自分の問いを映しながら）最後のところで、今まで分かりやすい言葉を使っていたのに、「小さいまど」とか「景色」とか「壁を破る」って、何のことか分からない…。
- C： …あー。確かに。言われてみると、ちょっとイメージしにくい。
- T： ○○さんの気持ち、伝わりました？ じゃあこれって、例えるなら、どんな人かな。（口々につぶやき始めたため、活動を指示して自分の考えをもたせる。）



▲モニターに映されたある子どもの問い

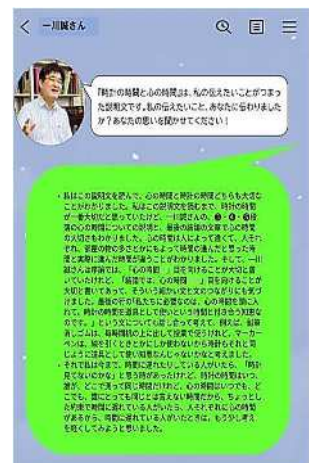


▲筆者の主張を絵や図、別の例で表す

子どもたちは、友達の問いからも一度言葉に立ち止まり、「分かっているつもり」になっている言葉を具体化しようとしていった。すると自分の考えを言葉だけでなく、絵や図を用いながら伝えることで、抽象的だった言葉がより鮮明になり、一読しただけでは分からない読みの深まりを実感できた。

③ 筆者との対話を意識しながら、自己を客観視する振り返りの実践

子どもたちは説明的な文章と向き合う中で、筆者との対話を楽しみ、自分自身の考え方や生き方を見つめてきた。そこで、学習を振り返る際も筆者との対話をより意識させることで、一人一人が自己の学びや学び方をメタ認知し、本時や単元での成長を実感できると考えた。それが「筆者 LINE」である。単元末に「筆者にメッセージを送る」という形式で振り返りを行った。子どもたちは、これまで何度も読み返したり、筆者の考えと比べたりしたことで見いだした自分の考えを、真剣にまとめ直す姿が見られた。筆者との対話を意識した振り返りによって、振り返るという行為の意味と必要性を感じながら、これまでの学習を客観視し、自分の生き方につなげることができた。



▲学習者および一読者としての視点で自分の考えを伝えている。

3 実践の成果と今後

子どもたちは広大な学びの海に放り出され、「学びなさい」と言われても学ぶことはできない。一人一人が自分の力で学びを創造するためには、学びに向かう目的をもち、適切な学び方を獲得するとともに、その教科の本質を学ぶ喜びを実感することが必要だと考える。内発的動機に基づく自分の問いの追究と、多様な知識や考えを精緻化していく協働的な学びの往還によって、自ら学びを創ってきた子どもたち。説明的な文章の学習においては、授業後に「読めた」と言える喜ばしい自分の姿を目指して、何度も本文の言葉に立ち止まってきた。そんな2年間の説明的な文章の学習で、子どもたちが学ぶ喜びや達成感を味わいながら、以下のように成長することができた。



▲ 説明文が楽しくなってきた～！！

	好き	やや好き	やや苦手	苦手
説明文の学習は好きか。(R5. 4. 21) ※1名欠席	7 (25%)	6 (21%)	13 (47%)	2 (7%)
〃 (R5. 12. 15)	9 (31%)	12 (42%)	7 (24%)	1 (3%)
〃 (R6. 12. 16)	12 (41%)	10 (35%)	7 (24%)	0 (0%)
	よく読めた	読めた	あまり読めなかった	読めなかった
説明文を「読めた」か。(R5. 4. 21) ※1名欠席	10 (36%)	15 (54%)	2 (7%)	1 (3%)
〃 (R5. 12. 15)	18 (62%)	9 (31%)	2 (7%)	0 (0%)
〃 (R6. 12. 16)	20 (69%)	8 (28%)	1 (3%)	0 (0%)

〈説明文の学習を「好き」と回答した理由〉

C 1 : 問いをもって、自分の好きなように追究し、交流しながら深めていくのが楽しい。

C 2 : 苦手、むしろ嫌いだった説明文が、問いの追究をすることで楽しくなった。前より深められるようになった。

C 3 : 説明文は筆者の思いとかが文に詰め込まれていて、問いを追究するときに「説明文」だから必ずどこかに追究できる足跡がある。それをどんどん広げて最後に「読めた！」ってすごく思える。

〈説明文の学習で学んだこと・身に付いたこと〉

C 4 : 文の言葉に着目して、より深く読むことができるようになった。接続語や文字一つでもあるかどうかで、意味が大きく違うことを知った。

C 5 : 5年生の最初は全然わかっていなかったけど、筆者が何を一番伝えたいのか、その考えがどこにあるのか、すぐわかるようになった。要旨もスムーズにまとめられた。

C 6 : 説明文の構成がわかり、どんな工夫があるかを見つけることができた。資料と文のつながりや、事例の重要さなどを読み取っていくことで、自分にもいかすことができた。説明文のよさや楽しさを学ぶことができた。

これまで説明的な文章の学習だけではなく、各教科等の授業においても、自分の力で学びを創造していくことができるように子どもたちと日々かかわってきた。そうした成果が、授業中や授業後に瞳を輝かせて考えを語る姿に表れたことは嬉しいことである。また数値的な結果としては「令和6年度全国学力・学習状況調査」(R6. 4. 18)において、全国平均と比較すると、国語科は8.3ポイント、算数科は10.6ポイント上回ることができた。こうした日々の授業が、この結果の一助になったのかもしれない。



▲ 子どもも教師もともに楽しく学ぶことを大切に

私はこれまでの教職人生の中で、恥ずかしながら説明的な文章の学習を研究したことはなかった。正直なところ、この学習が私自身あまり好きではなかったからである。しかし、筆者の精一杯の思いや題材の魅力が詰まった文章を読み、自分の考えや生き方を広げ深めていく。その可能性を多様に秘めているのは、説明的な文章だと考える。今回の研究により、「読めた」と言える姿を目指し、広い知識や豊かな経験の中で、目の前の筆者との対話を楽しむことが大切であると、確かにすることができた。子どもたちが「説明文って楽しい！」と瞳を輝かせて学ぶことができるよう、今後も教材研究を重ね、多様な授業に挑戦していきたい。

災害から主体的に身を守ることができる資質能力の育成

福島市立松陵中学校
教諭 早乙女まゆみ

1 はじめに

2011 年の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から 13 年が経過している。生徒は当時 0～2 才であり、震災当時の記憶がほとんどないため、震災直後のような防災への意識や、放射線等の知識の必要感は低下している。一方、私たちは、震災直後の緊急事態における教育内容から、それらを系統的体系化し、関連する教科等の知識理解を基盤として、生徒一人一人が自ら考え判断できる力をつける段階に移行していかなければならない。しかし学校による取り組みの差も大きく、実際本校生徒の原子力災害の知識は、他の災害に比べて顕著に低かった。

また、近年自然災害が多発しており、本校の生徒の多くも災害に不安を感じている（大いに不安を持っている 31.5%）。小学校までの防災教育で地震、火災等の一般的な避難行動についての知識はもっているが、本校の避難訓練もパターン化しており、自分で考えた避難行動をとる機会はなかった。実際、休み時間に地震や火災が起こったらどうするかとの質問に、教員や放送の指示で動くと答える生徒もいた。理科の授業では、実験など与えられたことに意欲的であるが、考察など理論的に考えていくことを苦手としている。このような生徒の実態から、災害から主体的に身を守る資質能力の育成が必要だと考えた。

また本校は、来年度学区内の小学校と統合し、義務教育学校となる。新しい学校の教育の柱として、「将来役立つ生き抜く力の育成」や「地域とのつながりを生じた探究活動」を考えており、この防災教育をその活動の一つとして繋げたいと考えている。

上記のような状況と背景を踏まえ、実践的な判断や行動につなげられるよう災害の仕組みやイメージなどをもたせる理科授業を行った。また、他教科でも東日本大震災や原発事故の教訓を学ぶ機会を取り入れながら、災害の知識を身につけさせる機会を積極的に設けた。その上で主体的に取り組める実践的な避難訓練を企画し、科学的な知識を生かす経験を生徒に蓄積させる実践を行った。

2 研究の仮説と実践内容

仮説 1

- 災害の仕組みやイメージをもたせる工夫を行えば、災害の科学的な知識や、どのように対応するかという基本的な知識理解が深まるのではないかと。（内容 1 内容 2）

仮説 2

- 実践的な避難訓練を行うことで、科学的理解に基づく判断力や行動力を養うことができるようになるのではないかと。（内容 3）

実践内容

- | | |
|------|-----------------------------|
| 内容 1 | 理科の学習における災害に関する知識・理解の学び |
| 内容 2 | 理科の学びと関連させた学級活動、総合学習、他教科の実践 |
| 内容 3 | 自ら考え判断できる力を育てるための避難訓練 |

3 実践

1 理科の学習における災害に関する知識・理解の学び

理科では、避難訓練の時期に合わせ、その分野の時期を変更し、また避難訓練に合わせた「防災理科」の時間を各学年 3 時間設けるなど、カリキュラムを一部変更し、以下の内容を行った。

（1）火山噴火災害（6 月）

- ① 1 学年 噴火の映像や火山灰の観察を通して、火山によって、噴火の様子や火山灰の鉱物に違いがあることを学んだ。
- ② 2 学年 吾妻山や安達太良山が噴火した際、松川町に影響を及ぼす火山灰による災害（火山泥

流や土石流)が起こる仕組みがどのようにおこるか実験で確認し、そのメカニズムを知ると共に、ハザードマップを見ながらどのような行動をとると良いか考えた。実際火山灰を使って降雨後の粘性を確認し、その影響なども考えた。

③ 3 学年 過去の日本における噴火の様子から、どのようなことが起こりうるか学び、自分たちのできることを考えた。

④ 全学年 磐梯山噴火記念館館長 佐藤公 様より、県内の火山について過去の噴火の歴史や現在の状況等について講演を頂いた。

(2) 地震・火災災害 (10 月)

① 1 学年 東日本大震災の際に発生した地震火災の実際の動画等から、地震火災が起こる原因を調べ、災害を防ぐ方法や対応策を考えた。

② 2 学年 消防白書等から火災の際に発生する煙が命を奪っていることに気が付かせ、煙の進み方やその理由について模型を使い確認した。また、避難訓練に合わせ、水槽で三階建ての模型を自作し、学校で火災が起こった時どのように行動すると良いか考えた。

③ 3 学年 地震後の火災の原因を調べることや、通電火災の実験を通して、地震後の火災を防ぐための方法を考えた。

(3) 原子力災害 (11 月)

全学年 福島県立医大教授 坪倉正治 様より、放射線の基礎知識や放射線を学ぶ意義、原子力災害が起こった当時の様子などについて 2 回講演を頂いた。

2 理科の学びと関連させた学級活動や総合的な学習の時間、他教科の実践

(1) 東日本大震災・原子力災害伝承館、請戸小学校見学 (1 学年)

(2) 福島県環境創造センター交流棟 (コミュタン福島) 見学 (2 学年)

放射線の基礎知識や原子力災害の原因や経過について、映像や模型を使いながら学んだ。また、実際に霧箱で放射線の飛跡を確認し、 α 線が紙で遮蔽できる様子などを観察した。

(3) 未来への手紙 (1 年生)

震災学習や原発事故の学びからの感想を書き、教訓を次世代へ伝承し、後世へつなぐ県の取り組みに参加した。

(4) 日本赤十字社による非常食体験 (全学年)

赤十字社の方による講話とハイゼックス袋を使ったカレー作り等を行い、災害時の非常食を体験した。

(5) 東日本大震災の教材を使用した道徳の授業

3 避難訓練での自ら考え判断できる力を育てるための実践

(1) 紙面訓練

出火場所や自分の位置など与えられた状況から紙面上で避難経路を考え、理由を班で話し合った。安全に避難するためには、状況に応じて自分で判断し行動することが大切であることに気付く取り組みとした。

(2) 火山噴火災害避難訓練 (6 月)

福島市長直轄危機管理室と連携し、専門防災官からの講話を行った。過去の噴火災害や噴火時の身の守り方を知り、実際、近くの吾妻山が噴火した際、どのように行動すべきかシミュレーション課題に取り組んだ。

(3) 地震・火災災害避難訓練 (10 月)

福島市長直轄危機管理室と連携し、出火場所、出火時間(昼休み)を生徒や教職員に知らせず、またけが人や障害物、煙等も発生させるなど、実際の状況に近づけた避難訓練を行った。生徒は自ら状況判断し避難経路を考え、避難を行った。

(4) 原子力災害避難訓練 (11 月)

原子力災害の事故に対応した避難方法の確認と生徒を確実に保護者へ引き渡す訓練を行った。特に教員が事故発生による状況確認や学校の対応、引き渡し時における情報共有の方法を学ぶ機会とした。

4 その他

- (1) 東日本大震災追悼集会における講話
- (2) 教員の研修機会の確保・・・防災に関する研修に積極的に参加し、伝達講習等を行い、教員の意識向上に取り組んだ。
- (3) 防災ポスターの掲示・・・理科室前に防災に関する情報を掲示するスペースを設け、意識向上を図った。

4 実践の成果

(1) 仮説①について

各避難訓練の時期に合わせて、防災理科の授業、専門家の講話等、総合等の取り組みを行った。事前、事後に各災害について基本的な内容を自分で説明することができるかというアンケートをとることで、生徒の変容を調べた。また、授業や講話、施設見学等の後の生徒記述によって基本的な知識や理解が深まったかを確認した。

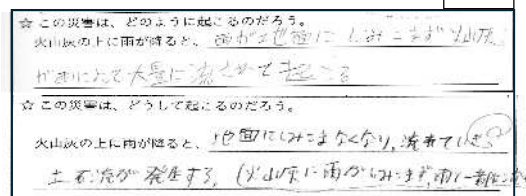
アンケートの結果、3つの災害において、基本内容を説明できると肯定的に答えた生徒の割合が増加した。(火山災害 80%→92% 地震火災災害 82%→90% 原子力災害 47%→81%) 特に原子力災害においては、事後に大きな変容を見せ、講話や施設見学の感想にも、新しいことを知ることができたと驚きの様子が伝わるものが多かった。

防災理科(火山噴火災害)の授業では、1学年では通常3学期に行う「大地の変化」の内容の一部を6月に行った。避難訓練での講話で扱った火山灰の基礎知識を事前に理解できる点では有効であった。生徒は火山灰が灰ではないことを知り、火山による噴火の違いに驚きを見せていた。2学年は、災害に焦点を当て、特に融雪火山泥流や土石流のメカニズムについて学習した。実験から、どのように災害が起こるかを考え記述することや、ハザードマップを見ながらどのように行動すると良いか考えることができた。(資料1)

「火山が噴火したらどのような行動をとるか」といったアンケートからは、融雪火山泥流に気を付けることや噴石、火山灰に対しての具体的な対策を書く生徒が見られるようになった(資料2)。噴火の際に発生する災害について理解を深め、自分の住む地域に合わせた避難行動を考えることができるようになったと考えられる。

防災理科(地震火災災害)において、2学年では、発生する煙から身を守る方法について考えた。小学生の理科や避難訓練などで、煙が上昇することや避難行動を多くの生徒が知っていた。しかし、実際に煙が模型内で進む速さや、すぐに上昇し天井を伝うような進み方に、予想とは異なることを知り、驚きの反応を見せる生徒もいた(資料3)。3階建ての模型では3階が先に煙で白くなる様子や防火扉を付けた2階に煙が入りにくい様子を観察し、避難行動の理由を煙の性質や体のつくりを基に改めて考えていた(資料4)。3学年は、通電火災について扱ったが、授業前は知らない生徒が多かった。実験を通して、地震後火災が起こる原因や防ぐ方法について考えることができた。

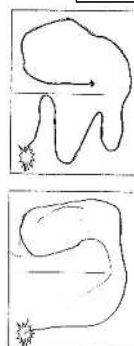
資料1



今、近くの山が噴火したら、あなたはどのような行動をとったり、どのようなことに気を付けたりしますか。		
生徒	事前	事後
A	噴火したら頭を守る	近くの小屋やビルなどに逃げ込む。それが逃げられない場合は、頭を守り、できるだけ低い姿勢で、目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。
B	なるべく速く避難する	建物がない場合は、川や海に逃げ込む。川や海に逃げ込む場合は、流れの速い場所を避け、浅い場所を目指す。
C	頭を守りながら建物内に避難する	外出している場合は、頭を守り、できるだけ低い姿勢で、目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。
D	もし火山が噴火した場合、外にいた場合は近くの安全な場所に避難し、身の安全を確保する	建物の中に避難したり、できるだけ高いところに逃げる。避難する場合は、目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。また、冬の日からは、噴出した溶岩や火山灰が川を下ってくるので、できるだけ川から離れたところに避難する。
E	火山灰から遠ざかる	火山灰から身をを守るために屋内に逃げ込む。火山灰が降り注ぐ場合は、目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。また、冬の日からは、噴出した溶岩や火山灰が川を下ってくるので、できるだけ川から離れたところに避難する。
F	ハザードマップなどを見て火山の位置を確認して避難する	遠くの場所だったら火山情報を確認し、近くの場所だったら身をを守る。避難する場合は、目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。また、冬の日からは、噴出した溶岩や火山灰が川を下ってくるので、できるだけ川から離れたところに避難する。
G	安全な建物の中に避難し、身の安全を守る	安全な建物に行く。川から離れる。
H	状況を確認し安全な場所へ避難する	高いところへ避難する。
I	頭を守る	頭を守り、目を保護する。目があれば目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。また、冬の日からは、噴出した溶岩や火山灰が川を下ってくるので、できるだけ川から離れたところに避難する。
J	窓から離れる	窓を守る。火山灰が窓に当たらないようにする。
K	地面を確認して避難する	地面を確認して避難する。避難する場合は、目を保護し、鼻をマスクやハンカチで覆う。また、冬の日からは、噴出した溶岩や火山灰が川を下ってくるので、できるだけ川から離れたところに避難する。
L	先生や親の言うことをよく聞く。またハザードマップで火山の位置を確認する	自分のいる場所の近くに大きな山があったらそこから離れ、スモークやハザードマップを見て安全な場所へ逃げる。

資料2

資料3



資料4

～だから(理由)～	このようにする(行動)
- 上に煙が上るから - 自分の体は煙より重いと - 煙が上るから - 煙が上るから - 煙が上るから	- 建物の下へ入る - 一階の部屋から二階へ移動する - 窓を全部閉める - 煙が上るから - 煙が上るから
～だから(理由)～	このようにする(行動)
- 上に煙が上るから - 自分の体は煙より重いと - 煙が上るから - 煙が上るから - 煙が上るから	- 建物の下へ入る - 一階の部屋から二階へ移動する - 窓を全部閉める - 煙が上るから - 煙が上るから

坪倉教授の講話では、放射線の基礎知識の他、震災当時の福島県の混乱、現在の世界情勢、放射線の利点などを知り、学ぶ意義や正しく知ることの大切さを学ぶことができた。県内の施設見学でも、東日本大震災の状況や、今に至る経過を知ることができ、放射線の飛跡の観察等も行いながら、放射線の基礎知識を学んだ。数回の体験的な学習を通して、生徒は放射線についての知識や身を守るための知識を定着させることができた。

これらの防災理科の授業や、他教科での取り組み、講話や見学を通して正しい知識を身につけ、災害のメカニズムを知ることから避難行動の理由を考えることができた生徒が見られた。このことから、災害の科学的な知識や、どのように対応するかという基本的な知識理解が深まったと考える。

(2) 仮説②について

地震、火災避難訓練は、1回目の紙面訓練では、自分で与えられた状況から、グループで避難経路とその理由を考えた。生徒は、グループで出火場所や建物の構造など、様々な条件を考えて、避難のルートを考えて。生徒の感想からは、自分で考えて行動する必要性を感じることができたと考えられる。2回目は昼休みに予告なし訓練を行った。各自、地震時には安全な場所に素早く移動し、その後、火元から離れた避難経路を選んで避難することができた。教員にとっても、多くのことに気づく、有意義な機会となった。生徒・教員共に実際の地震や火災時、考えて行動する必要性や、状況に合わせて命をどのように守るか、改めて深く考える機会となったと考えられる。

火山災害の避難訓練では、シミュレーション課題において、登山中や街中にいる時等、場面を分けて考え、噴石や火山灰、融雪火山泥流に対する対処法を学ぶことができた。また原子力災害の避難訓練は、多くの保護者の協力を頂きながら行い、原子力災害時、気を付けるべき放射線への対応や学校の対処方法を確認することができた。

一方、火山と原子力災害の避難訓練は、生徒が状況を判断して実際に行動をとるような避難訓練ではなく、自分で考えて判断し、行動する取り組みとしては不十分だった。また、どのように判断を行ったか、事前事後の変容を検証することが難しかった。避難訓練を、各生徒が自ら考え判断する取り組みにするためには、更なる方法の工夫や検証の仕方が必要であると考えられる。

1年間の活動を振り返った感想では、25%程度の生徒に「～するようになった」「今後～していきたい」との記載が見られた。防災の意識が薄かったことに危機感を感じ、学ぶ必要性を感じる等、意識の高まりを感じる結果となった。

○生徒の感想(紙面訓練)	
もしも時の避難経路など意識したことがなかったので、日々からいつ起きても良いように意識しながら生活していきたいと思いました。	
色々な事を想定して避難経路を考えるのが大切だと思った。	
逃げる時は、出火場所から少し離れたところのルートを選んだから、本当になった時にも思い出してやっていきたい。	
○生徒の感想(地震・火災災害避難訓練)	
避難訓練時、トイレに行っていて実際ではこんなこともあるのかなど印象に残った。	
逃げる時はみんな一緒なので、あちこちから人が来るのでぶつかったりして怪我をする恐れがあるのでできるだけぶつからないようにした方がいいのだと思いました。	
避難訓練中足元ものが落ちていて、実際そういうことが起こるから気を付けようと思った。	
呑気に逃げていられないなと思った。	
○教員の感想((地震・火災災害避難訓練)	
所在不明の生徒がいたときに、捜索する場合の手順が決まっていなかったため、独自の判断で動く様子が見られた。(報告ののち指示を仰ぎ行動することの徹底が必要)	
生徒を落ち着いて避難させることに意識が行きすぎた。人命を守るための行動をとる必要性を改めて認識させるためにも今回の試みはよかったと思います。	
大変よい訓練であった。このように、よりリアルな場面設定をすることで、訓練に真剣に取り組む雰囲気生まれとを感じる。	
役割が複数に重なっていて、優先するべきは何か、分かりにくい先生もいます。それを明確にするとともに、当日いないときのバックアップが誰なのかを考える必要があります。	

5 今後の課題

○ 本校独自のカリキュラムの編成

今回の実践では、避難訓練を軸にそれに合わせて理科、学活、道徳、学校行事等でカリキュラムを考え実施した。防災理科で扱う内容を整理し系統化することや他教科の実践、地域とつながる実践などをさらに考え、体系化しながら、本校独自の特色ある有効なカリキュラムを考える必要があると考えている。

○ 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成

多くの試みにより、生徒は災害に対する科学的な知識を増やすことができたと考えるが、一方、それを発揮して何が必要か思考し、適切に判断する力や行動する力の育成については、さらに多くの機会と工夫が必要である。また生徒の変容を見る避難訓練の検証方法についても、検討していきたい。

1 はじめに

本校が目指す学校の姿、スローガンは、「人がつながり ともに創る みんなの学校」である。このスローガンには、コミュニティ・スクールの実施に伴い、地域と共に創る学校というこれからの学校の姿とともに、「生徒たちが自分の手で学校を創り、地域の未来の担い手となっていく」という育てたい生徒の姿が示されている。

一方、学校事務職員という立場としては、目指す学校の姿を共有しつつ、「チーム学校」の一員として、教員とは異なる専門性を発揮しながら、学校運営の課題を解決することが求められている。

そこで、本年度の研究テーマを「子どもの願いに寄り添った学校施設の整備・予算の編成と執行」とし、子どもたちの豊かな学びに資するべく実践を行った。

また、災害が頻発している社会情勢から、「子どもたちにとって安全で安心な学校づくり」というテーマは、本校のみならず、全ての学校に共通する課題である。そのため、学校事務の共同連携グループという枠組みによる研修会を企画し、学校事務職員の視点から、リスクマネジメントを図った。

2 実践の内容

(1) 子どもの願いに寄り添った学校施設の整備・予算の編成と執行

① 予算編成に伴う子どもアンケートの実践

子どもの願いに寄り添うべく、学校施設・予算に関する生徒へのアンケートを実施し、学校の課題解決に取り組んだ。子ども目線での予算獲得に向けて、各教室を回り、学校事務職員の仕事への理解を得ながら、子どもアンケートをお願いした。昨年度までは手書きで記入して提出を促していたが、今年度から生徒たちが持っているタブレットを利用してGoogle フォームでアンケートを実施した。

スローガンにある「人がつながり ともに創る みんなの学校」のもと、生徒・教職員の思いを、予算要望書にして提出することができた。

本校に着任してから4年目であるが、子どもアンケートからの要望については、市教育委員会でも必ず対応していただいている。



②生徒会と共に予算を考える

今まで生徒会会計は、教員が予算・執行・決算を担当していたが、教員が子どもと向き合う時間の確保と生徒たちが自らの手で学校づくりを行っていくため、学校事務職員が担当している。予算編成や執行状況、決算書作成には生徒会の会計の生徒とともに、どうすれば有効に活用できるか話し合いを持ち、生徒の興味・関心を高めることができた。



(2) 学校事務の共同連携グループでの学校防災について考える

学校事務職員の視点から自校の防災対策を考えるために、富岡小中学校を視察し校長先生に講話をいただいた。津波が迫っている状況下での子ども・教職員の行動や、甚大な災害・困難について改めて知る機会となった。当時小学生として震災を経験したグループ員もあり、それぞれから命の大切さを伝え守っていくという使命を強く感じた。他のグループ員も、学校事務職員としての目で日頃の点検や避難経路を確認する必要性を強く感じていた。



3 実践の成果

予算編成に伴う子どもアンケートについては、「チーム学校」の一員として生徒の思いを要望書に反映することができた。また、子どもたちに結果を周知したことにより、予算編成の参画への実感を子どもたちに与えることができた。そして、子どもたちの学習環境の改善、カリキュラムマネジメントへの参画、教職員や関係機関との連携・協働など、大きな成果を感じることができた。これからも子どもたちに寄り添った、安全で安心な学校づくりのために全力を尽くしたい。

学校事務の共同連携グループでの学校防災について学ぶ研修については、視察後すぐのアンケートでは、災害に直面する危険性を考え、対応できる備えが必要だと感じ、緊急時の動きを常日頃からシミュレーションしておくことが重要だと感じた。そして安全で安心な学校づくりのために、学校防災について深く学ぶことができた。

これからも、市内の学校事務の共同連携グループと情報を共有し、二本松市で統一すべき点を明確にしながら、学校事務の効率化そして子どもの学びの支援に向けた課題解決に向けて、学校事務の共同連携グループのまとめ役として、市教育委員会と更なる連携を図っていきたい。

4 課題及び今後の取組の方向性

これからの学校事務職員は、学習指導要領などの教育的知識とコミュニケーション能力が必要だと感じる。今後、働き方改革が進んで行く中、教員が子どもと向き合う時間の確保を常に意識し、授業以外の業務に積極的に関わっていききたい。

部活動については、特技を生かし卓球部の指導に加わり、教員が子どもと向き合う時間の確保を常に意識し、来年度の目標である県大会出場に向けて、未来への夢や希望を子どもたちに与えられる顧問として頑張っていきたい。学校事務職員ではあるが、チーム学校の一員として、これからも子どもたちのために、指導力向上のための研鑽に励んでいきたい。

「天栄ならではの」の総合的な学習の時間「ふるさと・夢プロジェクト」の実践について

天栄村立天栄中学校

教諭 善方 昭博

はじめに

ここまでの教員人生において、多くの子どもたち、多くの先生方、そして教育実践や研究に関わることができた。このような幸運に恵まれたからこそ、現在まで自分が教員を続けられ、現任校において一つの結実が見られたと考えるとともに、今回このような榮譽を拝していただけることに對し、感謝の念に絶えない。今日までに出会った多くの子どもたち、ご指導をいただいた多くの先生方に深く感謝したい。

1 実践の内容および方法等

(1) 研修主任としてのアプローチ

①「ふるさと・夢プロジェクト」始動、「探究的な学び」初年度の試み

令和6年度で3年目となった、本校の総合的な学習の時間「ふるさと・夢プロジェクト」とは、学年ごとに設定したテーマに沿って天栄村の豊かな人・もの・ことを素材にした探究的な学びを繰り返すことによって、生徒が自身のよりどころであるふるさとをより深く理解して誇りをもったり、自身の将来や夢に向き合い、主体的にその実現に向けて取り組んだりする学習活動である。

令和4年度に研修主任として初年度をスタートした際には、手探りの中、スタートを切ることにしたが、まず各教科と総合的な学習の時間（以下、「総合」と）の「往還」とはどのようなものなのか、また、その「往還」を実現するために各教科と「総合」との「架け橋」となりうる「夢の実現に向かう力」をどうすれば身に付けていけるのか、さらに、生徒が各教科における「見方・考え方」を働かせて主体的・対話的で深い学びを実現するためにどのような手だてを取るべきか先生方と研修を重ねた。

その推進の中核となったのが週1回授業時間1コマに設定した現職教育委員会であった。管理職、教務主任を始め各学年の担当者と見通しを確認し合い、探究的な学習の方法や学習の実際、改善を検討し合うことで「総合」の推進を図ることができた。研修主任として、会議では各学年の「年間学習計画」及び「単元学習計画」をもとに、生徒を指導する上で我々教員が「ふるさと・夢プロジェクト」の探究的な学びの連続性を見据え、共有し合うことに努め、各学年を通じて全教員に周知した。また、計画表には「夢の実現に向かう力」（※資料1）を発揮させるために必要な「知識・技能」が掲載してあるため、「探究のプロセス」のどの段階でどのような「知識・技能」が必要かを把握し、計画的に効率よく生徒に伝え、指導できるよう確認し合うことに努めた。これらは現在の実践につながり、新たに「単元配列表」が加わり、これを各学級に掲示できたことで生徒とともに「往還」や「総合」単元構想を共有することが実現できている。

②単元構想における「夢の実現に向かう力」の設定（学習指導案の整備）

各教科の単元構想段階では、上記「夢の実現に向かう力」を単元指導計画に位置付けることで身に付けさせたい資質・能力を明確化・焦点化した指導につながるとともに、指導と評価の一体化・授業改善が図られた。これは、年1回一人一授業（相互参観授業）を実施する際の学習指導案（※資料2）に盛り込み、教員相互の研修の中で生かされている。

③持続可能な取組に向けて

上記①②は、担当者が変わっても引き継ぐ学年が指導できるように作成・保存を進めてきた。例えば、日頃の実践の中での気づきを学年会で共有し、現職教育委員会で吸い上げてまとめ、更新す

るようにした。そのため、年度ごとに更新した内容・方法をベースにして、生徒の実態に沿ってさらに手を加えながら指導することに役立てられている。

(2) 教務主任としてのアプローチ

①「総合」の時数の確保

各学年のテーマに迫るために実施する、村内住民や村内従事者、村関係者を招く「ふるさと講座」、その他各学年の体験型講座（1年生「森林環境学習」、2年生「職場体験学習」「表現力育成ワークショップ」など）を実施するにあたり、十分な時数の確保に努めた。

また、今後も課題となるが、各学年「総合」総時数と各教科時数との兼ね合いや、「総合」を重点的に確保したい時期の相談と時数の割り振りなどがもう一つのアプローチとなった。ポイントとして押えたいことは、各学年が「探究のプロセス」としてどの時期にどの段階に進んでいるかを確認しながら時数配当することであった。

②持続可能化に向けて

各講座実施後に教員アンケート（各行事を含む）を行い、改善できるものをフィードバックできるようにした。学期に1度振り返りをする機会（職員会議）を設け、挙がってきた意見を年度末の教育課程編成会議にて再検討し、次年度のカリキュラム作成に活用した。毎週行われる現職教育委員会での記録も大いに参考になった。

2 実践の成果

(1) 生徒の姿や実感（学習意識アンケート結果から）

「往還」についての記述では、「総合」で活用できた場面を挙げて身に付いた資質・能力を記述している。例えば、「(各教科で身に付けた) 情報をまとめる力を使って、(「総合」の) 発表にいかすことができた。」(以下同様に) 『言葉の表現』や『文章の書き方』などが、総合の「文」を考えるとときに生かした。『情報の整理』をすることが、総合の情報を分類する場面で生かした。」等である。また、「総合」から「各教科」に生かされた場合として、「総合の発表用スライドを作成しているときの文章の作り方が、国語の文章を作るときに生かした。」「役割分担をして情報を集めたり、資料づくりをしたりすることが、社会や国語の班活動などで生かした。」などが挙げられる。生徒が各教科や「総合」で身に付けた資質・能力に有用感を覚え、「また使ってみたい」「次はこうしてみよう」という主体的に学びに向かう気持ち・意欲を高めていることが分かる。

(2) 教員間の課題意識の共有

初年度は、各教科・学年レベルで手探りの中、教職員が共通理解のもとでともに実践を継続できた。直面する指導上の課題を共有するのはもちろんのこと、「探究的な学び」や「往還」をどうすれば成立させられるのか検討・改善しては実践の試行錯誤が続いた。継続できたのは、目指す生徒の姿を明確にもって共有できる組織と計画表・ツールがあったからだと考える。

3 課題および今後の取組の方向性

(1) 生徒がより主体的に学ぶために

現在では「単元配列表」を作成し、各教科のどの単元で身に付けた資質・能力が「総合」と関連しているか、その逆の場合も含めて視覚的・直感的に理解できるようになってきた。この表を各教室に掲示し、生徒とともに本校の特色である「総合」を核とする学びを充実させることにつながってきており、今後一層の充実が期待される。

生徒たちがより一層主体的に学ぶ姿勢を引きしたり、育てたりするために、生徒自身が探究したい課題の設定ができることや、その課題を解決するために適切な手段を探したり、選択したりすることなど、生徒たちに預けて考えさせることが必要である。

(2)個人としての今後の取組の方向性

私自身としては、生徒がわくわくしながら向き合える課題に出会わせることに励んでいきたい。

また、我々教員はときに手を貸してしまいがちである。今後の最大の課題は、生徒が直面する「何とかしたいが、ではどうするか」にしっかり向き合わせることができるか、時間的な余裕が生み出せるかである。生徒たち自身が解決の糸口を見付けたり、決めたことに取り組んだ結果失敗したり、試行錯誤の末に解決できたりする経験をたくさん積ませることをどう確保していくかである。校内で十分に相談・検討の上で、生徒の主体性を発揮できる場面を準備していきたい。

※資料1：「夢の実現に向かう力」

「探究によって育まれると期待される力」（やまぐち総合教育支援センター）から抜粋

なお、「夢の実現に向かう力」は「思考力・判断力・表現力」として身に付けさせている。

課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現
・見通しをもつ ・問いを顕在化する ・価値のある適切な課題を見極める ・対比の視点をもつ	・他者とのコミュニケーションを通して情報を収集する ・目的に合った情報を収集する ・何が解決に役立つか見通す力	・複数の情報を比較し共通点や相違点を明らかにする ・事実や関係を構造的に把握する ・帰納的あるいは演繹的に考察する ・細分化する ・分類する	・根拠を明らかにして主張する ・目的に・意図に応じて表現する力 ・情報の受け手の状況をふまえる ・意見や考えを明らかにする力 ・自らの学びを意味づける

※資料2 単元計画例（「夢の実現に向かう力」の単元内での位置づけ・学習指導案より）

○ 単元の主な学習活動と評価規準

蓬 萊 の 玉 の 枝	3	【情報の収集】【情報の整理・分析】 ・物語の内容や場面、登場人物の考えや心情等を調べ、現代との共通点や違いを確かめる。 【自己の夢の実現に向かう力】 「事実や関係を構造的に把握する」	☐ 人物のものの見方や考え方、心情等について現代と比較し、共通点や特徴を、叙述をもとに説明することができる。 （思考・判断・表現）
	4 (本時)	・教科書掲載外の場面を読み、登場人物の考えや心情等を確かめ、交流して現代との共通点や違いを検討する。 【自己の夢の実現に向かう力】 「事実や関係を構造的に把握する」	☐ 人物のものの見方や考え方、心情等について、現代との共通点や相違点を挙げ、共感できるかどうか等の観点から自分の考えを、叙述を基に説明することができる。 （思考・判断・表現）
	5	【まとめ・表現】 ・「竹取物語」を読んだ結果、興味を持ったことや古典をもっと読んだり、調べたりしたいことを交流する。 【自己の夢の実現に向かう力】 「根拠を明らかにして主張する」	☐ 仲間と交流したり、振り返りを書いたりした中で、今後の古典学習に向けて、進んで古典に触れようとしている。 （主体的態度）

棚倉町立棚倉中学校
教諭 山澤秀樹

(毎月末に生活習慣の反省を記入してロイロノートで提出する)

令和7年度 自分手帳の活用計画

1 目的

教育活動の中で、「自分手帳」の効果的・継続的な活用を通して、自己マネジメント力を育み健康課題を解決する。

2 育成を目指す資質や能力

【自己理解・自己管理能力】自己の生活習慣を見つめ、健康課題に気づき、行動できるようにする。
 【情報分析力】調査等の結果と生活習慣の関係を探り、原因を把握できるようにする。
 【課題解決力】目標設定から行動、振り返りのサイクルにより課題を解決できるようにする。

3 自分手帳を活用した自己マネジメントサイクル

(1) 自分を見つける (2) 自分で計画する (3) 自分で試す (4) 自分で確かめる

体力向上	食習慣	肥満防止
------	-----	------

4 具体的な活用方法

保健体育	家庭科	特別活動・総合	その他
・新体力テストの記録 ・運動の記録 ・運動身体づくり ・体づくり運動 ・健康な生活と疾病の予防 ・心身の発達と心の健康	・食事の安全と食生活 ・中学生に必要な栄養素 ・適した食事 ・さまざまな食品と食生活 ・日常食の観察 ・地域の食文化 ・生活の課題と実践 ・献立づくり ・持続可能な食生活	・生活習慣の計画 (年度初め、各月終わり) ・放射線教育 ・体育的行事での活用	・身体測定 (4月、11月) ・食育 (献立発表調査 6月、11月) ・各地の記録 (大会の記録 (記録会) ・ワークシート (健康会など)

5 その他

- ・保護者との連携 (PTA 総会、学年保護者会、新入生保護者説明会、学年だより、学校保健委員会)
- ・教員の連携 (職員会議、打ち合わせ、学年会など)
- ・学校運営計画、年間指導計画への位置づけ (保健体育科、家庭科、特別活動など)

健康カレンダー

自分の目標が達成できたら○を、達成できなかったときには△をつけよう。印をつけたら、お家の人に確認してもらいましょう。

	<自分の目標のふりがえり>			<自由メモ>
	食事	運動	睡眠	
4月	○	○	△	生活の改善、次の月の目標などを記入しよう。病気やけがの記録を記入しても良いよ。
5月	○	○	○	目標達成を、しっかりと記録しよう。
6月	○	○	△	もう少し、目標達成に向けて努力しよう。
7月	○	○	○	今月は、目標達成を達成できたので、お家の人に報告しよう。
8月	○	○	△	今月は、目標達成を達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
9月	△	○	○	目標達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
10月	△	△	△	目標達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
11月	○	○	△	目標達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
12月	○	○	△	目標達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
1月	○	△	△	目標達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
2月	△	△	△	目標達成できなかった。原因を振り返り、次の月に目標を設定しよう。
3月				

③ オリジナル動画の作成

- ・保健体育科が中心となり、体力向上トレーニング（静的ストレッチ、体幹トレーニング）のオリジナル動画を作成し、授業や部活動、長期休業中の課題などで活用した。



（静的ストレッチ動画）



（体幹トレーニング動画）

④ 単元事前アンケートと事後アンケートの導入

- ・ 体育分野において、各単元の事前と事後にアンケートを導入した。事前アンケートは、主に「単元の見通しをもたせること」「学習活動の意欲を高めること」を目的としている。事後アンケートは、主に「学んだことの振り返り」や「自分や友達の変容を知ること」「次年度への意欲」を目的としている。



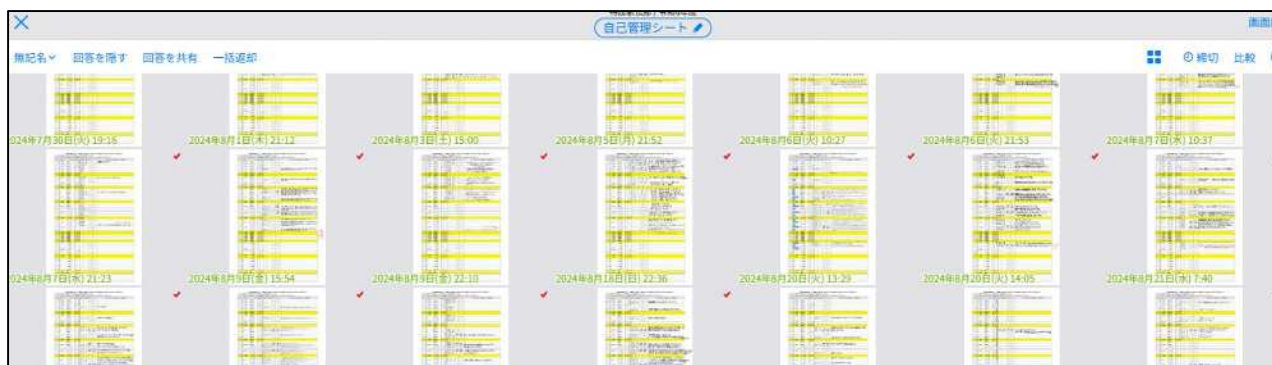
⑤ 特設部（陸上・水泳・駅伝）の活動の活性化

- ・ 朝練習の削減及び廃止

毎年、朝練習の参加が難しいという理由で、各特設部への入部を断念する生徒が多かった。また、教員の働き方改革や生徒の多忙化が進む中、担当の先生方や生徒の心身の健康が十分に満たされていることが、チーム全体の意識や意欲の向上につながると考えた。

そこで、朝練習を削減・廃止し、放課後練習を中心とした活動にした結果、特設駅伝部では、男女合計70名の生徒が所属した。放課後練習にするにあたっては、特設部の生徒の清掃活動免除など配慮されたが、特設部の生徒たちは昼休みに清掃活動などを主体的に実施するなど本校の教育理念である「自主貢献」を実践した。

- ・ 主体的取り組みを促す各自の練習計画（練習計画・体調管理・目標設定など）



（練習計画及び振り返りシートをロイロノートで提出し、特設陸上部担当でチェックし返却した）

養護教諭の専門性を活かした生徒との関わりについての実践事例

～自ら考え行動できる、自立した生徒をめざして～

会津若松市立第三中学校

養護教諭 渡部 かおり

1 はじめに

養護教諭として何を意識して職務に当たっているか考えた時、ベースとしていることが2つある。1つめは「つなぐ」ということ、2つめは「生徒の自立を目指す」ということ。本校でもこの2つをベースとして、科学的根拠をもとに健康に関する知識を習得し、中学校卒業までに自分の生活様式等に合わせて主体的に考え行動できる生徒をめざした指導や「つなぐ」関わりを積み重ねてきた。今回はその取組を紹介する。

2 実践の内容及び方法等

(1) 全校生への保健指導～将来の健康につなぐ

生活習慣の基本となる「食事」「睡眠」「運動」について、年度ごとに重点化して保健指導を行っている。

① 外部講師による保健指導

会津中央病院診療内科の医師による睡眠講話

人間の脳と体の主材料であるタンパク質はとても弱くて崩れやすい物質のため、毎日の睡眠でボロボロになった脳と体の改良・性能アップ（成長）をしていること、そのために長時間の睡眠が必要なことを科学的に解説した。

人間の体をスポーツカーに例えて修復について説明したり、動物が命がけでとるほど睡眠は重要であることを中学生に分かりやすく伝えたりした。



会津大学短期大学部の先生による体組成測定と運動・栄養講話

体の成長が大きい中学生時期に毎年体組成測定を行うことにより、数値の変化から自分のからだを知り、成長に必要な食事や運動方法等について学ばせた。筋力アップや食事に関する質問も多く、個別の保健指導につなげた。

特に今年の3年生は、小学6年生から4年間測定しているため、自分の成長を体組成の変化で確認でき、特に運動部の生徒はボディメイキングに役立てている。

② 集会等での養護教諭による保健指導

終業式で、毎回養護教諭からの保健指導を実施している。健康に関する学期の反省だけでなく、必ず生活習慣に関する保健指導を科学的データや資料をもとに実施している。

- ・電子機器（電磁波）の脳への影響について
- ・ブルーライトが睡眠に与える影響や、成長ホルモンと睡眠の関係について

- ・ 一日の生活リズムを円のように回すために、どのように生活習慣を組み立てていくかについて
- ・ 電子機器の利用時間と「テストの成績」「勉強時間」「睡眠時間」の関係について

・・・など

また、PTA 総会後の学年保護者会では生活習慣について保護者向けの講話を全学年に行い、家庭の協力をお願いした。



③ 掲示物や保健だより等、視覚からの指導

保健だよりでの月ごとの保健情報の提供とともに、見て触ることができる立体掲示を定期的に作成している。本校では体育館入り口前に保健安全関係の掲示場所が割り当てられているため全校生が必ず通るという利点があり、足を止めて見たり触れたりしている様子が見られる。



④ 個別の保健指導や健康相談

保健室も教育の場であるということを念頭に置いて「なぜ」「この後はどうすればいいのか」「予防法は」など、生徒が健康を自己管理できるよう具体的な指導を心がけている。

(2) S S R利用生徒や配慮が必要な生徒への関わり～担任や学年、保護者、外部機関とつなぐ

運営委員会や生徒指導委員会等での情報だけでなく、職員室に積極的に出向いて先生方と会話をすることで生徒の情報を多角的に収集し、養護教諭ならではの生徒対応に生かしている。

また、担任が一人で抱えてしまうことがないように、必ず主任を通して生徒の情報を共有することで、学年内での横の連携につながるよう努めている。

① S S R利用生徒へのサポート

S S Rに登校できるようになった生徒の中には、ほんの半歩のスモールステップでもやっとの思いで取り組んでいる生徒もいるため、「今日はどこまでならできる」「これをやってみたい」「今はまだ難しい」などを本人が決めて言語化できるようサポートし、担任や学年にその思いを伝えることで、支援の材料になるよう努めている。

S S Rの様子

<学習風景>



<給食の様子>



② S S R利用が難しい生徒へのサポート

まずは保健室登校から、保健室登校が難しい場合は玄関まで、プリントをもらいにだけなど、

担任や学年と協力し、その生徒と関わる機会を積極的に作っている。

③ 通常学級での困り感のある生徒へのサポート

学習への困り感で授業を離脱して保健室に来室する生徒への対応、コミュニケーションスキルで課題を抱えている生徒への対応、感情コントロールに課題を抱える生徒等の情報を共有し、個別の支援に向けた話し合いの場を積極的に設けるよう関係職員と協力体制を整えている。

④ 保護者や外部機関との連携

生徒の支援に関して、担任が保護者と面談する際に同席し、保護者の思いを一緒に聞き、今後の方向性について協議する機会を作っている。SSWとの連携、地域の支援機関や病院との連携にも積極的にかかわり、保護者の受診等に関する相談へのサポート体制を整えている。

(3) 地域連携での取組～小学校からの9年間を見通した健康教育における高校との連携

中学校区の小学校養護教諭との部会を2か月に1度程度開催し、健康課題に関する取組についての協議や地域学校保健委員会に向けての協議、情報交換をしている。

① 学区で目指す児童生徒像を具体的に設定し、9年間を見通した保健指導を実践する。

＜目指す児童生徒像＞	
○ 一日60分体を動かす子ども	運動
○ 赤・黄・緑・汁物をバランスよく摂れる子ども	食事
○ 中学生は7時間以上睡眠をとれる子ども	睡眠
○ メディアを上手にセレクトし、自律した生活を送れる子ども	メディア

② 小中学校共通で生活習慣アンケートを実施し、児童生徒の行動の変容について評価する。

③ 毎年共通の指導用教材を作成している。同じ教材を使用し、同じテーマで発達段階に応じた保健指導を行うことで、9年間繰り返し学ばせ、知識の定着と実践能力を備えた児童生徒を育成する。

3 実践の成果及び課題

健康に関する成果はすぐに現れるわけではないが、中学校卒業時に基本的な健康情報を身につけ、その正しい情報の中から自分の生活様式に合わせて、また自分の小さな目標に向けて何ができるか考えて行動できる生徒を目指して取り組んできている。健康教育に関しては小学校と同じ目標を持ち、同じ目線での指導を9年間積み重ねられることに大きな意味があると考え、なかなか行動変容に結びつかないという課題は常にあるため、これからは養護教諭の専門性を生かし、健康に関する情報を科学的根拠をもとに伝えて、「分かる」を定着させ「できる」を増やし、生徒の自立を目指した指導を継続して将来につないでいきたい。

また、SSRに携わって3年目となるが、今まで登校できなかった生徒の居場所が増えたことで出席率が昨年度より上がっている。SSRに登校する生徒の短期目標はそれぞれであり、その声を引き出して担任や学年とつなぐことで相互理解が深まり生徒のできることが増えている。生徒の声を言語化させることは、自分で次の行動を決定できる自立した生徒の育成にもつながると考える。担任一人にはせず、養護教諭として積極的に保護者とも関わっていくことは担任サポートや保護者サポートに有効となっている。生徒の自立を促すために、今後も医療機関や地域の支援機関、行政との連携を強化して中学校卒業後を見据えた支援を続けていきたい。

「幸せになる健康づくり～『百歳への挑戦』のその先へ～」の実現に向けた健康教育の実践

西会津町立西会津中学校

栄養教諭 山口 郁恵

1 はじめに

西会津町では、令和2年度より「幸せになる健康づくり～『百歳への挑戦』のその先へ～」をキャッチフレーズに、町民一人一人の幸せな暮らしの実現を目指した第2期西会津町健康増進計画が展開され、「からだ」の健康・「こころ」の健康・「つながり」の健康の3つの“健康”による『さすけねえ輪(わ)』の健康づくりに向けた取組を実践している。

本校では、「未来の可能性を創造していく生徒の育成 ー自主・自立・敬愛・健康ー」を教育目標に掲げ、「気づき、考え、実行できる生徒」を目指した教育活動を展開している。健康教育については、学校、家庭、地域・関係機関が密接な連携を取り、生徒が生涯を通して自らの心身の健康を育み、安全で活力ある生活を送ることができるように、健康課題解決に向けた研究協議や実践を行っている。

2 実践内容

(1) 「にしあいづっ子の健康あいことば」を活用した取組

生涯にわたる健康づくりの土台となる“あたりまえ”の構築をねらいとした情報発信を行う。

① リーフレット配付およびポスター掲示等による周知

地域・関係機関と連携し、継続的にリーフレットを配付し、周知を図っている。

配付	対象	配付担当
リーフレット完成時	こども園・小学校・中学校の各家庭	こども園・小学校・中学校
こども園入園時（随時）	こども園に入園希望の保護者	町子育て支援センター
小学校入学説明会（毎年）	小学校に入学希望の保護者	小学校
中学校入学説明会（毎年）	中学校に入学希望の保護者	中学校

② ケーブルテレビによる動画放送

西会津ケーブルネットと連携し、ニュース番組内のCMとして周知動画を放送している。

月曜日	㊦ っこり笑顔で 元気にあいさつ
火曜日	㊧ よく後は歯みがき きれいな歯
水曜日	㊨ そびと運動 体動かし 強い体
木曜日	㊩ ただきます すききらいしないで なんでも食べよう
金曜日	つ㊪ けよう 早寝早起き朝ごはん

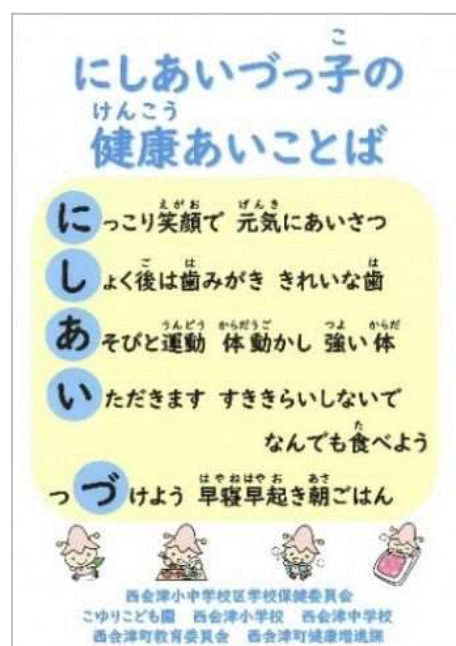
③ 食に関する指導での活用

本校では、全校生徒が多目的ホールで一斉に食べる「全校給食」を実施している。毎回、昼の放送で、広報委員会の生徒が献立と地場産物の紹介と併せて、健康あいことばの確認を行っている。

長期休業前には、養護教諭より健康あいことばの内容を確認し、望ましい生活習慣についての指導を行っている。各学年の学級活動や部活動での食に関する指導では、健康あいことばを確認することで、望ましい生活習慣の確立に向けた意識化を図っている。

(2) 自分手帳を活用した取組

自分の身体状況と生活習慣を見直すきっかけとなる健康教育と情報発信を行う。



① 身体状況・生活習慣・体力の記録

毎年4月の発育測定後に、自分の成長と生活習慣について記録を行っている。また、体育の授業時、体力テストの結果を配付するとともに、結果を自分手帳に記入させ、今後の体力についての目標を記入させている。

② 食に関する指導での活用

学級担任と栄養教諭による学級活動での食に関する授業の際は、自分手帳をテキストや参考資料として活用している。また、ワークシートとしても活用することで、健康マネジメント能力の育成につなげられるような事後指導となるよう工夫している。各学年の自分手帳活用については下記の通りである。

学年・内容	テキスト・参考資料	ワークシート
1 学年・朝食と健康	食生活 10・11	健康 18
2 学年・成長期の食事	食生活 18・20・21	
3 学年・受験期の食事	食生活 10・11・12	健康 22

毎回の給食時間では、栄養教諭より毎月の食育目標にそった食育クイズ等を出題している。食育クイズにも自分手帳を活用した内容を取り入れている。

また、希望する部活動を対象とした健康教室でも、下記のように自分手帳を活用した指導を行い、健康な体づくりと競技力向上を目指している。

テーマ	自分手帳
疲労回復とケガの予防	食生活 10
免疫力 UP のための栄養	食生活 18
貧血予防のための栄養	食生活 20・21
試合前後の食事	食生活 18
規則正しい生活リズム	食生活 10・11



部活動における健康教室の様子

③ 「こゆり健康チャンネル」への活用

家庭および地域への情報発信として、西会津ケーブルネットと連携し、朝食を見直そう週間運動の期間中と長期休業中において、夕方のニュース番組前に、自分手帳の内容を取り入れた健康動画「こゆり健康チャンネル」を放送している。



(3) 学校・家庭・地域が連携した食育

食を通して様々な人たちとつながり、食の大切さを理解する取組を行う。

① 教科等における食に関する指導

家庭科の食生活の内容については、家庭科担当教諭と栄養教諭が連携しながら授業を実施している。栄養バランスのよい献立作りについては、ふくしまランチョンマットと料理カードを活用し、栄養バランスと適量を意識しながら献立を作成する機会とした。

地域の食文化については、学校給食で提供している地域の郷土料理などを教材とすることで、生徒の理解へつなげている。

偏食が多い傾向である魚の調理実習では、地元企業さんにご協力いただき、鮭の三枚おろしのデモンストレーションを実施した。

給食で最も残食が多い地域の郷土料理“こづゆ”の調理実習では、町の栄養士と食生活改善推進委員の方々にご協力いただき、地元の食文化の継承を図った。



献立作成の授業の様子



魚の調理実習の様子



こづゆの調理実習の様子

② 総合的な学習の時間における取組

本校では、地域について学び、地域の未来を創造するアントレプレナーシップ学習を実践している。その中で、3学年の生徒が、特産物を生かした新メニュー作りに挑戦し、料理コンテストへ応募した。この取組について、生徒が実践発表会で発表するとともに、考案したメニューを学校給食で提供する「特別給食」を実施することにより、食に関するさらなる関心の向上につなげている。

③ 給食時間における食に関する指導

栄養教諭が行う食育クイズの他、行事食や毎月の食の旅献立では下記のように、先生方にご協力をいただき、テーマに合わせたクイズを出題する等、組織的に食に関する指導を実践している。

献立	クイズのテーマ	担当
入学お祝い献立	食の大切さ	教頭
こどもの日献立	端午の節句の行事食	教務主任
七夕献立	夏の星座	理科教諭
お月見献立	月にまつわる百人一首	国語科教諭
クリスマス献立	世界のクリスマスケーキ	校長
食の旅献立	各都道府県の食文化	社会科教諭



食育クイズの様子

④ 家庭と連携した取組

学級活動における食に関する授業の実施後は、食育だよりや生徒のワークシートを通して授業の内容を家庭へお知らせしている。ワークシートには、保護者からのコメント欄を設け、家庭での事後指導につなげるための工夫をしている。

	6/19	6/20	6/21	6/22	6/23
朝食	☐	☐	☐	☐	☐
運動	☐	☐	☐	☐	☐
睡眠	☐	☐	☐	☐	☐
メディア	☐	☐	☐	☐	☐

生活の反省
早起きが、できない時も、あったので、その辺も気づけた！と思った！

お家の人からの応援メッセージ
家で寝る時間もあつたがもう少し早めに寝ようとした！と声をかけています。

⑤ 地域と連携した取組

本校に併設している町民図書館と連携し、朝食を見直そう週間運動の期間中、朝食に関わる本を集めた「早寝・早起き・朝ごはん」特設コーナーを設置してもらい、朝食に関する情報提供の強化を図っている。

地元野菜の生産者とは、給食交流会や野菜の寄付、野菜づくり紹介動画等を通して連携し、生徒の地場産物に関する理解を図っている。

また、町内の飲食店と連携し、地元飲食店の自慢料理を給食で提供する「地元飲食店コラボ給食」を実施し、子どもたちの郷土愛の育成を図っている。



図書館との連携の様子



生産者より地元野菜の寄付の様子



地元飲食店コラボ給食

3 成果と今後の課題

(1) 望ましい食習慣への理解

朝食アンケートより、ほとんどの生徒が朝食を食べることは自分の健康のために大切であることを理解しているという結果となったが、数名の生徒については理解が不十分であることが課題である。

栄養バランスのよい食事の大切さについては、生徒全員が理解しているという結果となった。

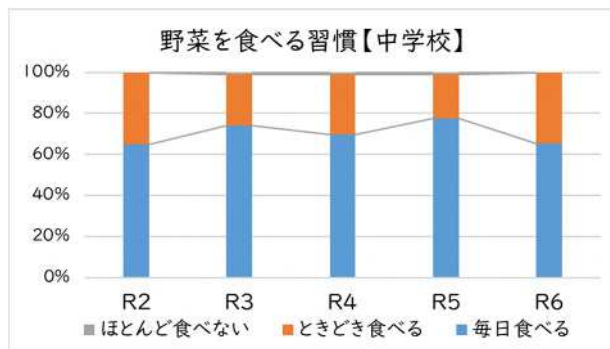
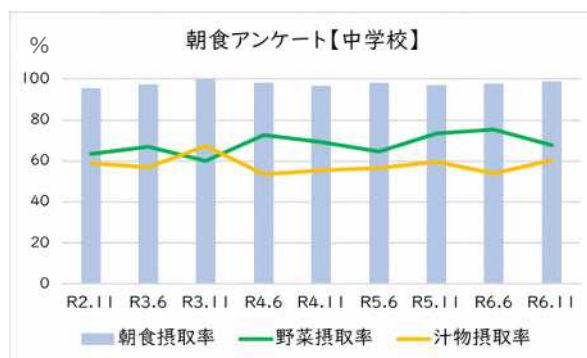


(2) 望ましい食習慣の実践

朝食アンケートより、朝食摂取率は100%に近い値を維持しているが、野菜摂取率や汁物摂取率が70%に満たない状況である。

また、独自で行った生活習慣アンケートより、野菜を毎日ほとんど食べない生徒が0であった。しかし、毎日野菜を食べる生徒についても減少した。

給食の残食については、全体では昨年度より減少傾向となったが、個別で見ると、適量を意識できていない生徒や偏食で食べない食品がある生徒がいて、望ましい食習慣の知識はあるが実践につなげられていない生徒がいることが課題である。



4 おわりに

子どもの頃の生活習慣は、この先の人生に大きく影響を与え、望ましい生活習慣が身に付かないまま成長していくと、改善していくことが難しくなる。「幸せになる健康づくり～『百歳への挑戦』のその先へ～」を実現するために、今後も学校、家庭、地域・関係機関とのつながりを大切にしながら、給食時間や各教科、特別活動など学校全体で健康教育を継続して実践するとともに、自分手帳の活用をさらに充実させることで、生徒の健康マネジメント能力を育成していきたいと考える。

理科コアティーチャー・理科イノベーション人材育成推進教員として理科好きを育成する実践

相馬市立中村第一中学校

教諭 渡部 兼介

1 はじめに

令和3・4年度に理科コアティーチャー、令和6年度に理科イノベーション人材育成推進教員をつとめさせていただき、授業研究会等を通して理科の授業の質的向上や、生徒の理科に対する興味・関心を高めることを目指して活動してきた。以下にこれまでの実践の紹介と実践から見てきた成果と課題について記す。

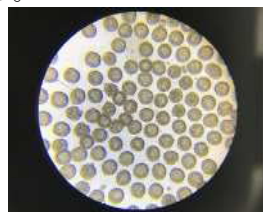
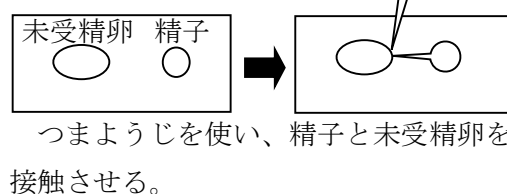
2 授業の実践と成果

(1) 無セキツイ動物「ウニ」の受精観察から生命尊重を考える（只見町立只見中学校での実践）

①目標 ウニの受精を観察し、スケッチしよう。

- ・ウニの未受精卵を観察する。
- ・ウニの精子を観察する。
- ・受精させる（1分程度で受精膜がつくられる）。
- ・受精の様子を動画撮影する。
- ・受精卵をスケッチする。

受精のさせ方



(ウニの発生過程)

受精後は、只見中学校のそばを流れる湧水に市販の海水調整薬を加え、飼育水とした。プルテウス幼生時のエサは提供していただいた餌セットの珪藻を増殖させ、定期的に給餌した。

②授業の考察

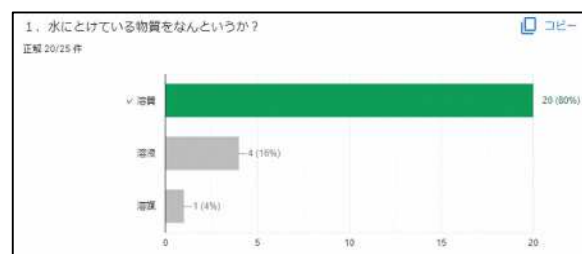
本実践では、お茶の水女子大学湾岸生物教育研究センターから提供していただいたウニの未受精卵と精子を使い、受精を行い、生命の誕生の瞬間を観察し、生命の連続性への認識を深めることをねらいとした。また、その後の発生の過程を継続飼育、観察することで、生命尊重の態度を育てることもねらいとした。

生徒は有性生殖による生命誕生の瞬間を観察することで、無脊椎動物であるウニもヒトと同様の生殖を行っていることを実感できた様子が見られた。また、飼育を続けていくうちに愛着を持ち、より大切に育てていく様子が見られた。しかし、数百匹の受精卵から、最終的に生体になった個体はわずか8匹であり、生存率が低かった現状もあり、生物飼育の難しさを感じた。これらの授業の終わりには、今までよりも生命を大切にしようと考えている記述が、多くの生徒のノートに見られた。

(2) Google Classroom を活用して実験後の考察を深める工夫（只見町立只見中学校での実践）

①小テストでの定着度チェック

授業の初めに Google Classroom の「テスト付きの課題」→「Blank Quiz」で作成した小テストを行い、前時に習った語句の定着度を図った。クラス全体の正答率をすぐに確認できるため、定着度に応じて復習した上で授業に入ることができた。



②実験の動画での振り返り（各自）

前時の実験の振り返りを各自撮影、もしくは班で撮影し共有した実験動画で行った。再結晶が始まった瞬間や、食塩は本当に再結晶していないかの確認など自分が注目したい部分で停止させたり、繰り返したりするなどが容易に行うことができ、自分の考察を深める際や他者に説明するときの材料となった。



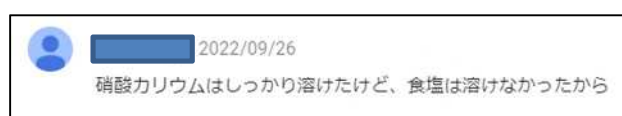
③考察→他者との共有→考察の流れ

Google Classroomの「質問」を考察の共有に活用した。この「質問」は自分の意見を送信しないと、他の生徒との意見共有ができないため、しっかりと自分の考えをもって意見交換をさせることができた。その上で再度考察をさせたことで、考えの深まりや新たな気付きを与えることができた。

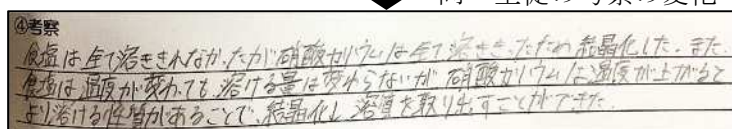


④授業の考察

本実践では、Google Classroomの活用を通して考察を深める工夫を行った。まず、前時までの学習内容の定着度合いの確認のためにGoogle Classroomで小テストを行った。また、前時に生徒たち自身が撮影した実験動画をもとに、課題を設定→結果の再確認→考察を行った。考察の際に、①自分の考えを自分の言葉で表現する、②他者の考えを聞く、③自分の考えを再構築し表現する、という段階をスムーズに行わせるためiPadを活用し実験結果について多面的にとらえ、より深い考察となるよう工夫した。実践の結果、多くの生徒で考察の深まりが見られた（右図）。iPadの活用により、意見の共有にかかる時間が短縮でき、考える時間を多く確保したことによる効果であると感じた。今回、共有後の考察はワークシートに記述させ記録として残す方法をとったが、学校ごとに違う導入ソフトなどによってより良い方法に変えていくことが大切であると感じた。



同一生徒の考察の変化



（3）身近な調味料(醤油・減塩塩)を使用した水溶液の実験（相馬市立中村第一中学校での実践）

①醤油から食塩を取り出す実験

「醤油から食塩を取り出す」を章の1時間目の課題とし、生徒たちに実験方法を考えさせてから実験を行った。生徒はすぐに加熱して水分を蒸発させることを思い付き、実行に移すが、実験を行うと黒く焦げ付き、食塩を確認することはできない。「食塩が焦げた」などの意見が出るが、既習事項である「有機物・無機物」の確認を行うと、生徒は黒く焦げた物質は有機物の成分で、無機物である食塩は焦げずに蒸発皿の中に存在しているはずであることに気づいた。そこから「焦げた有機物を取り除くにはどうすればいい?」「食塩だけを取り出すには?」などの生徒とのやりとりから、「水に溶かす→ろ過を行う→水分を蒸発させる」という手順を全体で共有し、再実験を行い取り出すことに成功した。

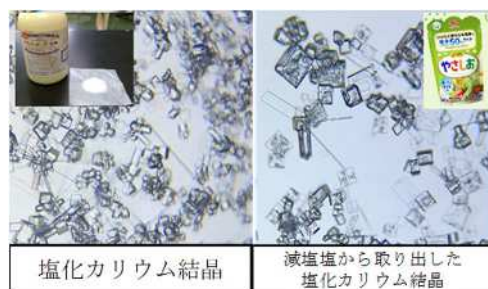


②減塩塩からの塩化カリウムの取り出し（再結晶）

章の最後に福島県は1人あたりの塩分摂取量が日本でトップクラスであることを伝え、塩分を控える方法について考えさせる中で、「減塩塩」を紹介した。塩化ナトリウムと塩化カリウムの混合物である「減塩塩」からの塩化カリウムの分離をチャレンジ課題として出題した。濾過や溶解度、再結晶など、この章で学んで

きた知識を基に班ごとに実験方法を考察し、実際に取り出す実験を行い、探究する場面を設定した。以下は、実際に塩化カリウムを取り出す実験を行った2時間扱いの授業の流れである。

- ・減塩塩の紹介。
- ・減塩塩から塩化カリウムを取り出す方法を考える。
- ・仮説に基づき実験計画を作成する。
- ・実験計画に基づき実験を行う。
- ・取り出せない場合は実験方法を見直し、再実験を行う。
- ・成功した班の実験方法を共有する。菓の製造など再結晶の日常的な活用例を紹介する。



③授業の考察

実践2では、実験を成功させるために溶解度曲線を深く読み取り言語化している様子が見られた。じっくり計画を立てる班や何度も実験を繰り返す班などそれぞれが目的達成のために試行錯誤した上で実験する様子が見られた。また、再結晶に成功してもそれが本当に塩化カリウムの結晶なのかを検証する必要があり、検証方法を考えることも科学的な思考を必要とする部分となった。こちらから正攻法を伝えないことや1度の実験では成功率が低い内容であったことが、実験と検証のくり返しにつながり、探究的な学習とすることができた。

3 実践の成果及び課題

教科書通りの内容ではなく、より日常生活に近い題材(実践(3))、または日常から遠い題材(実践(1))を扱うことで、生徒は学習から切り離して興味をもつことができるため、扱う内容に関心もち、楽しみながら主体的に学習していた。教科書では扱わない内容を扱う際には、実験を1時間扱いで完結させるのではなく、次時に実験結果について考察させ、改善策～実験の流れをつくることや、内容について教科書(指導要領)との関連づけを行うことで科学的な見方・考え方、科学的思考力の育成や確実な知識の定着をはかった。また、考察の場面でのICT機器活用は効率的な意見交換、情報収集につながり、自分の考えを再考察する際に一定の効果が感じられた。しかし、機器の準備、性能、ネット環境等の理由により、スムーズに使用できない場面もあり、じっくり自分の考えを深める際には紙とペンでの記述の方が効果的であるように感じた。

本年度実施した生徒アンケートでは「理科の授業・勉強は好きか」について「とても好き」「好き」の肯定的評価(黒太線囲み)が小学校時から向上した一方で、「理科の授業・勉強は得意か」では肯定的評価が低下していた。興味関心を向上させている一方で、扱う内容の難化、複雑化により苦手意識を抱く生徒が増えたことを表している。「楽しい」だけではなく、「わかる」「できる」授業を目指した授業改善が必要であると感じた。苦手意識がある生徒にも理科が「わかる」「できる」実感をもたせることが、「楽しい」「好き」につながるため、生徒が理科の授業において、「楽しみながら学ぶ」ことができるよう、今後も効果的な題材や指導方法について研究を続けていく。

図1

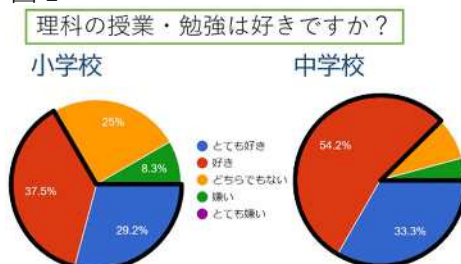


図2



学びに向かう力を高める理科における学習指導の工夫 ～非認知能力を育むための振り返りの共有～

福島市立吾妻中学校
教諭 難波 元生

1 はじめに

本校の生徒は、意欲的かつ、まじめに取り組んでいるが、自分の考えを発表すること、特に友達と異なる意見や異なる視点からの考えを表現することが苦手な生徒が多い。このことから、今年度は「学びに向かう力」を高めるために①自分の考えを整理し、学びを深めるための参照、共有の場の設定、②自己の学びの変容を捉え、次の学びにつなげるための振り返りの2つの視点が重要であると考え実践を行った。視点①では、生徒自身が自分の学びの現在地を把握し、その上でペアやグループ、学級全体で自分と異なる考えを参照・共有することで、自分の学びと比較し、新たな気づきを得ることができると考えた。視点②では、学習の終末に振り返りを取り入れることで、生徒自身が自己の学びを実感し、何が理解できて何が理解できないのか、何を改善していけばよいのかなどの振り返りを行っていくことが重要であると考えた。

2 実践の内容及び方法等

(1) 自分の考えを整理し、学びを深めるための参照、共有の場の設定

① One Page Portfolio (以下「OPP シート」) を利用したデジタルワークシートの活用

堀哲夫氏の「一枚ポートフォリオ評価論」を参考にして、作成した OPP シートをデジタルワークシートで作成した(図1)。自分の考えを書くことが苦手な生徒も授業支援アプリの他者参照機能を使うことで友達の考えを参考にしながら書けるようにした。最初は何を書いているのか分からず、空欄が多い生徒もいたが、継続することで自分の考えを書けるようになった。

また、自分の考えを書く場面で、友達の考えを参考にした場合は赤色、友達の考えを聞いた後に、さらに考えを深めた場合は青色で記入するようにし、生徒の思考過程を把握できるようにした。図2にあるように、友達の考えを参照することで、自分の考えを深めることができた生徒が見られた。



図1 OPPシート

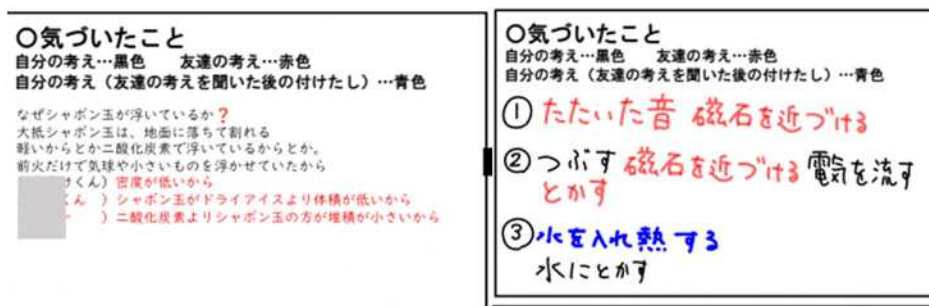


図2 友人を参考にして考えを深めた生徒の例

② ICT を利用した観察・実験の記録と ICT を利用したレポートの活用

理科の実験・観察では、結果や考察を記述することが苦手な生徒は多い。背景には、①文字がうまく書けない、②レイアウトが上手にできない、③記録や感想を後で付加修正することが苦手、④実験の結果を振り返るのが難しいなどがあげられる。そこで、容易に加工・修正できる ICT の利点を生かしてレポート作成を行った(図3)。また、ICT を用いて観察・実験の記録をとることで容易に実験・観察を振り返ることが



図3 ICTを活用した生徒のレポート

ができるようにした。4月当初は、考察が書けない生徒や結果があいまいで考察の根拠が書けていない生徒が多かったが、他の生徒の考えを参照することで、根拠を明確にした考察を書くことができるようになった。

さらに、以前までは、実験が失敗した際の原因を追

することは難しかったが、記録があることで原因の追究が容易になり、生徒は実験が失敗しても何が原因なのか考えたり、他の班の結果の共有から、異なる結果となった場合の原因を考えたりすることで学びが深まった。図4にあるように、「はじめは難しいと感じていたことが、協力することで、難しくないとわかった」と感想を書いた生徒もおり協働的な学びを行うことで個人の考えが整理され、学びが深まることがわかった。

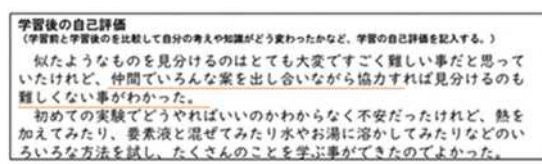


図4 生徒の感想

(2) 自己の学びの変容を捉え、次の学びにつなげるための振り返り

① 単元を貫く課題の設定と学習前後での自分の考えの比較

単元を貫く課題に対して学習前と学習後に自分の考えを記入し、単元の学習を通した自己の変容の振り返りを行った(図5)。単元を通した課題を設定したことで見通しをもって主体的に学習に取り組むことができるようになり、学習前と学習後の自分の考えを比較することで自分自身の変容に気づき、学習した内容をさらに深めたいと考える生徒が多くなった。図5にあるように、知識の量が増えているだけでなく、何が分かって、何が分からないのかを記入する生徒が多かった。また、学んだ知識をもとに更に発展させ今後自分が学びたいことを記入している生徒も多く見られた。

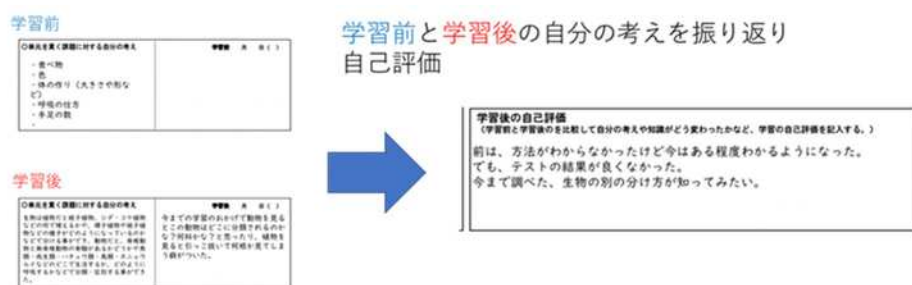


図5 学習前後での振り返りと自己評価

② OPP シートを活用した学習内容の振り返り

OPP シートを活用し、毎時間の振り返りを行った。OPP シートを用いて振り返りを行うことで、授業で分かったこと、分からなかったことを生徒が振り返るだけでなく、教師側も生徒の感想をもとに授業を振り返ることができる。図6にあるように、生徒は毎時間授業を振り返り、工夫してまとめたり、インターネットにある図を引用したりしながら振り返りを行った。生徒は授業後に振り返りを行うことで、授業で何が大切だったのか判断し、自分の言葉で表現するため、振り返りを継続することで、思考力・判断力・表現力の育成につながった。また、生徒はどのようにまとめたらよいのかを考えながら授業に取り組むようになった。

○学習の足跡 (この単元で学んだこと、学習中に気付いたことや疑問に思ったことを探究の過程に沿って記入します。)

左右対称
入射角 = 反射角 → 光の反射の法則

乱反射 光は様々な方向に反射すること

実像の作図
光源の焦点の外側にあり、物体が上下左右逆さまの像

○学習の足跡 (この単元で学んだこと、学習中に気付いたことや疑問に思ったことを探究の過程に沿って記入します。)

○気体の集め方
水上置換法: 水に溶けにくい気体を使う。
土方置換法: 水に溶けやすい気体 + 空気より密度が小さい
下方置換法: 水に溶けやすい気体 + 空気より密度が大きい

性質を調べる実験
石灰水: 二酸化炭素に反応して白くにごる。
水のついた綿棒を入れる: 酸素だと湿しく燃える
リトマス紙: 黄色→赤色 酸性 赤色→青色 アルカリ性
BTB溶液: 黄色 緑 青
水のついたマッシュを近づける: 水素だと音を出して燃えて、水ができる

マンモニアを発生させた感想
においを嗅いだら、鼻にツンときてとても臭かった。
また、思っていたより水によく溶けていて、驚いた。

写真のシャボン玉が浮いていた理由は?
・二酸化炭素(ドライアイス)が空気より密度が大きいから。
・ドライアイスから発生した二酸化炭素は空気より重いのので、下に溜まる。
そのため、シャボン玉は空気よりも浮力を受けるため、それより下には沈まない。

フェノールフタレイン溶液: アルカリ性に反応して、赤色になる
沸騰石: 突沸するのを防ぐため
(急に沸騰すること)

酸素を発生させる実験の時に、二酸化マンガンとオキシドールを振ると熱を発することに気づき、驚いた。また、なぜ熱を発するのかすごく気になった。

学習後の自己評価
(学習前と学習後のを比較して自分の考えや知識がどう変わったかなど、学習の自己評価を記入する。)

素晴らしい気づきです!! 気体にも密度があるのはなかなか新鮮だったみたいです

図6 生徒の毎時間の振り返り

3 実践の成果

○ 友達の考えを参照し、共有することは今回の実践で使用したように ICT を活用することが非常に相性が良かった。1年生での実践となったが、小学校の時から ICT に慣れていることもあり、操作や技術面で問題がある生徒は見られなかった。ICT の良さは修正が容易で記録を蓄積できることである。理科の授業において実験・観察の考察は重要視されているが、昨今の生徒は間違いや失敗を嫌う傾向が多く、不安だから自分の考えを記述しない生徒が多く見られたが、本実践では修正が容易な ICT を文具の一つとして活用することで、ノートにはなかなか記述できなかった生徒が、記述できるようになることが分かった。また、ICT の良さには時間や距離の制約を取り除けることもある。本実践では、ICT を活用することで自席から他者の考えを参照したり、自席にいながら他者と考えを共有したりできるようにした。参照によって理科が苦手な生徒は友達の考えから考えるヒントをもらい、共有することで得意な生徒がスモールティーチャーのように得意なことを発揮することができ互いに相乗効果があった。

- 本実践で活用した OPP シートをデジタル化したことで、生徒は実験の動画やインターネットからの図などを記録しやすく、単元や小単元の振り返りを 1 枚のシートで容易にできるようになった。定期テストが近づくと教科書やノートで振り返るのではなく、自分で作成した OPP シートで振り返る生徒が多く見られ、本実践で OPP シートをデジタル化したことは振り返りやすくするための工夫として効果的だった。

また、生徒の振り返りだけに注目するのではなく、指導者も振り返りを次の学びにつなげることが重要であると考えます。今回の実践は OPP シートを活用することで生徒の思考過程を把握することが容易となり、指導者が、生徒が授業で分かったことや分からなかったことを把握するのに効果があった。

4 今後の課題

- ICT を活用することで、カラーでまとめることができるようになったが、内容よりも見た目を重視する生徒も見られた。参照や共有する際に、どの視点で見るべきなのか視点を明確にすることが必要であったと感じた。
- ICT を活用した授業を実践することで、生徒の変容についてデータを収集することはできたが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、客観的な評価が難しいことが課題である。生徒の資質・能力とその成長について定量的に把握することが困難なため、今後は非認知能力とその成長を定量的に近い形で評価できる方法を研究していくことが必要である。

〈参考文献〉

「一枚ポートフォリオ評価論」堀哲夫 著 東洋館出版社

教務主任として・演劇部顧問として

福島県立福島南高等学校

教諭 西田 直人

I 福島南高等学校について

本校は昭和 62 年の創立以来、国際化の進展と情報化社会の高度化に対応できる広い視野に立ち、豊かな心を持つ人間の育成を目指して、文理科・国際文化科・情報会計科の 3 つの専門学科の特色を生かした教育活動を展開し、生徒の進路実現に努めている。令和 6 年で創立 38 年を迎え、各学年文理科 2 クラス、国際文化科 1 クラス、情報会計科 1 クラス、全校生約 480 名の全日制専門高校である。生徒の進路先は大学・短大が約 70%、専門学校約 15%、公務員を含む就職が約 15%と多岐にわたっている「キャリア指導推進校」である。生徒は進路実現のため 5 教科を中心とした平常及び長期休業中の課外、各種資格取得のために放課後の課外等に励んでいる。また、定時制(夕間部・夜間部)のふくしま新世高校と校舎・施設を共有している。

II 教務主任として

1 はじめに

私が教務主任を務めた 4 年間(令和 2 年度～5 年度)は、現行入試 2 年目、新学習指導要領に基づく新教育課程編成、新型コロナ・ウイルス対応、観点別評価導入といった、学校として大きな課題が続いた時期であった。現在、いずれも施行期に入っているため、諸課題への対応の内容には踏み込まず、対応の際心がけたことを記す。

2 こころがけたこと

(1)委員会、会議を通じて“自分ごと”にしてもらう

本校は、ステージⅢに該当する経験ある教員が大半を占め、通常業務においては細かい指示がなくても、それまでの経験を活かし各種業務をスムーズに進めている。反面、新しいものを導入する際は、経験がある故に反発等が見られることもある。教務提出書類は表や数字が多く並び分量も多いため、教育課程編成、観点別評価導入の際は、そうした傾向に対して、委員会・会議を通じて課題を“自分ごと”にしてもらう仕掛けを意識した。一方的に資料を提示し、読み込む時間も考える時間もない、“協議”でなく“連絡”で終わらせることを避け、提案者である私から「この点が疑問だ」「ここが納得できない」等と問題点や課題を投げかけ議論を誘発するようにした。そうしたポイントを作ることで、先生方は課題を“自分ごと”として考える様になり、発言も増え会議は活性化する。こうして、教育課程編成、観点別評価導入に対して課題意識を持ち、自ら参画している意識を涵養することで、教員の中に“自分ごと”の意識が生まれる。委員会や会議の時間や回数は多くなるが、それらを経た結果、導入自体はスムーズに進んだ。

(2) 他校比較によって同意形成を図る

教育課程編成においては、大学進学を主とする学校、学科では、5教科の単位の“取り合い”に陥るケースが多いのは当然である。一時的な発言や委員会での議論のみに基づいていては、勢いに押し切られたり、事実の誤認等も生まれる。そうした問題には、「新任教務主任研修」で知り合った他校教務主任と連絡を取り、互いの教育課程表を参照し合い、考えを広げた。もちろん、教育課程編成はその学校の目標に基づきその学校で編成するものだが、議論に対する視野や原案に対する理解を広げることに、大いに役立った。

3 おわりに

私と同じ時期に教務主任を務めていた方は皆、同じ業務に取り組んでおり、私だけが目新しい仕事をした訳ではない。僭越ながら、そうした方々の代表として、当時心掛けていたことの一部を書いてみた。

Ⅲ 演劇部顧問として

1 はじめに

「演劇」と聞いて抱くイメージに反して、演劇部に入る生徒のほとんどは、中学校の部活動があまりうまくいかず（うまくいった生徒は同じ部活動が続けるだろう）、高校で何か新しいものに挑戦しようと考えている生徒である。どちらかというとい内向的で合ったり社会性に欠ける生徒が多い。私の演劇部指導の目標は、そんな挫折を抱えた生徒たちに自己肯定感、社会性、表現力を伸ばしてもらうことである。

2 取組

部活動指導の際、留意していることは、以下の点である。

(1) 発言機会の確保

とにかく全員に、できるだけ多くの発言機会を作る。日々の練習の終わり、通し稽古終了直後、作品鑑賞をした直後等に、必ず全員に意見・感想を述べる機会を作る。ありきたりな感想、体裁を取り繕った感想、質問とズレた発言に対してはその旨を指導する。生徒たちは「もっと語彙力がほしい」と、自分の想いを言葉にすることに苦しみながら発言するが、半年も経つと、意見を表明する楽しさを感じ始め、こちらから「少し短めに」と指導するくらい長く話す様になる。「言葉による表現」の力が大きく伸長する。ある程度力がついて来たと判断したら、感想会をフリートーク制に変えていく。ここでは、自分の表現だけでなく、話し合いの流れを見ながら発言することを意識させる。こうした（言ってみれば）平凡な機会を繰り返すことで、表現力の伸長と自己肯定感の伸長に繋がる。

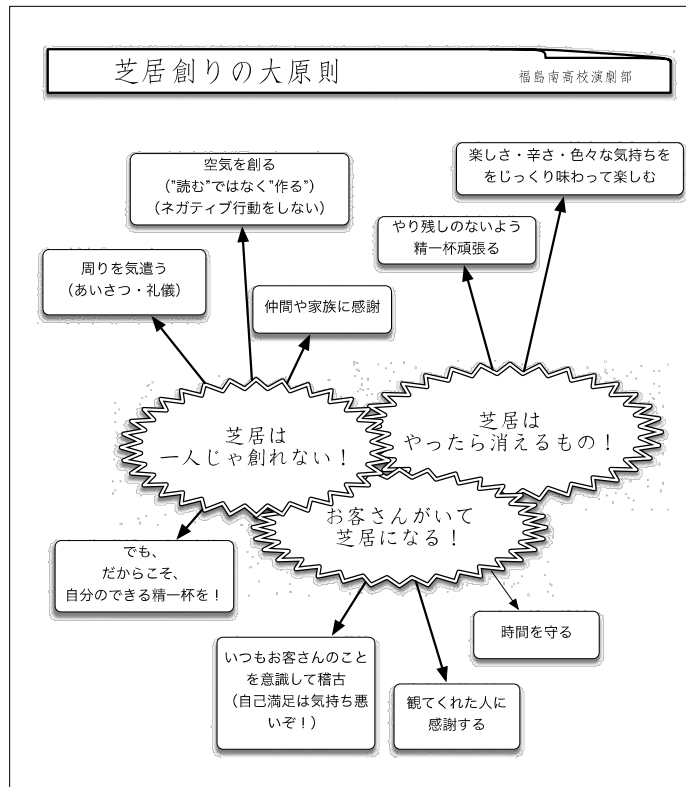
(2) 社会性の向上

右の図は、部活動編成時に配布する書類の一つである。演劇の特性を3つに分け、そこから派生する必要な姿勢、態度を書き出した図である。演劇を創る中で、様々な場面でこの図に立ち返り指導することで、生徒たちは部活動の中での自らの体験に学び、社会性を伸ばしていく。

(3) 自己肯定感の向上

様々な場面で「できたこと」と「改善してほしいこと」を指摘する。演劇創りは、どこまでやっても満足な終わりのない作業であるため、顧問の立場から「できたこと」をしっかりと指

摘し、生徒が、以前の自分よりも力を伸ばしていることを自覚できるように指導する。同時に「改善してほしいこと」も随時伝える。生徒と芝居創りの時間を共有する中で、(顧問という立場で)可能な限り本音で伝える。なお、これらの指摘が説得力を持つためには、生徒と芝居創りの多くの時間を共にする必要があると感じている。



3 “勝負” ではない

コンクールに出場し上位大会に進むことは、生徒の自己肯定感を育てるためにはとても有効な経験であるため、できる限り上位大会は目指している。しかし運動部と違って、演劇は本質的に「試合」ではない。私たちは他校の作品と“闘って”はいない。互いに上演し、それを鑑賞し合っているだけである。審査員による選考は、あるレベルに到達すれば審査員の見方に左右されるし、その大会でのラインナップや社会状況にも左右される。それゆえ演劇コンクールに「勝った」「勝ち取った」という表現はふさわしくないと考える。ある条件の中で「いただいた」「選ばれた」ものであることを忘れず参加するようにしている。

4 顧問創作について

高校演劇の作品区分は脚本の種類で行われ、顧問創作、生徒創作、既成に分けられる。プロの書いた既成脚本と顧問が書いた脚本、生徒が書いた脚本が同列に審査されるのが高校演劇の特徴である。高校演劇界隈では時折「顧問が脚本を書くのはおかしい」と言った声が

あがる。「高校生の大会なのだから、高校生が脚本を書くべきだ」というのだ。「高校生以外、書くべきでない」という極端な意見もある。高校演劇は当然、教育活動の範疇にある訳で、顧問が書くことによって、生徒の学びの目標を設定しやすい面がある。社会問題や歴史問題等を題材にした時はなおさらである。(もちろん、生徒がそうした題材を執筆する場合もある) 教育的な意図を持って活動するには、顧問の視点＝顧問創作は意義が大きい。

私は、

①「今、この時代」にやるべき作品

①「今、ここにいる部員たち」が映える作品

③自分が描きたい作品

(※数字は優先順位で①が2つ)

この3つを充たす物語の題材を日々探している。

5 さいごに

演劇的手法を用いた教育の効果が評価されている。演劇部の活動においても、顧問からはよく「演劇を通して生徒が変わる、生徒が成長する」と聞く。全く同感であるが、「変わる、成長する」を、もう少し具体的に区分し、1であげた自己肯定感、社会性、表現力の向上に留意して、今後も演劇部指導にあたっていきたい。

進路希望の実現を目指した国語科および学年の指導について

福島県立白河高等学校

教諭 小野寺 洋子

1 はじめに

急激な少子化、コロナ禍を経て進むICT化などの影響により、教育現場を取り巻く環境は激的な変革期を迎えている。地域随一の進学校として伝統を重ねてきた本校においても、単純に大学合格者数増加を目指すのではなく、どのような生徒を育て送り出すか、という目標を明確にし、その達成のための具体的な行動を求められる場面が多くなった。「知識を活用できる力を高め、生涯学び続けようとする強い意志とたくましい行動力を身に付けることにより、社会の発展に貢献できるリーダーを育成する」ことが本校のスクール・ミッションの一つである。それを柱とした上で、国語科教員・学年主任として、本校生の進路希望の実現を目指して取り組んできた実践を以下に記す。

2 実践の内容及び方法等

(1) 国語科の授業における取組 ―現代文分野について―

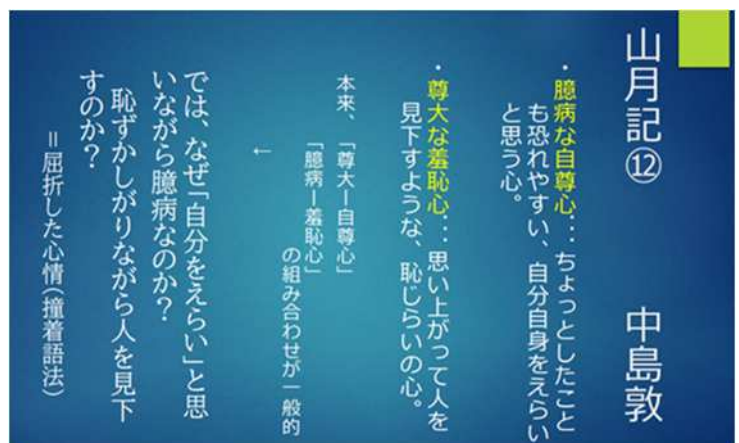
高等学校の現代文分野（科目名「現代の国語」「論理国語」「文学国語」）においては、日本語が母語としてある程度は身につけていることを前提とし、思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことが求められる。そこで、ただテキストと一緒に読んで要旨を確認するだけの授業ではなく、対話と表現を通じて思考と理解を深めていくことを目指し、授業を構成するよう心がけた。

① 構造に注目した読解

「対話と表現」以前に、テキストに書かれている情報を正確に、そして筆者の思考過程を本文に忠実に読み取ることが、大学入試においても日常生活においても重要である。評論はもちろん、文学的文章にも論理性は存在しているため、「文章の論理構造に着目する」ことを目指して授業を構成している。具体的には、「1 文章とは、筆者の意見（抽象）と具体例を軸とし、『同値（ある概念の言い換えや説明）』と『対比（逆の概念の提示）』で構成されていること」、「2 接続詞は文脈のガイドとして機能していること」に注目させ、実際に本文に線や記号を書き入れながら読む。構造に着目する読み方を導入した結果、「一度読み方を覚えてからあとはひたすら演習を積みました。そうすると設問者が自分たちに求める答えがなんとなくわかってきます。本当に、本当に国語ができなかった僕が、最終的にはそれなりの点数をとれるくらいに成長できました」（R6年度大学合格体験記より抜粋）のように、記述が課される大学の受験者に特に好評であった。

② 対話を深める発問

思考力・判断力を養うために重要なのは、発問の質であると考え。新教育課程で学んできた生徒たちは、話し合いやプレゼンテーションなどのアウトプットの経験を豊富に持つが、単に「話している」だけでは思考力は深まらない。じっくりと考えるに値する発問ができるかどうかで授業の充実度は大きく変わる。そこで、その時間の核となる質問を準備して授業に臨むようにした。そして、生徒の状況に応じて、クローズドクエスチョン



ンとオープンクエスチョンを織り交ぜながら、「わかりません」とできるだけ言わせないような質問の仕方を心がけた。また、試行錯誤の重要性を実感させるため、的外れな回答も拾い、答えのすぐ出ない問題については周囲との話し合いをさせてから再度尋ねるなど、失敗が気にならない環境を作った。授業内の様々な対話を経て自分の回答を練り上げる場面を設けるように意識している。

③ 「書く」という表現

総合型や推薦型選抜の面接試験では、自分の意見を直接述べるという意味での表現力が求められる。その一方で、筆記や小論文試験では「書く」というアウトプットが必須である。説明や本文の共有などでICTを活用する場面は増えたが、書くことで思考を深めるという効果も含め、「手で書く」という身体性を伴った「表現」の意義はまだ消えていない。限られた時間の中で膨大な情報を処理する大学入試に対応することを踏まえ、「早く、正確に書く」「思考を時間内で表現する」という演習を單元ごとに課している（内容の例：「文章の要約」「発問に対する自分の意見」「読書レポート」「作品の鑑賞文」「抽象的な文章の具体例を考える」等）。さら

に、書いたものをそのままにするのではなく、生徒間の相互添削や、模範解答例との照合を行い、客観性を持って自分の答案や原稿を見直す経験を積ませると、記述問題の自己採点の精度も上がり、設問への対応の指針を得させることができると考えられる。（左：具体例を考える問題に対する答案の一例）



（2）学年における取組

本校において2回（6年間）学級担任を持ち、後半の3年間（令和3年度入学生）は学年主任を務めた。そこで特に意識したのは目標の「言語化」と「具体化」である。理想としての最終目標を言語化し、そこに至る手立てをできる限り具体化することで、担任団全員で目標と行動を共有することを目指した。下記は3学年の年度当初の学年会で掲げた目標である。

◎最終目標：社会の様々な変化に対応し、力強く生き抜くことのできる人間を育てる。

○学年目標（3学年時）：

- 学校生活全般に渡って最後まで真摯に取り組ませる。
- 学習時間の質と量を確保し、白河高校の最高学年にふさわしい学力を身につけさせる。
- 進路目標と適性に応じた志望校の選択と合格を実現する。
- 自主的に目標達成のための具体的な指針を立て、計画的に努力する姿勢を育てる。
- 基本的生活習慣の定着と、心身の健康管理を徹底させる。
- 他者を尊重し、責任を持って協働する態度を養う。

この目標を達成するための具体的な手立てとして、

- ・1年間の行事・学習計画の共有と調整
- ・国公立大学・難関大学の目標合格者数の共有

- ・模擬試験データの分析と個別指導の充実
- ・総合型・公募推薦選抜を意識した指導体制づくり
- ・推薦選抜出願者のクラス間調整
- ・学年内外の生徒情報および進路情報の共有
- ・個々の生徒に対するメンタルケアの充実
- ・基本的生活習慣の維持

などの細かい項目を立て、実際に何をするか、ということを随時話し合いながら学年経営を行った。

進学校の役割を果たすためのシステム構築や指導技術の追求も重要だが、その根幹にある最終的な目標は「人間としての成長」である。丁寧な生徒指導が進路指導にもつながると考え、学年会では、生徒たちが安心して学校生活を送れる環境を作ること、失敗を恐れず挑戦できる状況を設けることを担任団が常に意識するよう呼びかけた。

(右：共通テスト直前に発行した、教員からの手書きメッセージ入り学年通信)

3 実践の成果

本校の令和5年度卒業生の国公立大学現役合格数は118（国立大学80・公立大学38）、私立大学合格数368であった。

6クラス編成として初めて国公立大学合格数が100を超え、目標としていた「卒業生数の4割超」をクリアし、ほぼ5割に到達した。また、県の定める国公立難関大学への合格数5、私立大学の上位校にも一定の合格者を出すなど、ある程度は目標に沿った成果をあげることができた。

私の国語科の指導および学年経営がこの結果に影響を与えているという客観的な評価はできないが、3年間を通じて、学年の担任教員と生徒たちとの間の信頼関係を感じる場面は多く、生徒たちがこちらの励ましに応じ、受験期のストレスによく耐え、3月末まで努力を重ねたことが成果に結びついたのではないかと考える。「丁寧な生徒指導が進路指導につながる」ことを実感した3年間であった。

4 課題及び今後の取組の方向性

不登校生徒や、自分の望む進路が実現できなかった生徒への対応などの課題は残る。今後も、短期的・長期的な目標を持って指導に臨みたい。

国語科の指導も進路指導も、「表現」（言語化）を重視している点で似ているところがある。「言葉の可能性」は、演劇部の顧問として20年を超える経験の中で考え続けてきたテーマでもある。そのテーマをさらに追究しつつ、今後の教科指導・進路指導に生かしていきたい。



部活動をモデルとした生徒の主体性を引き出す指導について
～全国高等学校陸上競技選手権大会男子八種競技優勝までの軌跡～

福島県立会津学鳳高等学校

教諭 宮田 貴志

- 1 はじめに 令和6年度の全国高等学校陸上競技選手権大会において、本校3年高橋駿士が6125点の大会新記録で男子八種競技の頂点に立った。八種競技とは初日に100m、走幅跳、砲丸投、400m、2日目に110mハードル、やり投、走高跳、1500mを行い、その記録に対して加点される得点の総合得点を競い合う競技である。走跳投のバランス、パワーや持久力等においての要素が凝縮され、まさに高校生競技者の神髄と言っても過言ではない。ここでは、実践してきた内容とハイパフォーマンスを引き出すために必要と考えるいくつかの要素について、6つの指導理念を基に紹介したい。

2 実践の内容 **6つの指導理念**

① 心を育てる

生徒との普段の会話や全体ミーティングの中で、下記の言葉を意図的に発して問いを投げかけ、生徒自らが陸上競技をやる意義を深く考えさせるとともに、生徒との方向性を共有するようにしている。

「君にとっての陸上競技とは？」 「どこを目標にする？」 「何を目指す？」
「陸上競技で学んだことを何に生かす？」 「学校生活に生かすためには？」

そのために必要なことや必要な考え方を共有する。

方向性を共有する ➡ 日常生活を競技と結びつけて考えることができるようにする
人間力 < 競技力 × 人間力 = 競技力 ○

競技力のもとより、人間力に優れた競技者を育成する。

思考力、判断力、コミュニケーション力、モチベーションの向上等、新しい学力観に基づく育てたい資質、能力に関わる力であり、長い目で見た場合、自立にもつながる。

「自主性」と「主体性」の違い

私自身の解釈として、「自主性」と「主体性」の違いを理解した上で、使い分け、指導していくことが必要と考える。まずは、自主性を育てるために、やるべきこと、必要なことを整理し目標を明確にした上で、自らやろうとする心を育て、言われる前に実行する力を身につけさせたい。そして、段階を追ってヒントを与え、自ら考え、工夫し、実行に移せるようにする（自主性）。最終的には「自ら目的を明確にし、目的を果たすためには何をすべきかを自分で考え、最後まで責任をもって行動することができるよう促していけば、主体性も高めていけると考える（主体性）。

② 競技者の個人差を理解する

年齢、性別、性格、発達段階、身体的特徴 等

選手にやらせすぎない、押しつけない、管理しすぎない

選手が100人いれば、100の頭脳と身体がある。生徒（選手）の特徴をつかむこと。自分の理想に強くあてはめようとしない。

③ 陸上競技におけるトレーニングスタイルの構築

正確な動作の体得 ➡ 競技力向上に必要な動作が身につくように繰り返し行う。

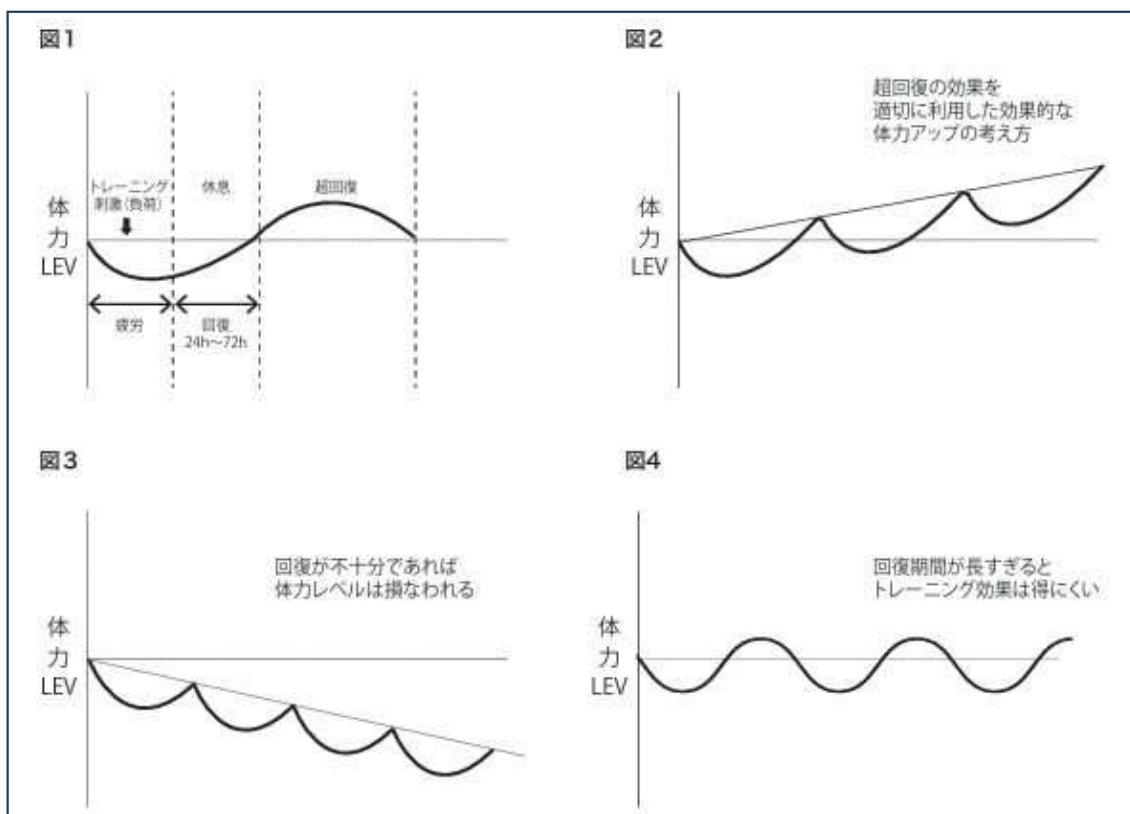
トレーニング機材（教材）の工夫（ミニハードル、チューブ、ミニコーン等）

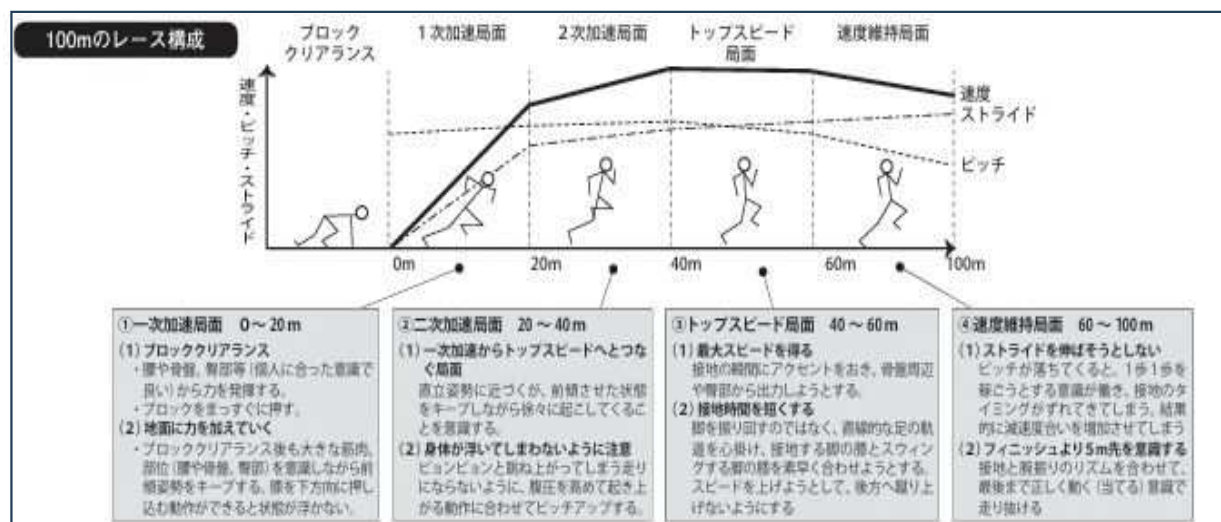
メディシンボール、投擲用具、ウエイトトレーニング等のパワー系トレーニングとの一体化

科学的、生理学的に練習を組み立てる ➡ トレーニング区分けに応じて、どのタイミングで何をねらいとして本数、距離等を取り入れていくのか。

動画の活用 ➡ 日々の練習や試合の動画を活用し、動作の確認や習得を振り返る。技術の向上につなげる。（ICT教材の活用）

科学的な考察Ⅰ 陸上競技における超回復の考え方【参考資料 2023 月刊陸上競技 宮田】





④ コンディショニング

いくらトレーニングが順調であっても、本番で心と体のバランスが崩れてしまっ
ては、成果を発揮することはできない。

トレーニングの効果は、負荷に負けないよう身体が強くなる反応（適応）によっ
て生まれる。このバランスが崩れると故障や不調の原因の一つとなる。生徒（選手）
の観察、会話の中から状態をつかめるようにする。オーバートレーニングや生活の
悩み等で精神的疲労につながらぬように適切な休養が必要である。

⑤ ベストパフォーマンスに向けて

〈身体的側面〉

陸上競技では、鍛錬期、準備期、調整期の的確な組み立てが試合でのベストパフ
ォーマンスを生み出す。



トレーニングの組み立て、内容、コンディショニング等を選手の状態を見極めな
がら進めていく。

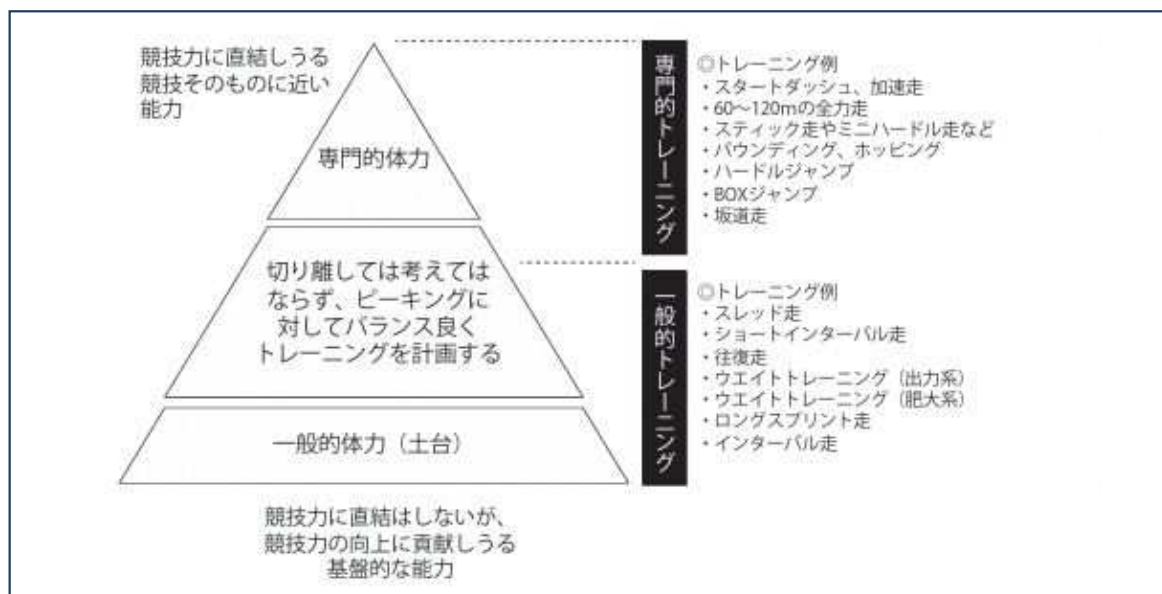
〈精神的側面〉

ベストパフォーマンスを生み出すための精神状態は重要。

選手は一生懸命に競技をする。しかし... 過緊張、不安、集中できない等、低年齢
になればなるほど状態は様々である。表情や様子を観察し必要な言葉がけや前向き
になれる言葉がけを行う。心に火をつける。

⑥ 情報の整理と学び

自分自身が教員（指導者）として成長していくために、新しい情報や知識を精査
しながら学ぶことをやめない。今までの経験と合わせて生徒（選手）のために自分
自身を磨いていく。



3 今後の取組み 陸上競技に限ったことではないが、「これをすれば必ず結果が出る」という練習は存在しない。その練習に対して、どんな気持ちで取り組むかが大切であり、生徒の理解力を高めながら、「何を、いつ、どれくらい」というトレーニング内容を共有していくが必要になると考える。競技（部活動）を続けていく中で、「できた」「伸びた」「楽しかった」と人が成長していく姿は本当に素晴らしい。時にはうまくいかないこともあるが、あきらめずに粘り強く、努力できた者だけが見ることのできる景色がある。できるだけ多くの生徒にこの景色を見てもらえるように私自身も努力を続けていく所存である。

昨今、中学校での部活動の地域移行や教員の働き方改革が重視され、より一層生徒の主体性が不可欠であると感じている。しかし、生徒の学びの場は削減してはならないとも捉え、決められた時間やルールの中で一定の成果を出せるような工夫が必要になる。それらを踏まえ、生徒に達成感を与えられるような指導を考えていきたい。



総合学科における資質・能力を育成するための計画的な取組について ～総合学科推進部と教科（美術）の視点から～

いわき総合高等学校
教諭 伊藤 沙緒里

はじめに

総合学科では、普通教科並びに多くの専門教科が開設され、それぞれに設定した幅広い選択科目の中から、生徒自らが受講科目を選択し、個性を生かした主体的な学びができる。本校では、約 100 の選択科目を相互に関連する科目群として構成した「系列」が 6 つ設定されており、生徒はそこから系列及び科目を選択し、自分だけの時間割を作成している。生徒が自分自身の在り方や生き方を考え、課題を発見し、解決していく「社会の変化に対応できる生き抜く力」の育成を重視している。そのため、3 年間を通じた計画的な取組により、生徒の資質・能力の伸長が図られるのではないかと考えた。

今回、総合学科推進部の担当として、また、美術科担当としての実践的な取組を紹介する。

1.1 総合学科推進部としての本校における 3 年間の取組について

1 年次においては学校設定科目「産業社会と人間」（産社）を履修する。2 年次は「総合的な探究の時間」（総探）、3 年次では「課題研究」（課研）と称して実施している。本校では、総合学科教育を推進するために総合学科推進部を設置し、「産社」「総探」「課研」の 3 年間を通じた取組を各年次と協力して展開している（図 1）。

3 年間の「探究的な学び」を展開しながら、生徒の発表の機会を多く設け表現力を育成したり、コミュニケーション・ワークショップにより人間関係を築く力を醸成したりするなどの「コミュニケーション力の育成」をキャリア教育の一環として位置付けている。

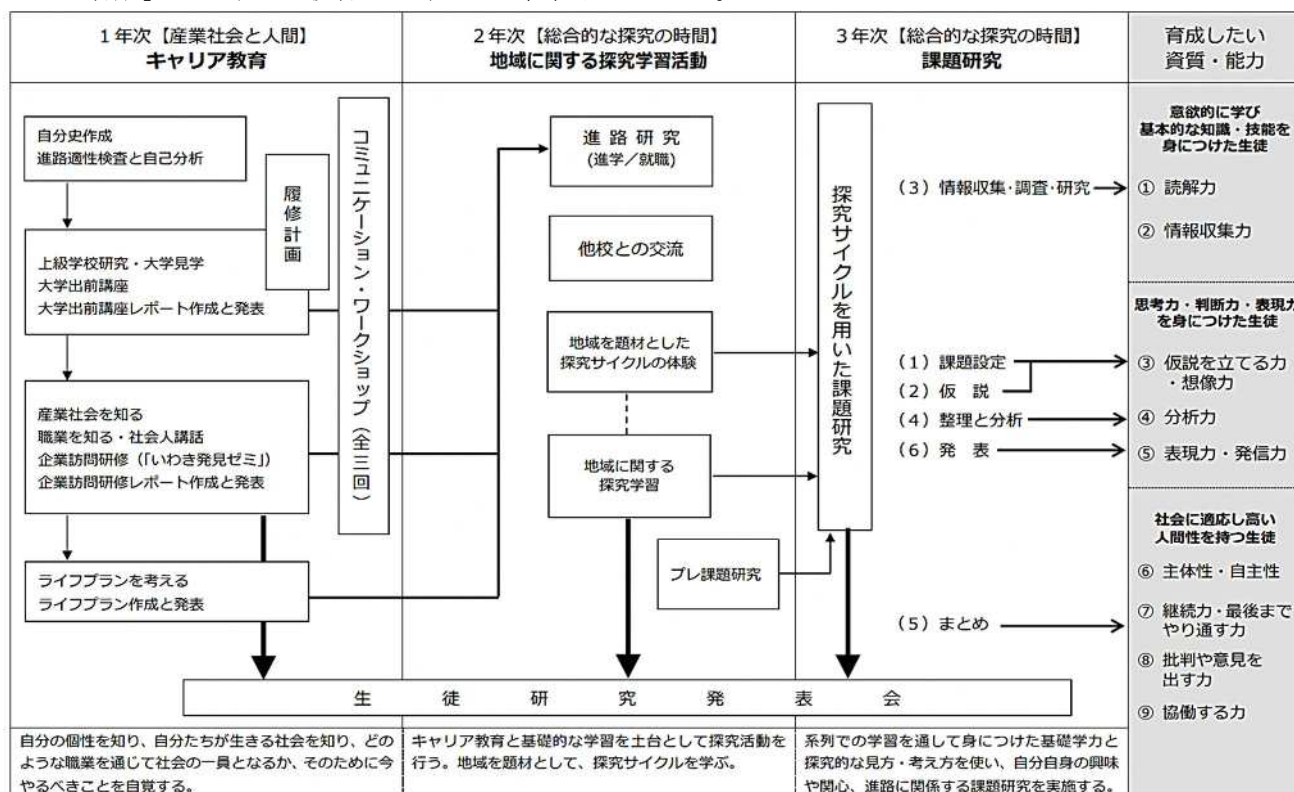


図 1 令和 5 年度「産社」「総探」「課研」の活動計画表

1.2 成果と今後の課題

(1) 実践の成果

① ルーブリック自己評価の分析から

本校では生徒へ育成したい 9 つの資質・能力をもとに「ルーブリック自己評価表」作成し、年間

3回、評価段階3段階のもと自己評価を行っている。

1年次は②情報収集力、④分析力、⑤表現力・発信力、⑥主体性・自主性、⑦継続力・最後までやり通す力の伸長の数値が大きい。新たな学習内容に積極的に取り組み、発表までできた達成感が自己評価につながっている生徒が多い。一方、①読解力の低さは評価する内容に漢字検定の基準があることが影響しているのではないかと。

3年次は①読解力、④分析力の伸長の数値が大きい。「課題設定→仮説→情報収集→まとめ発表」のプロセスを繰り返し行い、実施したことが自己評価につながっている生徒が多い。また、3年次になると①読解力が他の項目と同様の水準として評価されるようになり、各教科・科目の取り組みが成果として評価につながったのではないかと。

	1回（4月）		3回（3月）		1回目との差	
	1年	3年	1年	3年	1年	3年
育成したい9つの資質・能力						
① 読解力	1.5	1.9	2.0	2.4	0.4	0.5
② 情報収集力	1.9	2.1	2.5	2.6	0.6	0.4
③ 仮説を立てる力・想像力	1.8	2.0	2.3	2.4	0.5	0.4
④ 分析力	1.5	1.9	2.2	2.4	0.7	0.5
⑤ 表現力・発信力	1.6	2.0	2.3	2.3	0.6	0.4
⑥ 主体性・自主性	1.7	2.1	2.3	2.4	0.6	0.3
⑦ 継続力・最後までやり通す力	1.6	2.1	2.2	2.4	0.6	0.4
⑧ 批判や意見を出す力	1.9	2.1	2.3	2.4	0.4	0.2
⑨ 協働する力	1.9	2.3	2.4	2.5	0.5	0.2

② 進路状況から

国公立大学では、会津大学(コンピュータ理工学部)、秋田公立美術大学、私立大学では、医療創生大学(看護学科、作業・理学療法学科、薬学科)、茨城キリスト教大学などに合格している。系列の学習を生かして合格を勝ち取っている例が多い。

専門学校の割合がやや多いのは、高校での系列の学習を通して、より専門的な知識・技術を身につけたいと考え、進路選択していると分析している。

種別	進学内訳	人数	割合	人数	割合
進学	大学	50	28%	142	81%
	短期大学	13	7%		
	看護学校等	12	7%		
	その他専門学校	67	38%		
進学計					
就職				29	17%
その他				5	3%

図3 令和5年度進路状況

③ 学校評価から(一部抜粋)

「本校では、表現力・プレゼンテーション能力・課題解決能力等コミュニケーション力が身に付く指導がなされている。」について、「Aあてはまる」「Bどちらかといえばあてはまる」の合計が全体では94%に及び、本校の取組が資質・能力の育成につながっているとの認識が高いことがわかる。

「本校では、キャリア教育(「産社」や「総探」を含む)を通して、生徒自身の自己理解や職業理解を深めている。」について、「Aあてはまる」「Bどちらかといえばあてはまる」の合計が全体では96%に及び、本校の取組が生徒のキャリア形成につながっているとの認識が高いことがわかる。

評価項目	回答者	A	B	C	D
5. 本校では、表現力・プレゼンテーション能力・課題解決能力等、コミュニケーション力が身に付く指導がなされている。	生徒	59%	35%	6%	1%
	保護者	38%	58%	4%	0%
	教員	39%	54%	7%	0%
	全体	48%	46%	5%	1%
7. 本校では、キャリア教育(「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」を含む)を通して、生徒自身の自己理解や職業理解を深めている。	生徒	56%	39%	4%	1%
	保護者	33%	63%	4%	0%
	教員	39%	58%	3%	0%
	全体	45%	51%	4%	0%

A あてはまる B どちらかといえばあてはまる C どちらかといえばあてはまらない D あてはまらない

図4 令和5年度学校評価アンケート結果(一部抜粋)

(令和5年度12月に行った学校評価アンケートの回答について、生徒は在籍数571、回答数531で回答率93.0%、保護者は回答数488で回答率85.5%、教員は回答数59で回答率100.0%であった。)

(2) 今後の課題

令和7年度より本校は好間高等学校と統合し、新生「いわき総合高等学校」になる。この大きな変革期において、学校全体としては教育課程を見直し、6系列と10コースを設けて生徒の進路希望と学びの関係強化し、系列・コースの学びの深化を図る。

また、2年次の「総探」を1単位増の2単位にし、より地域と連携した探究の深まりを図るとともに、「産社」「総探」「課研」を時間割で同時展開できるよう設定し、年次間の連携と教職員全体で運営していく体制の強化を図る。

加えて、「ルーブリック自己評価」の指標の再検討を進めてきた。教員が定めていた指標について、新たに生徒の意見を取り入れ学びへの主体性の育成を図りたいと考えている。

2.1 「芸術・表現系列」(美術科)の取り組みについて

本校では美術科計7つの専門科目を、2,3年次生を対象に開設している。受講生徒数は各年次15〜20名前後であり、近年増加傾向にある。通称「系列生」と呼ばれる美術系進学を志望する生徒は、2年次「構成」「素描」、3年次「構成演習」「絵画」を主に履修しており、系統的に学びを深められる学習計画を立てて取り組んでいる。ここでは、「構成」と「構成演習」の題材を一部紹介する。

2.2 実践内容と方法

2年次「構成」においては、生徒が色彩や形体、構成美の要素、文字と組みなどを中心に授業を展開している。教科書や資料を用いながらワークシートを用いて進めていく講義形式の学習活動と、講義内容をもとに作品制作を進める演習課題、また完成作品を批評する表現・鑑賞活動に取り組んでいる。

授業を行う上で心掛けていることは、「学びが実生活とどのように結びついているのか」を意識させるため、作家作品や日常的に販売されている商品を取り上げながら授業を行うことである。

教員が設定した題材(制作テーマ)に対して、生徒が作品を完成させるまでの過程にどれだけのアイデアを考案できるのか、多角的に題材についてアプローチしようとしているのかという点においても重要視して取り組ませるようにしている。

3年次「構成演習」においては、作品制作にあたり、ワークシートを用いて構想を複数のプロセスのもとにまとめていく流れを取っている(図7)。題材の総授業時数は導入時に示し、そこで留意事項についても説明する。構想段階の序盤は、言葉・語句でイメージを書き出させて、以後、簡単な幾何形体を用いてアイデアを膨らませていく。留意していることは「出したアイデアは決して消さない」ことである。その後、アイデアを絞り込む作業に移り、数点のアイデアを配色や構図の観点から磨き上げていく。近年、タブレットの普及により、美術科の授業でもICTを活用する機会が増えてきている。作家作品の検索や、生徒相互の作品講評・評価を行うために役立てており、便利な面も多い。描画系のソフトやアプリケーションを活用することで、制作前に完成イメージを想像することも容易となった。一方で、作品を制作するための資料収集が授業の目的になってしまう生徒も少なくないため、ICTの活用については使用時期と使用方法について、今後も模索していきたい。



図5 2年次構成ワークシート(抜粋)
「パッケージデザインの配色」より



図6 2年次構成【色彩基礎課題】
上段：トーン(色調)の変化について
下段：対義語のイメージ構成

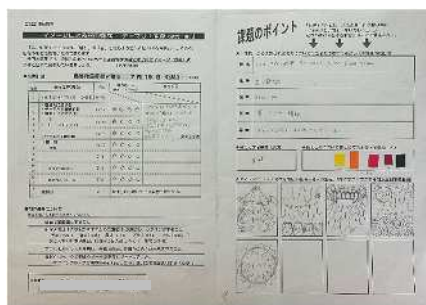


図7 3年次構成演習 作品構想のためのワークシート

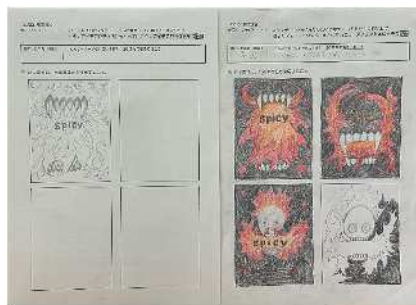


写真 作品講評の様子

2.3 外部との連携活動について

芸術・表現系列(美術科)の授業内容や美術部の作品制作・共同制作などの各種活動が、実社会とどのように結びついているのか等、生徒により実践的な経験を積ませたいと考え、様々な活動に挑戦した

(以下、活動を一部紹介)。

・2019(R 元)年 7 月

「徳ひめちやまカルタ」の原画制作

主催 内郷商工会婦人部

参加 1, 2 年次生徒

概要

いわき市内郷地区の名所や歴史をかるたとして
小学校や幼稚園に寄贈するプロジェクトに参加した。



写真 制作説明時の様子
R1. 10. 5 福島民友



・2020 (R2) 年 7 月

「いわき市議選ポスター」の制作

主催 いわき市役所選挙管理委員会事務局

参加 芸術・表現系列 3 年次生徒 12 名

概要

若者の投票率向上に向けたプロジェクトとして、
成人年齢となる高校 3 年生が制作。モチーフと
して「鳥獣人物戯画」を起用した。



写真 印刷担当と打合せの様子
R2. 8. 26 福島民報



・2021 (R3) 年 10 月

「いわき地方事務局公式 SNS アカウントで起用するキャラクター」作成

主催 福島県選挙管理委員会いわき地方事務局

参加 芸術・表現系列 3 年次生徒 14 名、美術部 1 年次生徒有志

概要

選挙を SNS 上で PR するオリジナルキャラクターデザインを考案した。



写真 関係者集合写真

・2023 (R5) 年 3 月

「フード&クロージングバンク PR イベント

『足りない×余ってる』を分かち合いで解決！」

主催 特定非営利活動法人ザ・ピープル

参加 美術部 1, 2 年次生徒 14 名

概要

イベントの運営スタッフとして、また、パーテーション
(看板) 作成を担った。



写真 参加生徒集合写真、活動の様子 上 主催者刊行物

2.4 成果と今後の課題

(1) 成果

授業や部活動において構想を複数段階に分けて取り組ませることにより、3 年間で確実に作品の完成度が向上した。また、生徒自身が制作意図や作品解説の発表が円滑に行えるようになった。外部との活動では主体性や積極性が身につくとともに、協働的な活動を通じてコミュニケーション力が向上した。

(2) 今後の課題

効果的な ICT 活用による校務の効率化を図るとともに、生徒の成果物（作品）については校内外問わず定期的に展示を行い、情報を発信することを継続していきたい。また、外部との連携活動については、受動的・単発的なものが多かったため、継続的・発展的なつながりになるように連携を強めたい。

1 はじめに

本校は病弱者の特別支援学校であり、身体の病気又は心の病気のため継続的又は繰り返し医療や生活規制を必要とする児童生徒が在籍している。病気の状態や心理的な側面から登校することが難しく、本校入学前の学校で学習空白が生じているケースが多い。自身の病気の症状により思うような生活ができず落ち込んだり、心の病気のため集団生活に対して大きなストレスを感じたりすることに加えて、特に中学部の生徒は思春期を迎え気持ちが不安定になりやすい。そのため学習意欲はあっても登校ができず、登校できない日が多くなると学習の遅れに対する不安が生じ余計に登校がしにくくなる、といった悪循環に陥っている。

また、本校には感染症に罹患すると、その後長期に渡り療養が必要になる生徒がいる。そのため、新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染症が流行する時期には予防のために登校を見合せることがある。そこで中学部教務主任として、病気を抱えながらも生徒が学習を継続できる体制を学部として整えることを目指した。またその上で、生徒個々が抱える思いを表現できるよう、授業実践を行ってきた。

2 実践内容

(1) オンライン授業・オンデマンド授業のための体制整備

病気療養児に対する ICT 等を活用した学習活動について、本校として必要な支援であると考えた。義務教育段階での効果的な取り入れ方について、令和4年度に小学部の教務主任とともに案を作成し、それをもとに小学部、中学部の会議にてそれぞれ意見を募った。遠隔授業を実施するにあたり、以下の意見が挙げられた。

<メリットや期待できること>

- ・教科等の学習を進めることができる。
- ・先生や友達とつながっているという安心感が得られる。
- ・オンライン授業等で学校の様子を把握できるので、久しぶりの登校であっても学校生活に見通しがもてる。

<デメリットや心配なこと>

- ・心理面で登校が難しい生徒については「オンラインをしているから学校へ行かなくていい」という気持ちが強くなり、ますます学校から足が遠のくことが懸念される。
- ・誰が、どのような判断をしてオンライン授業等を決定するのか。
- ・実施期間はどうか。
- ・オンライン授業等を実施する生徒としない生徒の線引きはどうか。不公平感を訴える児童生徒や保護者への対応が必要になるのではないか。

↓
デメリットや心配される点については検討を重ね、以下のように定めた。

- ① オンライン授業、オンデマンド授業を実施するかどうかについては、児童生徒の学習意欲の高まりや心理的安定が期待できる場合に実施する。欠席の背景や病状等について十分に把握し、より慎重に学部会で話し合いをもつこととする。
- ② 実施期間は、登校の見直しを確認しつつ、本人、保護者、関係機関等と連携して決定する。開始後も期間の見直しを適宜行う。
- ③ 定期的に家庭訪問を行う。

(2) オンライン授業・オンデマンド授業の実際

機器の操作の課題や、取組に対する教員側の気持ちをまとめ、方向性を定めて体制を整えるために、段

階を踏む必要があるため、3つのステップを踏んだ。

Step 1 校内でオンライン授業

集会活動は感染リスクが高いため、必要な生徒のために、まずは校内の教室間にてオンライン授業を実施することからスタートした。児童生徒会役員選挙へオンラインにて参加することで欠席せずに済み、活動することができたという満足感を生徒自身が得ることができた。



【配信】



【受信】

学部の教員間で協力体制をとり、事前に役割分担をし、連携を図りながら実施した。また他の生徒には、各担任から「体調の面で心配があるので教室で参加しています。」という説明をすると、すぐに状況を理解し納得した。生徒はそれぞれ持病があり、自身の経験上、病気に対する対応には様々な配慮が必要であると理解しており、友達のオンライン授業の実施についてもすぐに受け入れることができた。

Step 2 オンデマンドにて授業配信

体力がもたずに早退をする生徒など、授業を継続して受けることが難しい生徒に対して、オンデマンドで授業配信をしたり、授業内容がわかる画像を送信したりした。(アプリ「class room」使用)



左は、私が担当している国語の授業においてアプリ「Google Classroom」にてやりとりをした様子である。

早退をした生徒が自宅で添付ファイルを開き、授業での新聞作りの進捗を確認している。生徒達のコメントは、「明日頑張ります」「ファイト」など、前向きな言葉が並ぶ。生徒同士のコミュニケーションの場にもなった。

授業内容に見通しをもつことができていることから、登校できた際にはスムーズに新聞作りに取りかかることができた。

この事例を担当や各教科担当教員と共有し、Google Classroom の効果的な活用方法について随時話し合った。欠席した全ての授業を Google Classroom にて生徒に配信することは、生徒の体力の面で負担になることや、心理面で焦燥感や不安感をかきたててしまう恐れがあるという共通認識をもった。どの授業を配信するかについては、担任が本人及び保護者と話し合い、調整をしていくことになった。

Step 3 自宅にいる生徒とのオンライン授業

令和5年度に、Step 2まで実践できたことを踏まえ、令和6年度からはいよいよ自宅にいる生徒とのオンライン授業を実施することとなった。Step 2までの実践で、生徒も教員も遠隔授業を実施するための手順やどのような場合に実施することが効果的かを捉えることができていたため、自宅とのオンライン授業は円滑に取り組むことができた。



病状により戸外での活動は難しい生徒が、地域の伝統的な祭りである「松明あかし」の学校行事へオンラインにて参加した。祭りの会場へタブレット端末、ポケット Wi-Fi を持っていき、自宅へいる生徒へ無事配信することができた。

また別の生徒には、音楽の授業をオンラインにて行った。オンラインで参加した授業については、本人の感想も含めて担任が記録をとっており、評価の対象とすることができた。

【オンライン実施前の評価】

○歌唱「旅立ちの日」 ○鑑賞「オペラ（アイーダ）」 ○創作「リズムパターンをつくろう」
学 習 所 見
授業に参加することができなかった。

【オンライン実施後の評価】

○器楽「リコーダーで表現しよう」 ○歌唱「浜辺の歌」 ○楽典	B A B
学 習 所 見	2 年
オンラインも含めて出席の機会を増やすことができた。定期考査では、与えられた課題をしっかりと行い、理解を深めて結果につなげることができた。特に楽典では、記号の読み方や意味をしっかりと押さえることができていた。	知識・技能 B

(3) 個に応じた指導をするために～自立活動の指導の充実～

教育的ニーズを踏まえ個に応じた指導を行うためには、特別支援学校の指導の土台となる「自立活動」の指導目標や指導内容の設定が重要であるため、自立活動の指導の見直しを行うこととした。

①自立活動の個別の指導計画の様式変更

実態から課題の抽出、目標、指導内容へと関連付けて設定できるような様式へと変更した。

②作成した個別の指導計画の活かし方を検討

「スタッフ会議」を定期的実施し、生徒の実態把握等を行っているが、これまでは個別の教育支援計画をもとに話し合いを行っていた。自立活動の指導計画を中心とした話し合いをもつように変更した。

上記①、②により、指導内容を学部教員全員で考え、より個に応じた指導ができるようになった。特に、「スタッフ会議」での活用は、話し合いの焦点化ができるようになり、有意義な時間となった。



【自立活動の授業の様子】

3 実践の成果と課題

大きな成果としては、登校することが難しい場合でも工夫をすれば学習が継続できるということを、生徒も教員も実感できたことである。何のために、どこで、どのような学習をするのか、教員側からの一方向ではなく、生徒と相談をしながら進めてきた。その結果、あえて遠隔の授業を行わなかったケースもある。

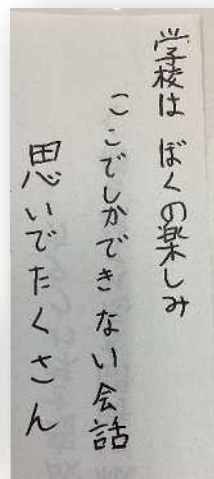
また、「生徒の学びをなんとかして継続させたい。」という思いをもって取り組んできた。それは学部教員全員の願いでもある。そのため、生徒の学びを保障するために教師間で話し合い、実践を重ねながら学部の指導体制を整えてきたことで、教員間での理解が深まり、協力し合うことが増えた。生徒の病状や心理的な状態などを的確に捉えるために教員間のコミュニケーションが増え、生徒理解において多角的な視点をもつことができた。これらは自立活動の指導を大切にしてきたことと大きく関連していると考えられる。

学びの場の多様化により、生徒においては学習意欲を持続でき、安心して生活を送ることができる材料の一つとなった。学びの場が複数あり選択できるということは、自分を表現できる場があるということにつながった。生徒は少しずつ自分の思いを表現できるようになり、不登校だった時の辛かった思いを文章で述べ、発表した生徒もいる。

世の中には 傷つける人と傷つけられる人がいます。皆さん、頭がおかしい奴はどちらだと思いますか。
それはもちろん「傷つける人」です。そんな人になるよりも、人の心を持った人間である方がよっぽどマシです。
この言葉を読むと ちゃんと人の心を持っている僕はえらい と思えます。

【登校できなかった日々を思い出して書いた文章】

一方、課題としては、病気の影響で学習に対し意欲をもつことができない場合もある。学校とつながる糸口を見出すことが難しいケースもある。また、卒業後の進路についても課題が残る。福祉や医療と連携を図りながら今後も取り組んでいきたい。



【入院や自宅療養で登校日が限られている生徒の作品】